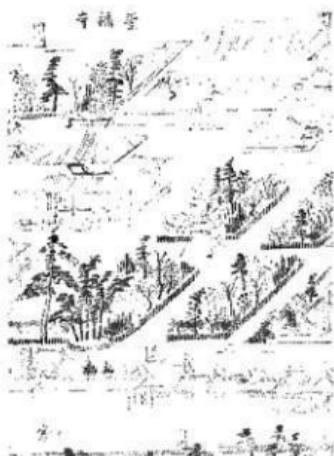


博多 40

—博多遺跡群第76次調査の報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第332号



1993

福岡市教育委員会

博多40

—博多遺跡群第76次調査の報告—



遺跡略号 HKT-76

遺跡調査番号 9137

1993

福岡市教育委員会



第5面完掘状況(南西から)



SG354完掘状況(北東から)

序

JR博多駅から博多湾をのぞむ一帯は、弥生時代以来、大陸文化の流入の門戸として栄えたところであり、特に中世には貿易都市「博多」として繁栄しました。

近年は、福岡都市圏の窓口として再開発が急速に進展している状況があり、それにともなって、すでに80次以上の発掘調査が実施されております。大量の輸入陶磁器をはじめとする多種多様な出土遺物は、まさに国際貿易都市「博多」の繁栄を彷彿とさせます。

今回調査いたしました第76次調査では、主に鎌倉から江戸時代の遺構と遺物が出土しましたが、特に室町時代初期の聖福寺境内の北西限推定の根拠となりうる、道路状もしくは築地塀の基礎遺構が検出されるなど、重要な成果をあげることができました。本書はこれらの調査成果について報告するものであります。

本書が、市民の皆様にとって、郷土の文化財保護に対する認識と理解を深めるための一助として、また学術研究において大いに活用されることを願っております。

なお発掘調査から整理・報告書作成までの間には、多くの方々のご指導とご援助、ご協力をいただきました。記して心からの感謝の意を表します。

平成5年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 井 口 雄 哉

例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会が平成3年度から4年度にかけて実施した博多遺跡群第76次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書に使用した方位はすべて磁北である。真北からの偏差は西偏 $6^{\circ} 40'$ である。
3. 本文中の遺構番号は第1面から第5面をとおして検出順に3ヶタの通し番号をつけた。本文中および図面において遺構の性状を表記するために番号の前に略号を付した。遺構略号は下記のとおりである。

SA: 墓列・坑列 SF: 石組遺構 SK: 土壙墓・木棺墓
SB: 扁立柱建物 SG: 道路・塗造構造 SP: 柱穴
SD: 槽 SH: 建物基礎遺構 SX: 墓糞用土壙・戸戸掘方
SE: 井戸 SJ: 墓窓 または性格不明の土壙
T: トレンチ 包含層

4. 掲載した遺物には、種類、材質、出土遺構の別を問わず掲載順に通し番号を付した。
5. 本書に掲載した遺構の実測は高浪信夫・田中謙夫・山口亨・安藤慎・李景黒が、遺物の実測は主として田中が行い、一部を宮園豊美枝・桐田八千恵が、また安部国憲・山口英子・熊本義彦が拓本を探り、田中・宮園・堀が製図・トレースをした。
6. 本書に掲載した遺構・遺物の写真は田中が撮影した。
7. 本書の編集・執筆は、田中が宮園の協力を得て行なった。
8. 博多遺跡群第76次調査にかかるすべての出土遺物、記録類は福岡市埋蔵文化財センターに保管されている。

調査番号	9137	遺跡名	博多76次	遺跡略号	HKT-76
所 在 地		調査面積	調査期間		
福岡市博多区上呉服町596他		360m ²	1991.11.06～1992.04.12		

貴重の歴史は田中大藏校訂『眞跡名所證』から転載

本文目次

頁

第Ⅰ章 はじめに..... 1

(1) 調査に至る経過..... 1
(2) 調査の組織..... 1

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境..... 2

(1) 位置と環境..... 2
(2) 既往の調査..... 4

第Ⅲ章 発掘調査の記録..... 7

(1) 調査の概要
1 調査区の設定..... 7
2 土層堆積状況..... 7
3 遺構・遺物の概要..... 8
(2) 調査の記録
1 第1面の調査..... 9
2 第2面の調査..... 21
3 第3面の調査..... 32
4 第4面の調査..... 51
5 第5面の調査..... 71
6 第6面の調査..... 87

第Ⅳ章 おわりに..... 95



挿図目次

- Fig. 1 博多遺跡と周辺の遺跡分布図(1/25000)
2 博多遺跡群調査地点位置図(1/6000)
3 76次調査地点位置図(1/500)
4 76次調査区北壁西側土層堆積状況面
(南から)
5 北壁土層断面図(1/80)
6 第1面完掘状況(西南から)
7 SX008出土物状況(南東から)
8 SX008出土遺物
9 SX008平面及び断面図(1/40)
10 第1面遺構分布全体図(1/80)
11 出土遺物実測図(1/3・1/4) (SX006-019)
12 SX009平面及び断面図(1/40)
13 SX008出土遺物(1/6)
14 SX009出土遺物(1/5)
15 SJ014-028平面及び断面図(1/20)
16 SE013平面及び断面図(1/60)
17 SX030完掘状況(北西から)
18 SX030平面及び断面図(1/40)
19 出土遺物実測図(1/3・1/4)
(SX020-027-029-032-041-042-045)
20 SX031-SD040-SD050完掘状況(南東から)
21 SX031出土遺物(1/6)
22 SX049出土遺物(1/6)
23 SD050出土遺物(1/8)
24 SX031-SD040-SD050平面及び断面図
(1/50)
25 SX033平面及び断面図(1/40)
26 SX033完掘状況(南東から)/石組基礎部分
(手前はSX086)
27 SX033出土遺物
28 SX041平面及び断面図(1/40)
29 SX041出土遺物(1/6-1/8)
30 出土遺物実測図(1/3・1/4)
(SX047-050-051)
31 SE042平面及び断面図(1/60)
(井筒裏込め043-掘方044)
32 SE042出土遺物(1/7)
33 SX044出土遺物(1/7)
34 SX045平面及び断面図(1/40)
35 SX045出土遺物(1/6)
36 SX046平面及び断面図(1/40)
37 SX046出土遺物(1/6)
38 出土遺物実測図(1/3) (SX408)
39 SX408出土遺物(上1/5-下約1/7)
40 出土遺物実測図(1/3) (包含層SX409)
41 SX409出土遺物(1/6)
42 第2面完掘状況(南西から)
43 SX052-053平面及び断面図(1/40)
44 SX052出土遺物(1/6)
45 SX053出土遺物(1/6-1/8)
46 出土遺物実測図(1/3・1/4)
- (SX052~054-056-057-062-065)
47 第2面遺構分布全体図(1/80)
48 SX054-055完掘状況(西南から)
49 SX054-55平面及び断面図(1/40)
50 SX054出土遺物(1/6-1/4)
51 SX055出土遺物(1/5)
52 SX060完掘状況(北から)
53 SX060平面及び断面図(1/40)
54 SX064出土遺物(1/6)
55 SX063-064平面及び断面図(1/40)
56 SX065平面及び断面図(1/40)
57 SX065出土遺物(1/2.5-1/5)
58 SF072完掘及び遺物出土状況(北西から)
59 SF072平面及び断面図(1/50)
60 SX078平面及び断面図(1/40)
61 SX078出土遺物(1/6-1/4)
62 出土遺物実測図(1/3・1/4)
(SX078-086-087-092-096-104-111)
63 SX086出土遺物(1/5)
64 SX086平面及び断面図(1/50)
65 SJ091平面及び断面図(1/20)
66 SX092平面及び断面図(1/50)
67 SX092出土遺物(1/6)
68 SX093平面及び断面図(1/40)
69 SX093完掘状況(北から)
70 SX095完掘及び遺物出土状況(北東から)
71 SX092平面及び断面図(1/40)
72 SX096平面及び断面図(1/50)
73 SX096出土遺物(1/5)
74 SX112-114平面及び断面図(1/50)
75 SX114完掘状況(北西から)
76 SX410出土遺物(1/6)
77 出土遺物実測図(1/3) (SX410)
78 SX411出土遺物(1/5)
79 出土遺物実測図(1/3) (SX411)
80 SX412出土遺物(1/5)
81 出土遺物実測図(1/3) (SX412)
82 第3面完掘状況(南西から)
83 第3面遺構分布全体図(1/80)
84 第3面南東部完掘状況(南西から)
85 第3面南東部遺構分布状況(南東から)
86 SD196及び周辺遺構(南東から)
87 SH121検出状況(南から)
88 SE120平面及び断面図(1/40)
89 SE120完掘状況(北東から)
90 SE120出土遺物(1/5)
91 出土遺物実測図(1/3-1/4) (SE120)
92 SH121周辺調査風景(東南東から)
93 SH121-SE120完掘状況(南東から)
94 SH121掘方土層断面図(1/50)
95 SH121横断土層断面
(調査区東壁土層堆積状況)(南西から)
96 出土遺物実測図(1/3)
(SH121-122, SX123-124)

- 97 SH121出土遺物(1/5)
 98 SX122平面及び断面図(1/40)
 99 SX122出土遺物(1/5)
 100 SX126出土遺物(1/6)
 101 SX126・128平面及び断面図(1/40)
 102 出土遺物実測図(1/3)(SX126)
 103 SX124(129)平面及び断面図(1/40)
 104 SX124(129)遺物出土状況(東から)
 105 SX124(129)出土遺物(1/5)
 106 SX131～134完掘及び遺物出土状況
 (南東から)
 107 SX131・132平面及び断面図(1/40)
 108 SX134出土遺物(1/5)
 109 出土遺物実測図(1/3)
 (SX130・131・134・135)
 110 SX128・135・137平面及び断面図(1/50)
 111 SX137出土遺物(1/5)
 112 出土遺物実測図(1/3・1/4)
 (SX137・138・140)
 113 SX138・140・152・153平面及び断面図
 (1/50)
 114 SX152・160出土遺物(1/5)
 115 出土遺物実測図(1/3)
 (SX144・152・153・191・197)
 116 SX155・156・160平面及び断面図(1/50)
 117 出土遺物実測図(1/3)
 (SX155・160・164・165)
 118 SX162・164～166平面及び断面図(1/40)
 119 SX160完掘状況(南西から)
 120 SX171出土遺物(1/5)
 121 SX174出土遺物(1/5)
 122 出土遺物実測図(1/3)
 (SX168・171・173・174)
 123 SX170・171・175平面及び断面図(1/40)
 124 SX175出土遺物(1/5)
 125 出土遺物実測図(1/3・1/4)(SX175)
 126 SX173平面及び断面図(1/40)
 127 SX173出土遺物(1/5)
 128 SX176平面及び断面図(1/40)
 129 出土遺物実測図(1/3)(SX176)
 130 出土遺物実測図(1/3)(SX185・186)
 131 SX187平面及び断面図(1/40)
 132 SX187出土遺物(1/7)
 133 出土遺物実測図(1/4)(SX187)
 134 出土遺物実測図(1/5)(SH121, SX191・194)
 135 SX121出土遺物(1/5)
 136 SX191出土遺物(1/4)
 137 SX194出土遺物(1/4)
 138 SX195平面及び断面図(1/40)
 139 SD196土層断面図(1/40)
 140 出土遺物実測図(1/3)
 (SD196・SX198)
 141 SD196出土遺物(1/5)
 142 出土遺物実測図(1/3)(SX406・414)
 143 SX406出土遺物(1/5)
 144 SX413出土遺物(1/5)
 145 出土遺物実測図(1/3)(SX414)
 146 SX414出土遺物(1/5)
 147 第4面完掘状況(南東から)
 148 第4面遺構分布全体図(1/80)
 149 第3面から4面への掘り下げ作業(北から)
 150 第4面掘り下げ作業(北北西から)
 151 西側壁面土層堆積状況(南東から)
 152 第4面北西部掘立柱建物検出状況
 (南から)
 153 掘立柱建物平面及び断面図(1/80)
 154 SX203遺物出土状況(南西から)
 155 SX203平面及び断面図(1/40)
 156 出土遺物実測図(1/3)(SX203, SP213)
 157 SX210・211・217平面及び断面図(1/50)
 158 SK222完掘状況(北東から)
 159 SK222平面及び断面図(1/40)
 160 SK222出土遺物(1/5)
 161 出土遺物実測図(1/3)(SK222)
 162 SD214土層断面図(1/50)
 163 SD214遺物出土状況(南から)
 164 SD214出土遺物
 165 SD214出土遺物(1/5)
 166 出土遺物実測図(1/3・1/4)(SD214)
 167 出土遺物実測図(1/3・1/4)(SD214)
 168 SD214出土遺物
 169 SX263平面及び断面図(1/40)
 170 SP262出土遺物
 171 出土遺物実測図(1/3)(SP241・262, SX263)
 172 SF266完掘状況(南東から)
 173 SF266出土遺物(1/5)
 174 SF266平面及び断面図(1/40)
 175 出土遺物実測図(1/3)(SF266)
 176 SX267・269平面及び断面図(1/40)
 177 出土遺物実測図(1/3)(SX267)
 178 SX279・283平面及び断面図(1/50)
 179 出土遺物実測図(1/3・1/4)(SX274・278)
 180 SX276群出土状況(南西から)
 181 SX276出土遺物(1/5)
 182 SX276出土遺物(1/5)
 183 出土遺物実測図(1/3・1/4)(SX276)
 184 SX286(287・288)遺物出土状況(南東から)
 185 SX287出土遺物(1/5)
 186 SX286(287・288)平面及び断面図(1/40)
 187 出土遺物実測図(1/3)(SX286)
 188 出土遺物実測図(1/3・1/4)(SX287・288)
 189 SF289平面及び断面図(1/40)
 190 SF289完掘状況(南西から)
 191 SF298平面及び断面図(1/40)
 192 出土遺物実測図(1/3)(SF298)
 193 SF298出土遺物(1/5)
 194 SX311遺物出土状況(南西から)
 195 SX300・311平面及び断面図(1/40)

- 196 出土遺物実測図(1/3)(SX300)
 197 出土遺物実測図(1/3)(SX311)
 198 SX328-303平面及び断面図(1/40)
 199 SX303出土遺物(1/5)
 200 SX306平面及び断面図(1/40)
 201 出土遺物実測図(1/3)(SP302, SX303-306)
 202 第4区SX306周辺作業風景(北から)
 203 SX307, SK313, SX317平面及び断面図
 (1/40)
 204 SX307, SK313, SX317周辺遺構分布
 (南東から)
 205 出土遺物実測図(1/3)(SK313, SE323, T325)
 206 SE323出土遺物(1/5)
 207 SX326完掘状況(南東から)
 208 SX326出土遺物(1/5)
 209 SX326平面及び断面図(1/40)
 210 出土遺物実測図(1/3・1/4)(SX326)
 211 SD214内柱根出土状況(南東から)
 212 第4区北側作業風景(南から)
 213 SX330平面及び断面図(1/40)
 214 出土遺物実測図(1/3)(SX330)
 215 SX415出土遺物(1/5)
 216 SX416出土遺物(1/5)
 217 調査区東壁北側土層断面(南西から)
 218 第5面完掘状況(南西から)
 219 第5面・6面遺構分布全体図(1/80)
 220 第4面SE337上部掘り下げ状況(北東から)
 221 SE337井筒検出状況(東から)
 222 SE337出土遺物(1/6)
 223 SE337平面及び断面図(1/50)
 224 出土遺物実測図(1/3)(SE337)
 225 SX339平面及び断面図(1/50)
 226 SX339出土遺物(1/5)
 227 SX339出土遺物(1/5)
 228 出土遺物実測図(1/3)(SX339)
 229 SX342-344平面及び断面図(1/40)
 230 出土遺物実測図(1/3)(SX341)
 231 出土遺物実測図(1/3)(SX340)
 232 SX340出土遺物(1/3)
 233 SX340出土遺物(1/5)
 234 SE345-390井筒出土状況(東から)
 235 SE345-390平面及び断面図(1/50)
 236 出土遺物実測図(1/3)(SX346)
 237 SE390出土遺物(1/3・1/6)
 238 SE345(SX346)出土遺物(1/5)
 239 SX363出土遺物(1/4・1/5)
 240 SG354西側溝土層断面(南壁・北東から)
 241 SG354西側溝(SD355-356-403)
 掘り下げ状況(東から)
 242 SG354上面作業風景(北から)
 243 SG354(赤褐色土層)出土遺物(1/5)
 244 出土遺物実測図(1/3)(SG354)
 245 SD355出土遺物(1/5)
 246 SX359出土遺物(1/5)
 247 出土遺物実測図(1/3)(SD355, SX359)
 248 SG354基底部検出状況(東北東から)
 249 SG354基底部完掘状況(東北東から)
 250 SG354横断土層断面図(1/50)
 251 SE352井筒検出状況(南西から)
 252 SE352井筒板材小口加工状況(南西から)
 253 出土遺物実測図(1/3)(SP351, SE352)
 254 SE352平面及び断面図(1/50)
 255 SX384完掘状況(南から)
 256 SX384-386-389平面及び断面図(1/40)
 257 SX364出土遺物(1/5)
 258 出土遺物実測図(1/3・1/4)
 (T361-365, SX364-384-388-389, SP367)
 259 SX393完掘状況(南西から)
 260 SX393平面及び断面図(1/40)
 261 SX401完掘状況(北西から)
 262 SX401平面及び断面図(1/40)
 263 SX401出土遺物(1/5)
 264 出土遺物実測図(1/3)(SX405)
 265 SX405出土遺物(1/5・1/8)
 266 第6面完掘状況(南西から)
 267 第5面検出SX402上部砾石群(北から)
 268 出土遺物実測図(1/3)(SX402)
 269 SX402完掘状況(北から)
 270 SX402平面及び断面図(1/40)
 271 SX392出土遺物(1/5)
 272 出土遺物実測図(1/3)(SX392)
 273 出土遺物実測図(1/3)(SX404)
 274 SX404出土遺物(1/5)
 275 SX422出土遺物(1/5)
 276 出土遺物実測図(1/3)(SX422)
 277 各遺構出土銅錢拓影(2/3)
 278 各遺構出土土鉢(1/4)
 279 各遺構出土土人形(1/5)
 280 各遺構出土土人形(1/5)
 281 各遺構出土土鏡(1/5)
 282 各遺構出土瓦(軒平瓦・磚)(1/5)
 283 各遺構出土瓦(軒丸瓦当)(1/5)
 284 各遺構出土石硯・砥石(1/5)
 285 各遺構出土滑石製石鍋片(1/5)
 286 各遺構出土滑石製石鏡(1/5)
 287 各遺構出土ガラス小玉(3/4)
 288 各遺構出土かんざし・紅皿・矢はず(1/5)
 289 曲物底板
 290 第76次調査・周辺道路遺構分布図
 (1-2000)
 291 中世後期博多推定復原図(約1/13000)

表目次

Tab. 1 博多遺跡群調査地点一覧

Tab. 2 出土銅錢一覧表

第Ⅰ章 はじめに

(1) 調査に至る経過

博多遺跡群は、昭和52年の地下鉄工事に伴う本格的な発掘調査の開始以来すでに80次近くの調査が実施されている。発掘調査はそのほとんどが民間の社屋ビルやテナントビルの新築や、改築などに伴うものであり、特にここ数年の急速な都市再開発の進展に比例して調査件数が著しく増加している。

平成3年5月21日に、三井不動産株式会社福岡支店支店長深谷宣義氏から本市市教育委員会宛てに、博多区上呉服町594～596、614、600-1における埋蔵文化財事前審査願が提出された。開発の内容は当該地に事務所ビルを新築するというものである。これを受け教育委員会では図面審査の結果、博多遺跡群のほぼ中央に位置することを確認し、遺跡の遺存状況を把握する必要から同年6月15日に試掘調査を行なった。調査の結果、当該地には現地表面から約4m以上の深さで中世から近世にかけての遺構と遺物が遺存していることが確認でき、開発にあたっては発掘調査が必要であると判断された。これを踏まえて、教育委員会は三井不動産と協議を行い、同年11月6日から本調査を実施する運びとなった。

(2) 調査の組織

第76次調査にあたっては以下の組織で行なった。

調査委託	三井不動産株式会社九州支店		
調査主体	福岡市教育委員会 教育長 井口雄哉		
調査総括	埋蔵文化財課長	折尾学	
	埋蔵文化財第2係長	塩屋勝利	
調査庶務	埋蔵文化財第1係	中山昭則	寺崎幸男 吉田真由美
事前審査	文化財主事	横山邦繼	加藤良彦 吉武学
調査担当	埋蔵文化財第2係	田中壽夫	
調査・整理作業			
岩隈史郎	上野拓治	岡部泰朗	金子国雄 金沢春雄 熊本義憲 近藤誠一 柴田博
篠崎伝三郎	芹野謙蔵	高崎秀巳	高田勘四郎 高浪信夫 寺田恒夫 三浦義隆
森垣隆視	森山恭助	山口亨	脇田栄
石橋政子	石橋優子	近藤澄江	菊地智恵 津川真千代 寺園恵美子 山本かおる
村田敬子	森山タツエ	柳瀬伸	吉住シズエ 萬スミヨ

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

(1) 位置と環境

博多遺跡群の立地と概観 博多湾に向かって形成された福岡平野は、南北に延びる洪積世台地と沖積平野からなり、北は博多湾に面し、北東部から東部にかけては三郡山系に、南部を背振山系に囲まれている。この平野の北縁を流れる御笠川と、ほぼ中央を流れる那珂川はその河口を接して博多湾に流入している。一方、博多湾岸には、大小の河川から排出される冲積砂を供給源とする古砂丘が、湾内をめぐる左転迴流により点々と帶状に形成されているが、博多遺跡群はこの両河川に挟まれた古砂丘上に立地している。遺跡群は、博多駅から築港へ向う通称「大博通り」を中心にして東西に約1km、南北に約1.5kmの範囲に展開しており、標高は現在の地表面で4~6mを測る。博多遺跡群は、弥生時代から古代、中世を経て、近世まで連続と継続する遺跡である。弥生時代には、中世において「博多濱」と呼ばれた古砂丘の頂部に中期前半の集落や墓地が営まれ、後期には南側斜面に集落の拡大をみる。

古墳時代になると、砂丘の海岸への拡大にともない、集落が北側に展開しだすようになり、方形周溝墓や竪穴住居跡が確認されている。しかしこの時期の遺跡の中心は先に述べた「博多濱」側にあり、祇園町交差点およびその周辺においては、集落跡や方形周溝墓の他に墳丘全長が56m以上と想定される5世紀の前方後円墳が検出されている。

筑紫国造幣井の乱の後の「那の津」の官家設置（536年）はその後の博多の性格を規定する。奈良から平安時代においては、「博多濱」全域に当該期の遺構と遺物が散見できるようになり、鴻臚館式瓦や老司式瓦、皇朝十二錢、円面鏡、石帯、綠釉陶器、灰釉陶器、越州窯系青磁などの出土例は、対岸の荒津の浜に置かれた鴻臚館とともに体外交渉の公的な拠点もしくは鴻臚館とは補完関係にあるなんらかの施設の存在を想起させ、さらにその後の私的貿易の拠点となる状況がすでに醸成されていたことが考えられる。

博多遺跡群がその特色を示すのは古代末から中世においてである。特に中世後期においては、泉州堺と並ぶ貿易都市として繁栄した。出土する遺構・遺物はこの時期のものが最も多く、輸入陶磁器の出土量の多さは当時の交易の盛行ぶりを大いに物語っている。

鎌倉時代になるとすでに陸化していた「沖の濱」の開発が進み「博多濱」と一体化し、中世都市の原形を形づくる。特に聖福寺や承天寺などの禅寺の建立はその後の博多の都市景観のベースになるとされている。室町時代には九州探題が置かれるが、幕府権力の衰退とともに對明貿易の権益をめぐり、小氏氏、大友氏、大内氏らによって争われ、そのたびに博多は炎をこうむる。戦国末期の1586年（天正14年）、島津氏の焼き討ちにより博多は灰燼に帰して

しまう。博多はその後豊臣秀吉によって、「太閤町割り」が施工され、箱崎とともに朝鮮出兵の兵站基地として復興されるが、江戸時代初期の1693年（明正16年）、鎮国令によって、対外交渉の窓口として千数百年の歴史を誇っていた博多は、その役割を長崎の出島に取って代されることになる。

第76次調査地点の位置 今回の調査地点は、博多遺跡群の中央にあたるが、地形上は北西に向かって緩やかに低くなっている「博多濱」の北西縁にあたる地点である。この地点は「博多濱」と「沖の濱」と称される二つの砂丘がつながる陸橋部分に近く（現呉服町交差点）、故中山平次郎氏の論考以来「袖の湊」と比定されていた一帯の南側に近接している。地下鉄呉服町工区の調査によって、11世紀後半にはすでに陸化していることが明らかとなり、その説は再検討を余儀なくされているが、その再確認も含めて、「博多濱」の地形復元にとって重要な地点にあたっているといえよう。また聖福寺境内の北西部に近接していると思われ、中世前期から後期における境内復元、博多の中世町割り復元にとっても重要な調査地点といえる。

(2) 既往の調査

博多遺跡の本格的な発掘調査は、昭和52年（1977）の市営地下鉄工事に伴う祇園町工区の調査が最初である。地下鉄開通以後、都市計画道路博多駅築港線に沿って、道路の拡幅工事や高層ビルの建設ラッシュが生じた。連動して祇園町や呉服町周辺で社屋ビルやテナントビルの改築などを中心とした再開発が進んでいる。これらにともない博多遺跡群の調査も件数が増し、平成4年3月末現在で77次の調査が実施されている。

第17・20・24・27・32次調査では古墳時代の竪穴住居跡、方形周溝墓が確認され、特に第17次調査では玉造工房跡が、第28次・31次調査では前方後円墳（博多第1号墳）が確認できた。出土遺物には山陰系や東海系の土器がかなりみられ、博多に搬入される契機とその意義が問われている。博多第1号墳は、5世紀初頭の那珂川流域に展開した首長墓の一つと考えられる。博多の町割りの復元を進めるにあたって道路状遺構や溝状遺構が検出されている。（3次・8次・14次・26次・28次・33次・35次・40次調査など）。町割りの初源期の遺構は、現祇園町周辺で確認されており、奈良時代までに遡る可能性が指摘されている。面的な広がりを持ち出すのは14世紀前半以降であり、「太閤町割り」とは明らかに方向性の異なる二種の方向性を持つ遺構群があり、それらが当時の地形にそって「博多濱」側において形成されていることが確認されており、また聖福寺や承天寺の境内の方向性に少なからず規制され、複合的に形成されていたことも文献史学の観から指摘されているが、発掘の成果との摺り合わせが今後とも必要であろう。「沖の濱」側では考古学的な成果に乏しいが、佐伯弘次氏は、中世後期の博多の発展は、沖の濱が独自の都市領域を構成しながら主として担っていたことを指摘しており、遺構・遺物にそれがどのように反映されるものか、今後の調査に期待されるところである。

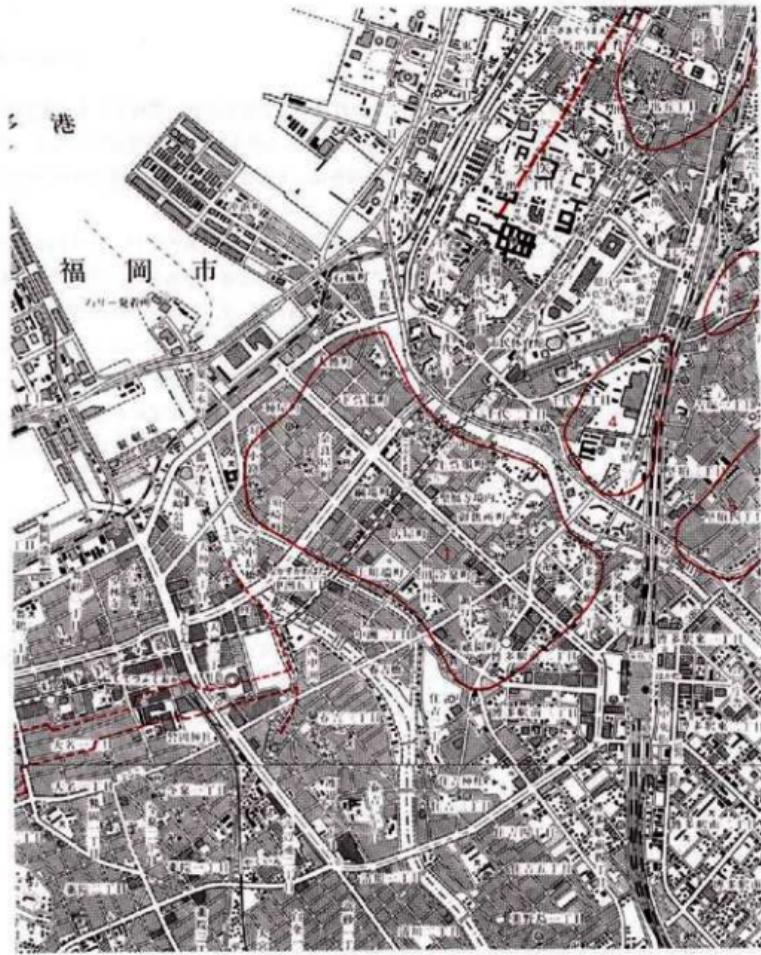


Fig.1 博多遺跡と周辺の遺跡分布図 (1/25000)

- | | |
|----------|--------------|
| 1. 博多遺跡群 | 5. 堅粕東遺跡群 |
| 2. 箱崎遺跡群 | 6. 元寇防堀 |
| 3. 吉塙遺跡群 | 7. 福岡城址(肥前城) |
| 4. 堅粕遺跡群 | |

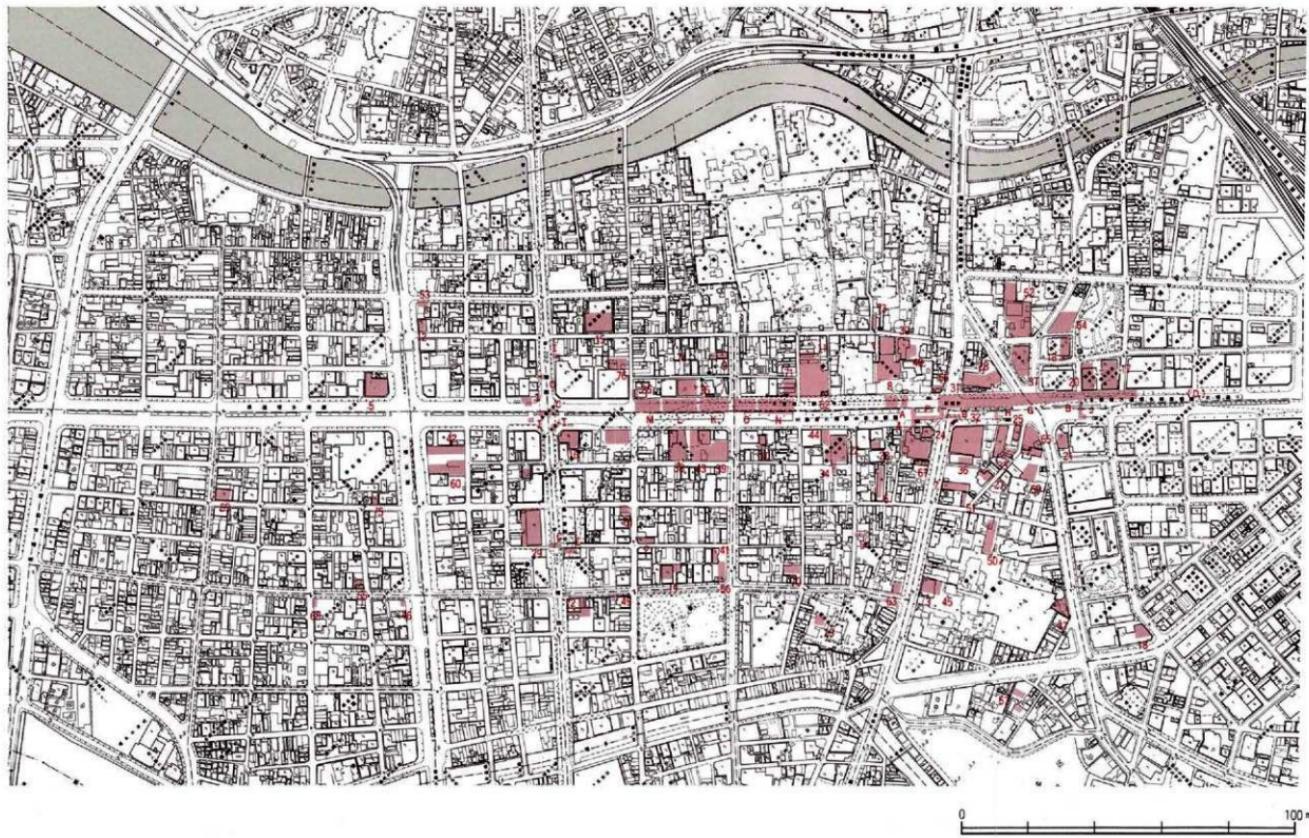


Fig.2 博多遺跡群調査地点位置図 (1/6000)

Tab. 1 博多遺跡群調査地点一覧(1992年3月31日現在)

公共事業関係

番号	調査番号	調査原因	所在地	調査面積(m ²)	調査期間	報告書	備考
A	7725	地下鉄建設	御供所町	1,412	77.12~78.11	高速鉄道N・V	店尾町工区・本体部A・B
B	7833	"	御供所町他	4,500	79.3~12	高速鉄道VI・VII	紙園町工区・E~Q
C	7835	"	店尾町・上糸服町他	200	78.11~79.5	高速鉄道VIII	典膳町工区
D	7949	"	博多駅前1丁目他	4,500	79.12~80.8	高速鉄道IX	博多駅前工区
E	8037	"	上糸服町	100	81.3	高速鉄道X	典膳町換気塔
F	8038	"	冷泉町・紙園町	435	80.10~12	高速鉄道XI	紙園町2・3号出入口
G	8148	"	御供所町	70	81.9	高速鉄道XII	紙園町4号出入口
H	8149	"	紙園町	184	81.10~11	高速鉄道XIII	紙園町5号出入口
I	8150	"	上糸服町・典膳町	380	81.4~5	高速鉄道XIV	典膳町出入口
J	8435	"	博多駅前2丁目	215	84.4	高速鉄道XV	紙園町P2出入口
K	8224	道路整備	上糸服町	630	81.11~83.3	築港線I	築港線第1次
L	8331	"	"	564	84.2~9	築港線II	築港線第2次
M	8404	"	"	417	85.1~12	築港線III	築港線第3次
N	8527	"	御供所町	383	85.12~86.5	築港線IV	築港線第4次
O	8653	"	"	380	86.10~87.2	築港線V	築港線第5次

民間事業関係

次数	調査番号	調査原因	所在地(博多区)	調査面積(m ²)	調査期間	報告書	備考
1	7810	納骨堂建設	御供所町・東長寺境内	360	78.11~79.1		本調査
2	7928	ビル建設	店屋町	約100	79.4		立会、上層団作成
3	7929	納骨堂建設	紙園町・萬行寺境内	240	79.11		本調査
4	7930	ビル建設	冷泉町7-1	1,100	79.12~80.3	博多I・II・III	本調査
5	7931	"	下糸服町346		79.12		試掘調査
6	7932	"	冷泉町155	640	80.3~4		本調査
7	8023	"	紙園町130	210	80.6~8		本調査
8	8024	木堂建設	御供所町・東長寺境内	600	80.8~10		本調査
9	8025	ビル建設	上糸服町75		80.9		試掘調査、礎石出土
10	8026	"	冷泉町474-9	54	80.12	博多I	本調査
11	8027	"	御供所町3-30		80.12		試掘調査
12	8127	"	中糸服町152・153	81.6			試掘調査
13	8128	"	駅前1丁目21~127		81.7		トレンチ調査
14	8129	"	店屋町4-15	255	81.8		本調査
15	8130	駐車場建設	上糸服町569	100	81.8		試掘調査
16	8131	ビル建設	店屋町246~248	130	81.9		本調査
17	8132	"	駅前1丁目98	910	81.11~82.2	博多III	本調査
18	8156	"	駅前2丁目8~14	82.1			既存施設セーブ(地盤測量)
19	8323	社務所建設	上川端町鶴見神社境内	200	83.4		本調査
20	8324	ビル建設	駅前1丁目99	980	83.3~7	博多III	本調査
21	8325	"	駅前2丁目181他	150	83.5~6	博多III	本調査
22	8327	"	冷泉町189他	840	83.9~84.2	博多III	本調査
23	8334	木堂建設	冷泉町龍宮寺境内	約300	84.2		本調査
24	8433	ビル建設	冷泉町1-1	250	84.4~5	博多IV	本調査
25	8434	"	紙園町1-1	100	84.5~6	博多V	本調査
26	8506	"	上糸服町34	134	85.5~6	博多VI	本調査

第二章 道路の立地と環境

次数	調査番号	調査原因	所在地(西多区)	調査面積(m ²)	調査期間	報告書	備考
27	8507	ビル建設	祇園町1-1	350	85. 5~6	中部埋文報告日	本調査
28	8508	"	御供所町70-2	1,745	85. 5~8	博多	本調査
29	8509	"	祇園町22-67	330	85. 7~9	博多	本調査
30	8605	"	御供所町36-37-38-39	435	86. 5~7	博多	本調査
31	8606	"	御供所町65-66	160	86. 5~7	博多	X 本調査
32	8608	"	祇園町21-1	約1,000	86. 5~7		本調査
33	8618	"	祇園町8他	896	86. 7~11	博多	11 本調査
34	8645	"	冷泉町238-2他	40	86. 10~11		本調査
35	8648	"	上久保町56	655	86. 11~87. 5	博多	12 本調査
36	8725	"	祇園町42他	332	87. 8~10	博多13.同16(補足)	本調査
37	8740	"	西多駅前1丁目129他	1,427	87. 12~88. 3	博多	16 本調査
38	8805	"	店屋町1-30	366	88. 4~8	博多	25 本調査
39	8806	"	店屋町2-3-4他	612	88. 5~8	博多	14 本調査
40	8833	"	祇園町251他	565	88. 9~12	博多	15 本調査
41	8834	"	店屋町4-10	60	88. 9(2回)		本調査
42	8843	"	祇園町8-25	710	88. 12~89. 6	博多	17 本調査
43	8852	"	店屋町8-9	240	89. 1~4	博多	18 本調査
44	8857	"	冷泉町201-3	178	89. 2~3	博多	19 本調査
45	8862	納骨堂建設	祇園町4-50	248	89. 3~6	博多	20 本調査
46	8903	共住建設	古戸門町1	150	89. 4~5	博多	26 本調査
47	8911	ビル建設	祇園町390-2,393	(438)	89. 4		立会
48	8915	共住建設	御供所町40他	263	89. 5~8	博多	27 本調査
49	8916	駐車場建設	上川端町272,273	90	89. 5		本調査
50	8918	共住建設	祇園町317他	730	89. 6~10	博多	21 本調査
51	8925	"	祇園町154-1-2	200	89. 6~7	博多	28 本調査
52	8929	防水工事	博多駅前1丁目155-1	29	89. 6~7		本調査
53	8930	石油所建設	中久保町154他	190	89. 6~7	博多	29 本調査
54	8941	内舗建設	冷泉町2丁目128-2	(99)	89. 7		立会
55	8942	専用所建設	奈良屋町161-1	128	89. 8~9		本調査
56	8943	片倉建設	祇園町4-1他	476	89. 9~90. 2		本調査
57	8947	ビル建設	祇園町557	184	89. 10	博多	22 本調査
58	8948	"	祇園町20-21-1,21-2	70	89. 10	博多	23 本調査
59	8957	駐車場建設	祇園町187-226	226	89. 11~90. 2		本調査
60	8959	ビル建設	祇園町115他	730	89. 11~90. 5	博多	30 本調査
61	8962	共住建設	祇園町182-1-5	95	89. 12~90. 1	博多	24 本調査
62	8963	ホテル建設	御供所町195他		89. 12~91. 2		本調査
63	8974	共住建設	冷泉町90-3他	275	90. 2~4	博多	31 本調査
64	8976	ビル建設	奈多駅前1丁目101	620	90. 2~7		本調査
65	9017	"	祇園町161-1	90.	7~12		本調査
66	9022	"	御供所町129-1他	170	90. 7~9		本調査
67	9028	共住建設	冷泉町1-6	90. 8	博多	29 本調査	
68	9042	老人ホーム	古戸門町98-1他		90. 11~91. 1		本調査
69	9055	事業所建設	奈良屋町267	260	90. 12~91. 1	博多	33 本調査
70	9062	共同住宅	冷泉町338,339,342	571	91. 3~5		本調査
71	9111	ビル建設	御供所町2-35-1	600	91. 5~10		本調査
72	9113	"	上川端町264-2	200	91. 6~7		本調査
73	9120	事務所建設	御供所町15	76	91. 8~9		本調査
74	9126	共同住宅	上久保町131-2	140	91. 9~10		本調査
75	9136	事務所建設	奈良屋町9-1,2	97	91. 11~12		本調査
76	9137	ビル建設	上久保町594	521	91. 11~92. 4.13	博多	40 本調査

第Ⅲ章 発掘調査の記録

(1) 調査の概要

1、調査区の設定

試掘調査によって調査地点の深度は現地表面から-5m以上に及ぶことが予想されたため、建物の立つ範囲にシートパイルを打設した。隣接する木造建物への影響を考慮し北壁の西半分を内側に引いた。調査面積は360m²である。調査区設定終了後に、試掘調査を踏まえて現地表面から-1.5mの面まで施工業者にすき取らせ第1面の精査に入った。基準軸は調査区の形状に合わせ東西に基準線を設定し、これを基に、第1面から第6面を通して調査区全体に2m方眼をかぶせた。東西の基準線は磁北から西偏45°30'である。

2、土層堆積状況

調査区地表面から最下部まで約4mの厚さにわたって人為的な埋土がベースとなる土層が重複して堆積している。これを何世紀にもわたる遺構が切り合いながら掘られているために、明確な生活面を把握するのは不可能に近い。地表面から第2面までは暗灰色～黒褐色粘質土を主体とする土層が西側に強く傾斜しながら堆積している。この下部には厚さ約10cmほどの焼土層

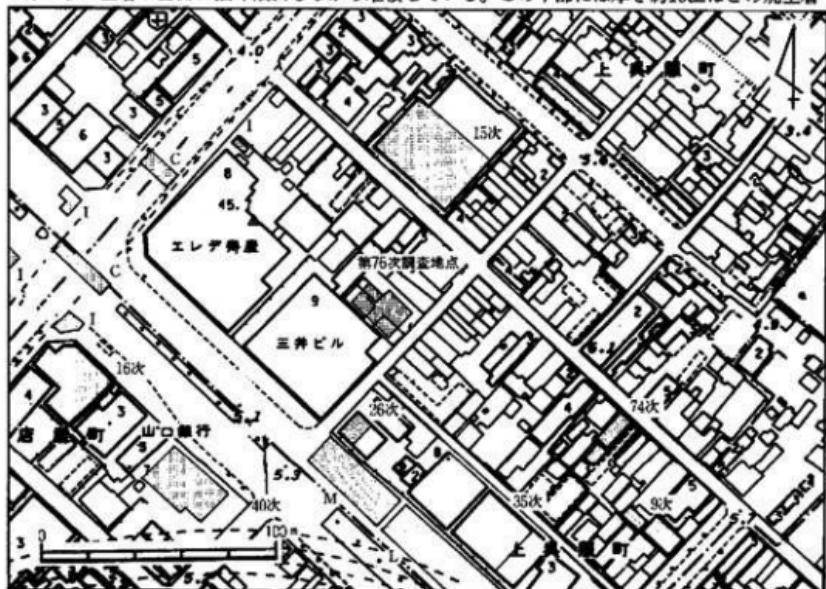


Fig. 3 76次調査地点位置図 (1/500)

があり、版築状に薄く堆積している。標高2.5~4m間に真土や焼土を含む灰褐色土の厚い堆積がみられ、部分的には真砂土と思われる明黄褐色~明灰褐色粗砂が硬く締まっている。これは人為的な整地によるものと考えられ、広範囲にわたる整地が行なわれたことが推測された。第4面で確認された道路状遺構はこの土層の下部から始まるもので、第2面まで連続して版築状の堆積が部分的に確認された。その下部には、約1.5mの厚さで黒灰色砂層を主とした土層が砂(細砂~粗砂)と粘土をはさみながら堆積しており、西側に向かって緩やかに低くなっている。自然堆積の可能性がある。基盤には明褐色粗砂層があり、やや強い勾配で西に向かって落ちる。その上面は調査区西壁近くで標高約-0.50mを測る。



Fig.4 76次調査区北壁西側土層堆積状況（南から）

3、遺構・遺物の概要

発掘調査においては、検出面を第1~6面の6面（一部7面）に便宜上区分し、掘り下げ作業を行なった。各面の概要は下記のとおりである。

第1面：江戸末期~明治期（標高4.6m） 瓦組井戸、石組溜井、不定形竪穴、柱穴多数を検出。古伊万里、古高取、小石原等の陶磁器、瓦質土器、土師器等の日常雑器が多数出土。

第2面：江戸後期（標高4.2m前後） 瓦組・石組井戸、石組溜井、竪穴、柱穴、丸瓦（土管）組下水施設を検出。古伊万里、小石原等の陶磁器、土師器、瓦質土器等の日常雑器、土器、魚骨、海豚、鯨骨が出土。

第3面：室町後期~江戸期（標高3.3m） 瓦組・石組井戸、掘立柱建物、倉庫、廐棄用竪穴を検出。土師器、瓦質土器、朝鮮製陶磁器などが出土。

第4面：室町後期（標高2.5m前後） 桶組井戸、掘立柱建物、廐棄用竪穴、溝、道路もしくは築地塀基礎部分上面等を確認。遺構に伴い、土師器、瓦質土器、輸入陶磁器が多量に出土。

第5面：室町期（標高1.5m前後） 道路もしくは築地塀基礎部分、側溝、桶組井戸を確認。中国・朝鮮製輸入陶磁器、土師器等多数出土。

第6面：鎌倉後期~室町期（標高1.0m） 室町時代の土塙、土塙鎌倉後期の包含層を確認。中国製輸入陶磁器、土師器、瓦器、瓦質土器等多数出土。

第7面：鎌倉期（トレンチ、標高0.6m） 鎌倉時代後期の包含層を確認。

今回の調査では鎌倉時代以降の遺構・遺物を確認することができた。特に第4~5面の道路もしくは築地塀の基礎と考えられる遺構は、その性格と方向性からみて聖福寺の境内の範囲推定、中世博多の町割り復元、さらにその変遷過程を考えるにあたって重要なと思われる。

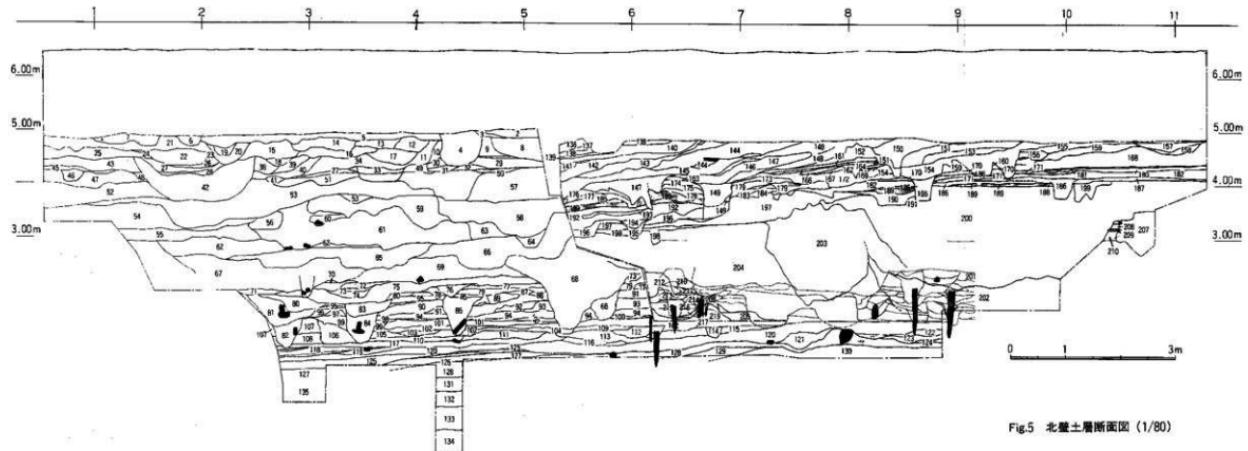


Fig.5 北壁土層断面図(1/80)

調査区北壁土層断面所見

1. 土壌・盛土
2. 黒褐色砂利土層(タイル・瓦・瓦礫を含む)
3. 黒褐色砂質土層(砂・木炭を含む)
4. 黒褐色砂質土層(砂・レンガ・瓦を含む)
5. 黒褐色砂質土層
6. 黒褐色砂質土層
7. 黒褐色砂質土層
8. 黒褐色砂質土層(瓦・繩を多く含む)
9. 黒褐色砂質土層
10. 黒褐色砂質土層(木炭が少く含む)
11. 黒褐色砂質土層(黒褐色砂を含む)
12. 黒褐色砂質土層(黒褐色砂を含む)
13. 深い黒褐色砂質土層(黒褐色砂を含む)
14. 黒褐色砂質土層(木炭・砂利を含む)
15. 黒褐色砂質土層
16. 黒褐色砂質土層
17. 黒褐色砂質土層
18. 黒褐色砂質土層
19. 黒褐色砂質土層
20. 黒褐色砂質土層
21. 黒褐色砂質土層
22. 黒褐色砂質土層(黒褐色砂・砂利を含む)
23. 黑褐色砂質土層
24. 黑褐色砂質土層
25. 黑褐色砂質土層(上部に砂や瓦を多く含む)
26. 黑褐色砂質土層
27. 黑褐色砂質土層
28. 黑褐色砂質土層
29. 黑褐色砂質土層
30. 黑褐色砂質土層(腐植化物を含む) やや砂分濃い
31. 黑褐色砂質土層
32. 黑褐色砂質土層
33. 黑褐色砂質土層
34. 黑褐色砂質土層
35. 黑褐色砂質土層
36. 黑褐色砂質土層
37. 黑褐色砂質土層(腐植化物を含む)
38. 黑褐色砂質土層ブロック層
39. 黑褐色砂質土層
40. 黑褐色砂質土層
41. 黑褐色砂質土層
42. 黑褐色砂質土層
43. 黑褐色砂質土層
44. 黑褐色砂質土層
45. 黑褐色砂質土層
46. 黑褐色砂質土層
47. 黑褐色砂質土層
48. 黑褐色砂質土層
49. 黑褐色砂質土層
50. 黑褐色砂質土層
51. 黑褐色砂質土層(黄褐色砂が全体に混じる砂利を含む。黑褐色砂・黄褐色砂を含む) リンゴ砂利を含む
52. 黑褐色砂質土層
53. 黑褐色砂質土層ブロック層
54. 黑褐色砂質土層(砾下、灰化物・粘土を含む)
55. 黑褐色砂質土層
56. 黑褐色砂質土層(砂利・砂を含む)
57. 黑褐色砂質土層
58. 黑褐色砂質土層
59. 黑褐色砂質土層
60. 黑褐色砂質土層
61. 黑褐色砂質土層
62. 黑褐色砂質土層
63. 黑褐色砂質土層
64. 黑褐色砂質土層
65. 黑褐色砂質土層(黒くしまっていい)
66. 黑褐色砂質土層
67. 黑褐色砂質土層
68. 黑褐色砂質土層
69. 黑褐色砂質土層
70. 黑褐色砂質土層
71. 黑褐色砂質土層
72. 黑褐色砂質土層
73. 黑褐色砂質土層
74. 黑褐色砂質土層
75. 黑褐色砂質土層
76. 黑褐色砂質土層
77. 黑褐色砂質土層
78. 黑褐色砂質土層
79. 黑褐色砂質土層
80. 黑褐色砂質土層
81. 黑褐色砂質土層
82. 黑褐色砂質土層
83. 黑褐色砂質土層
84. 黑褐色砂質土層
85. 黑褐色砂質土層
86. 黑褐色砂質土層
87. 黑褐色砂質土層
88. 黑褐色砂質土層
89. 黑褐色砂質土層
90. 黑褐色砂質土層
91. 黑褐色砂質土層
92. 黑褐色砂質土層
93. 黑褐色砂質土層
94. 黑褐色砂質土層
95. 黑褐色砂質土層
96. 黑褐色砂質土層
97. 黑褐色砂質土層
98. 黑褐色砂質土層
99. 黑褐色砂質土層
100. 黑褐色砂質土層
101. 黑褐色砂質土層(砂利)
102. 黑褐色砂質土層
103. 黑褐色砂質土層
104. 黑褐色砂質土層
105. 黑褐色砂質土層
106. 黑褐色砂質土層
107. 黑褐色砂質土層
108. 黑褐色砂質土層
109. 黑褐色砂質土層
110. 黑褐色砂質土層
111. 黑褐色砂質土層(砂利を含む)
112. 黑褐色砂質土層
113. 黑褐色砂質土層
114. 黑褐色砂質土層
115. 黑褐色砂質土層
116. 黑褐色砂質土層
117. 黑褐色砂質土層
118. 黑褐色砂質土層(砂利多い)
119. 黑褐色砂質土層
120. 黑褐色砂質土層
121. 黑褐色砂質土層(砂利を含む、灰化物を含む)
122. 黑褐色砂質土層(砂利を含む)
123. 黑褐色砂質土層
124. 黑褐色砂質土層(砂利を含む)
125. 黑褐色砂質土層
126. 黑褐色砂質土層
127. 黑褐色砂質土層
128. 黑褐色砂質土層
129. 黑褐色砂質土層
130. 黑褐色砂質土層
131. 黑褐色砂質土層
132. 黑褐色砂質土層
133. 黑褐色砂質土層
134. 黑褐色砂質土層
135. 黑褐色砂質土層
136. 黑褐色砂質土層
137. 黑褐色砂質土層(粘土を含む)
138. 黑褐色砂質土層(砂利を含む)
139. 黑褐色砂質土層
140. 黑褐色砂質土層(砂利を含む)
141. 黑褐色砂質土層
142. 黑褐色砂質土層(砂利を含む)
143. 黑褐色砂質土層(砂利を含む)
144. 黑褐色砂質土層
145. 黑褐色砂質土層
146. 黑褐色砂質土層(砂利を含む)
147. 黑褐色砂質土層(砂利を含む)
148. 黑褐色砂質土層(砂利を含む)
149. 黑褐色砂質土層
150. 黑褐色砂質土層(砂利を含む)
151. 黑褐色砂質土層(砂利を含む)
152. 黑褐色砂質土層
153. 黑褐色砂質土層
154. 黑褐色砂質土層
155. 黑褐色砂質土層
156. 黑褐色砂質土層
157. 黑褐色砂質土層
158. 黑褐色砂質土層(砂利を含む)
159. 黑褐色砂質土層(砂利を含む)
160. 黑褐色砂質土層(砂利を含む)
161. 黑褐色砂質土層
162. 黑褐色砂質土層(砂利を含む)
163. 黑褐色砂質土層
164. 黑褐色砂質土層
165. 黑褐色砂質土層
166. 黑褐色砂質土層
167. 黑褐色砂質土層
168. 黑褐色砂質土層(砂利を含む)
169. 黑褐色砂質土層(砂利を含む)
170. 黑褐色砂質土層(砂利を含む)
171. 黑褐色砂質土層(砂利を含む)
172. 黑褐色砂質土層(砂利を含む)
173. 黑褐色砂質土層(砂利を含む)
174. 黑褐色砂質土層
175. 黑褐色砂質土層(砂利を含む)
176. 黑褐色砂質土層(砂利を含む)
177. 黑褐色砂質土層
178. 黑褐色砂質土層
179. 黑褐色砂質土層
180. 黑褐色砂質土層
181. 黑褐色砂質土層(砂利を含む)
182. 黑褐色砂質土層
183. 黑褐色砂質土層(砂利を含む)
184. 黑褐色砂質土層
185. 黑褐色砂質土層
186. 黑褐色砂質土層
187. 黑褐色砂質土層(砂利を含む)
188. 黑褐色砂質土層
189. 黑褐色砂質土層(灰化物・灰化物・灰化物を含む)
190. 黑褐色砂質土層(砂利を含む)
191. 黑褐色砂質土層(砂利を含む)
192. 黑褐色砂質土層(砂利を含む)
193. 黑褐色砂質土層(砂利を含む)
194. 黑褐色砂質土層
195. 黑褐色砂質土層
196. 黑褐色砂質土層
197. 黑褐色砂質土層(砂利を含む)
198. 黑褐色砂質土層(砂利を含む)
199. 黑褐色砂質土層
200. 黑褐色砂質土層
201. 黑褐色砂質土層
202. 黑褐色砂質土層
203. 黑褐色砂質土層
204. 黑褐色砂質土層(砂利を含む)
205. 黑褐色砂質土層(砂利を含む)
206. 黑褐色砂質土層(砂利を含む)
207. 黑褐色砂質土層(砂利を含む)
208. 黑褐色砂質土層(砂利を含む)
209. 黑褐色砂質土層
210. 黑褐色砂質土層
211. 黑褐色砂質土層
212. 黑褐色砂質土層
213. 黑褐色砂質土層(砂利を含む)
214. 黑褐色砂質土層
215. 黑褐色砂質土層(灰化物・灰化物・灰化物を含む)
216. 黑褐色砂質土層
217. 黑褐色砂質土層(砂利を含む)
218. 黑褐色砂質土層
219. 黑褐色砂質土層

(2) 調査の記録

1、第1面の調査

概要 標高4.6～4.85mを測る遺構検出面である。調査区全体にわたって近現代の搅乱層が点在していた。搅乱層からは肥前系の近現代陶磁器を主として薬用ガラス瓶や漆喰壁残片、コンクリート基礎など各種の遺物が出土している。遺物の中で注意されるのは、明治期の搅乱土壌からの出土遺物である。火災によって焼け出されたものを埋めた土壌で、日常雑器類が出土している。これには江戸時代末期頃の資料も含まれており、当時の博多における生活用具の一端を知る手掛かりとなる資料として貴重である。

遺構は39基検出された。遺構の内訳は、井戸2基、溝2条、土壌20基、石組遺構1基、木組の土壌1基、埋甕2である。井戸は、瓦組の井戸が2基で江戸期に作られ、最近まで使用されていたものである。溝は、江戸末期の下水排水用のもので、丸瓦組みの管を埋設していた。石組遺構は先の溝と一体をなすもので、貯め外と考えられる。江戸期に含まれる。木組の土壌は半地下室的な構造のものと考えられる。江戸～明治期のもの。土壌はいずれも生活残滓の廃棄層である。また柱穴は散発的な分布状況で検出されており、建物の復元までにはいたらなかった。土壌・柱穴は江戸期～現代まで含まれる。

第1面の年代観はほぼ江戸末期から明治期にかかるものである。



Fig.6 第1面完掘状況（南東から）

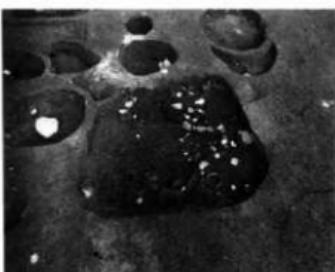


Fig. 7 SX008遺物出土状況（南東から）

SX008(Fig. 7~9・11・13) 調査区の西側に位置する。一辺が2.1~2.4mを測るやや不整な方形の堅穴である。深さは0.41mで、床面は平坦である。埋土には木炭や焼けた建築部材が含まれており、火災にあった器物を一括して埋めたものと思われる。

出土遺物 大量の遺物が一括投棄の状況で出土した。火を受けており、器皿が荒れているものが多い。遺物は肥前系の陶磁器

(碗・小碗・猪口・大皿・鉢・仏器・神前器)が主体をなすが、小石原・高取系の陶器(徳利・花器・灯明皿など)や、瓦質の火鉢、浅鉢、素焼きの七輪(瓦町焼き)などがある。これらのほか玩具である「めんこ」や、素焼きの人形・土鈴も出土している。これらの他に混入したと思われる中世の土師質摺鉢2や、土鍋3などが出土している。土師質摺鉢は、片口で四条の降ろし目を5cmほどの間隔で入れたもので、口縁部は平坦に仕上げ内面端部をわずかに引き出している。口径31.7cm。土鍋3は口縁部がわずかに外反するもので、外面には炭化物が付着している。口径29cm。器高13.8cm。



Fig. 8 SX008出土遺物

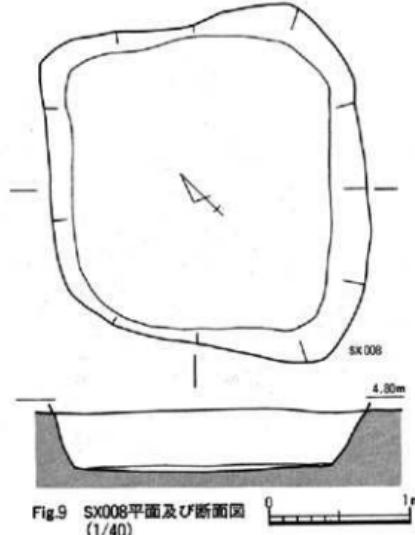


Fig. 9 SX008平面及び断面図
(1/40)

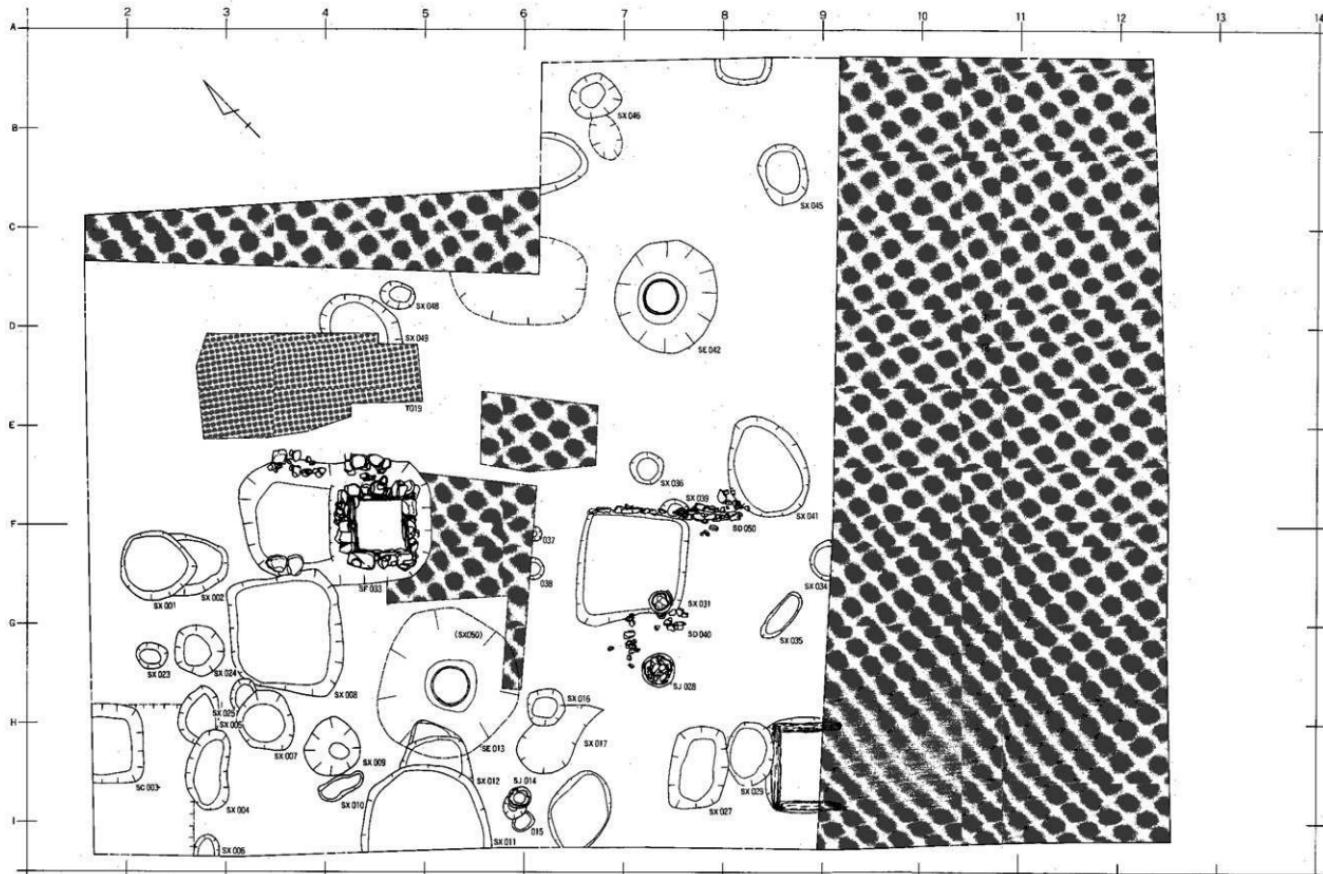


Fig.10 第1面造構分布全体図 (1/80)

0 2 4m

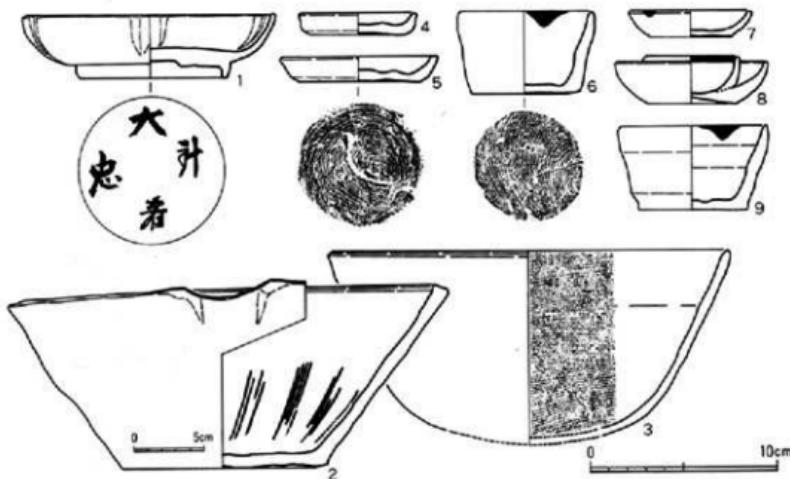


Fig.11 出土遺物実測図 (1/3 · 1/4) (SX008 · 019)

SX009 (Fig.12・14) SX008の南側に位置する。平面形が不整な円形の竪穴である。直径が1.12~1.18mで、深さ0.32mを測る。明治期の廃棄用土壤で、焼土・木炭を多く含む。

出土遺物 肥前系の陶器（碗・皿・土瓶・急須など）や、素焼きのホウロクなどが出土している。Fig.14の急須は楽焼き風の薄手作りで肩には把手用の耳がつき、体部には浮彫りで梅花をあしらい、白色釉と緑釉が施されている。口径7cm。

T019出土遺物 (Fig.11) 6 ~ 9はいずれも口縁部に油煙が付着する灯明用の皿で、8は施釉陶器製、他は土師器である。

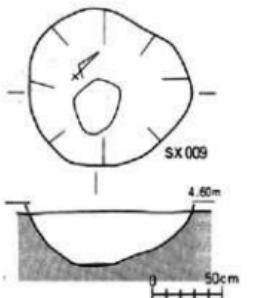


Fig.12 SX009平面及び断面図 (1/40)



Fig.13 SX008出土遺物 (1/6)



Fig.14 SX009出土遺物 (1/5)

SJ014 (Fig.15) 調査区南壁近くに位置する。瓦質で焼成のあまい甕を埋置している。甕の上半分は消失。江戸期から明治期のもので、伊万里焼の碗などが出土。甕の底径は24cm。やや上げ底気味である。

SJ028 (Fig.15) SC034の南側に位置する。瓦質の甕を埋置している。甕の焼成は比較的良好でよく焼き締まっている。江戸期のもので、伊万里碗・皿などが出土。

SE013 (Fig.16・30) 瓦組井戸である。江戸期に作られ調査前まで使用されていた。井筒は木桶で、井側には長さ28~33cm、幅20~25cm、厚さ3cm前後を測る瓦を、一段あたり11~12枚ずつ円形に組み合わせ、裏込めしながら構築している。直径は89~96cm。深さは検出面から4.85m。第1面では掘方051は未検出。

出土遺物 井戸掘方051からは中世土師器、近世陶器片が出土している。27は土師器壊である。口径10.3cm、器高1.9cm。口縁部がわずかに外反する。28は古代の綠釉陶器で、高壊の口縁部片である。口径19.8cm。淡明褐色。

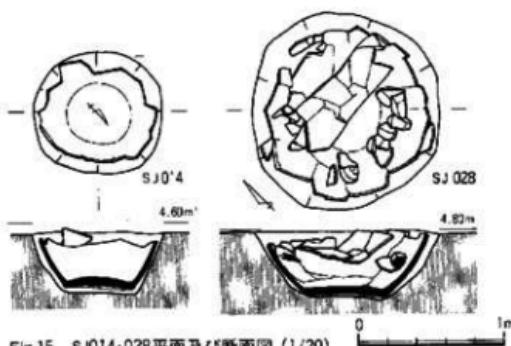


Fig.15 SJ014-028平面及び断面図 (1/20)

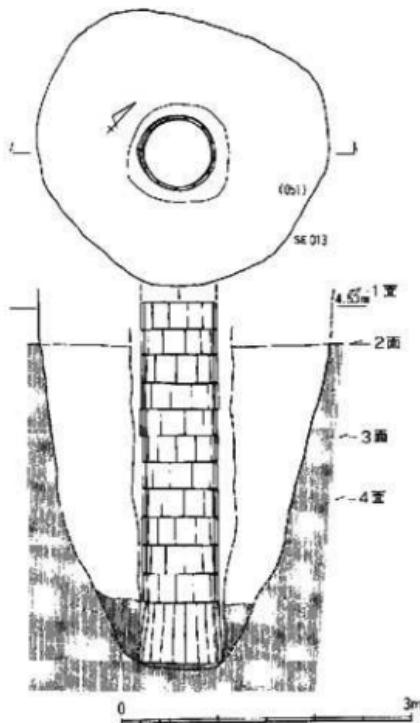


Fig.16 SE013平面及び断面図 (1/60)



Fig.17 SX030発掘状況 (北西から)

SX030 (Fig. 17・18) 調査区東壁にかかって検出。平面形は隅丸の方形で一边が1.8mを測る。深さは検出面から0.9mで、床面には幅が20cm、厚さが15cmほどの木材を井桁に組んでいる。壁面には板があった可能性がある。埋土は一気に埋めた状況である。半地下式の構造物か。

T020出土遺物 (Fig. 19) 10～13は土師器皿で、口径6.5～9.0cm。14は唐津系統。

SX027出土遺物 (Fig. 19) 15は土師器皿で口径9.0cm、器高1.5cm。16は高取系の碗。

SX029出土遺物 (Fig. 19) 17は肥前系の摺鉢。口縁部は丸く肥厚し高台がつく。口径38cm。

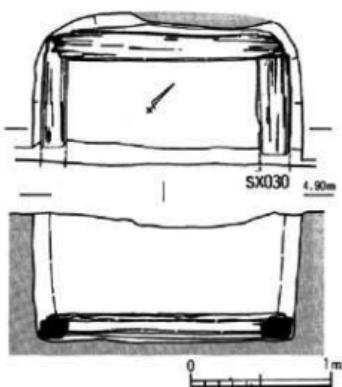
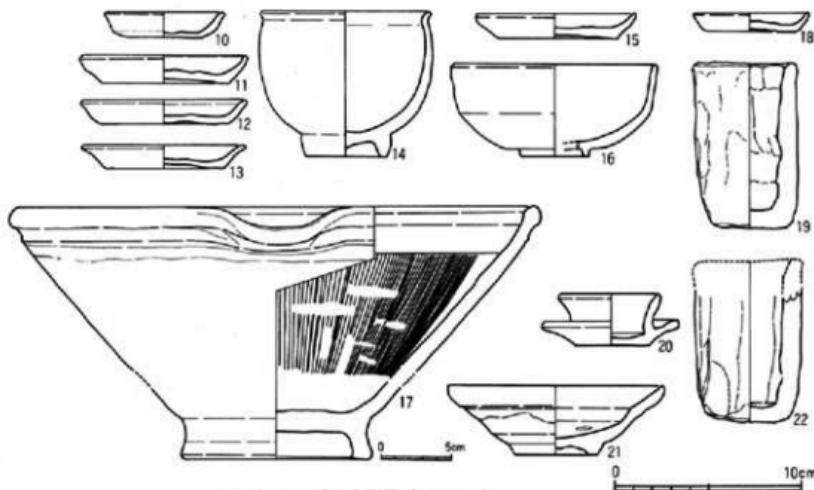


Fig.18 SX030平面及び断面図 (1/40)

Fig.19 出土遺物実測図 (1/3・1/4)
(sx020・027・029・032・041・042・045)

SX031 (Fig.20・21・
24)

調査区中央に位置する。平面形は一辺が2mの隅丸方形で、深さは0.38mを測る。床面は平坦である。南隅に瓦質の鉢を据え、平瓦が側面に立掛けられている。埋土は黒褐色土で、焼土・木炭片をわずかに含む。豊穴の形態・埋土の堆積状況はSX008に似る。SD 040・050を切っている。

出土遺物 肥前系陶器（碗・皿・猪口・徳利・摺鉢など）が多量に出土している。土師器皿や瀬戸焼黒釉天目碗、瓦質の火鉢、魚骨などを含む。

SX032 (Fig.19)

調査区の東側に位置する不定形の土壌である。小砾や木炭片を含む。

出土遺物 18は土師器皿である。口径6.3cm。器高0.9cm。口縁部にはススが付着。



Fig.20 SX031・SD040・SD050発掘状況
(南東から)



Fig.21 SX031出土遺物 (1/6)



Fig.22 SX049出土遺物 (1/6)



Fig.23 SD050出土遺物 (1/8)

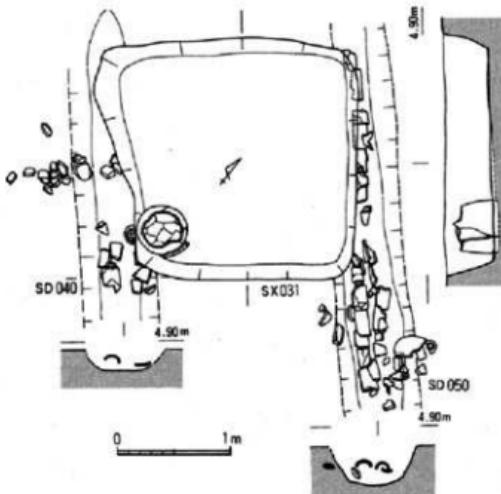


Fig.24 SX031・SD040・SD050平面及び断面図 (1/50)

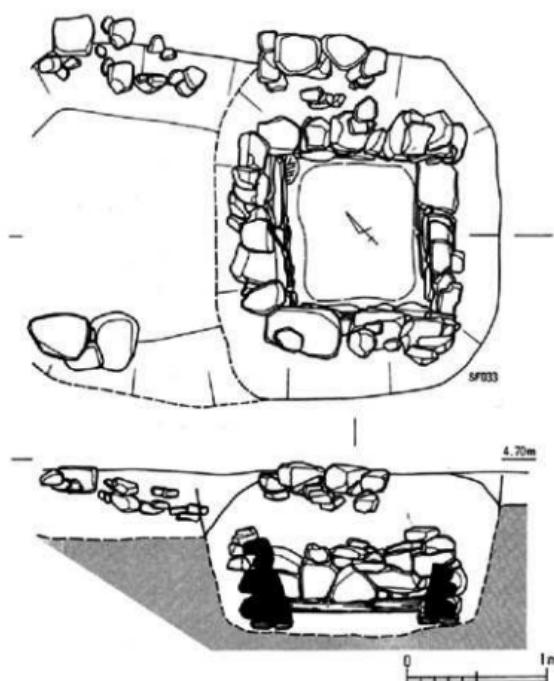


Fig.25 SF033平面及び断面図 (1/40)

SF033 (Fig. 25~27)
 調査区中央に位置する。上部はほとんど消失しているが、一回り広い石組が上部にあった可能性がある。石組の平面形は正方形で、内面の一辺は1.1mを測る。掘方の床面には幅12cm、厚さ5cmほどの角材を井桁状に組みその上に幅30cm前後の礫石を小口を揃えてほぼ垂直に積み上げている。現存の深さは0.75m。埋土は黒灰色粘質土で、下部から中位はヘドロ状になっていた。SD040・050が流れこんでいた貯め外の可能性がある。江戸末期が考えられる。

出土遺物 肥前系の碗
 ・皿、花器、仏器、土師器皿の小片、魚骨・イルカ歯などが出土している。

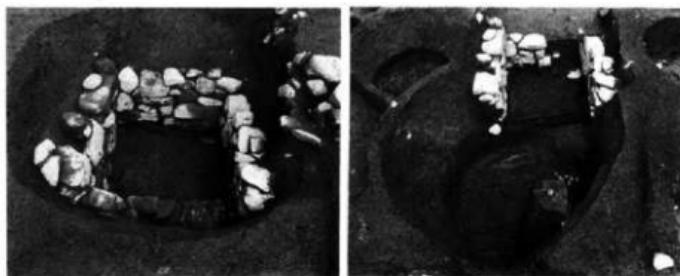


Fig.26 SF033発掘状況 (南東から) / 石組基礎部分(手前はSX086)

SX034 (Fig. 10)

調査区東側に位置する。
円形の竪穴で、直径が
0.80m、深さ0.50mを
測る。江戸末期の廃棄
用土壇である。肥前系
の染付碗や瓦片が若干
出土している。



SX036 (Fig. 10)

北寄りに位置する円形
の竪穴で埋甕の抜き跡の可能性がある。直径が0.67m、深さは0.16mで床面は平坦である。肥
前系の染付碗や皿、土師器皿が出土している。

Fig.27 SF033出土遺物

SX041 (Fig. 19・28・29) 調査区の東側に位置する。平面形はやや不整な楕円形で、長軸が2.
15m、深さ0.22mを測る。床面は平坦である。

出土遺物 肥前系の染付碗、赤絵の小碗、大皿、唐津系の碗、小石原系の甕、黒釉の碗、陶
器灯明皿、焼塩壺などが出土している。いずれも二次的な混入品である。19は焼塩壺で、口径
5.5cm、器高8.8cm。内面には布目压痕がかすかに残っている。20は受け皿部内面に鉄軸を施
釉する陶器製灯明皿。口径は5.0cm。器高2.8cm。

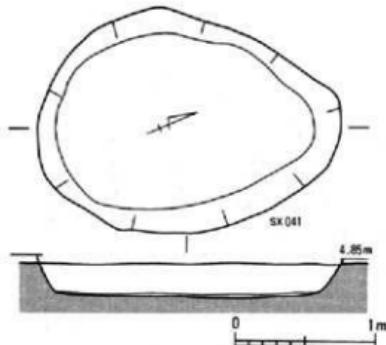
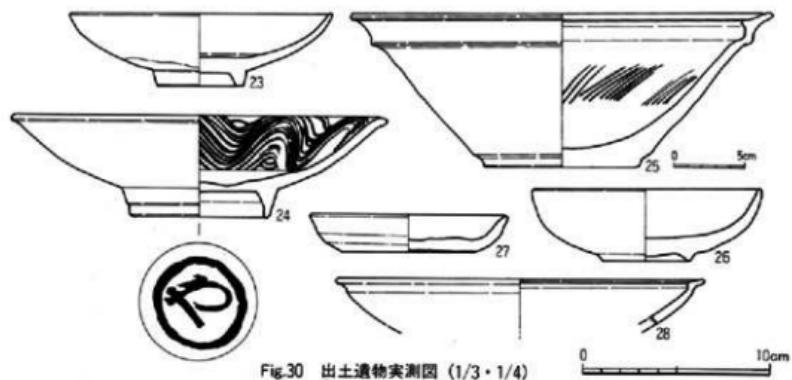
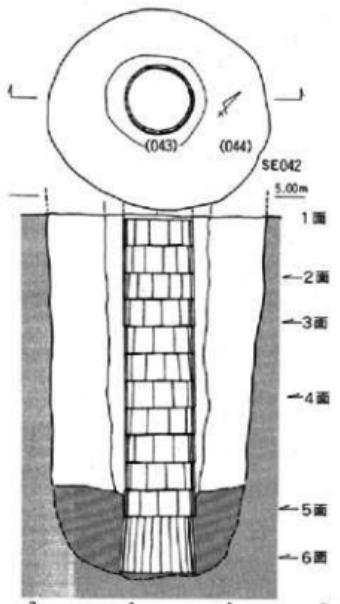


Fig.28 SX041平面及び断面図 (1/40)



Fig.29 SX041出土遺物 (1/6・1/8)

Fig.30 出土遺物実測図 (1/3 · 1/4)
(SX047 · 050 · 051)Fig.31 SE042平面及び断面図 (1/80)
(井筒裏込め043・掘方044)

SE042 (Fig. 19 · 31~33) 調査区の北側に位置する。瓦組井戸である。江戸期後半~末頃に作られ現代まで使用されていた。井筒は木桶で、井側には長さ26~31cm、幅21~24cm、厚さ3cm前後を測る瓦を、一段あたり11~12枚ずつ円形に組み合わせ、裏込めしながら構築している。直径は88~93cm。深さは検出面から4.8m。掘方044の直径は約3m。

出土遺物 遺物は掘方から比較的多く出土しているが、いずれも二次的な混入品である。肥前系の染



Fig.32 SE042出土遺物 (1/7)



Fig.33 SX044出土遺物 (1/7)

付や摺鉢、唐津系の碗・皿、土師器皿などが出土している。21は唐津系の皿で、内底見込みの三ヶ所に胎土目跡が付着している。口縁部は体部中位よりやや上で外反し、わずかに肥厚する。口径11.6cm。器高3.6cm。

SX045 (Fig. 19・34・35)

調査区北東側に位置する。平面形は隅丸の長方形で、長軸が1.22m、短軸0.93mを測る。江戸末から明治期の廃棄用土壌である。

出土遺物 高取・肥前系の陶磁器（碗・皿）、焼塩壺が出土している。いずれも投棄されたものである。22は焼塩壺である。口縁部は欠けている。内面の横断面は四角形で、器面にはかすかに布目圧痕が残っている。四角い棒状のものを芯にして布を覆った上に粘土塊で包みこむようにして成形したものか。Fig. 35下段の徳利は黒褐色の鉄軸を施釉している。

SX046 (Fig. 36・37) 調査区北東側に位置する。平面形は不整な梢円形で、長軸が1.03m、短軸0.91mを測る。江戸末から明治期の廃棄用土壌である。

出土遺物 肥前系の染付（碗・皿）、柿釉天目、高取系の白磁碗、唐津もしくは高取系の皿などが出土している。

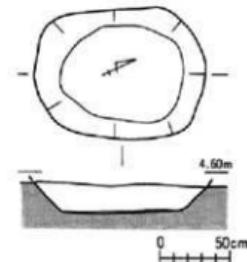


Fig.34 SX045平面及び断面図
(1/40)



Fig.35 SX045出土遺物 (1/6)

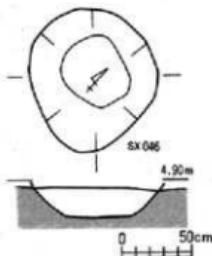


Fig.36 SX046平面及び断面図 (1/40)



Fig.37 SX046出土遺物 (1/6)



Fig.38 出土遺物実測図 (1/3) (包含層SX408)

Fig.39 SX408出土遺物
(上1/5・下約1/7)

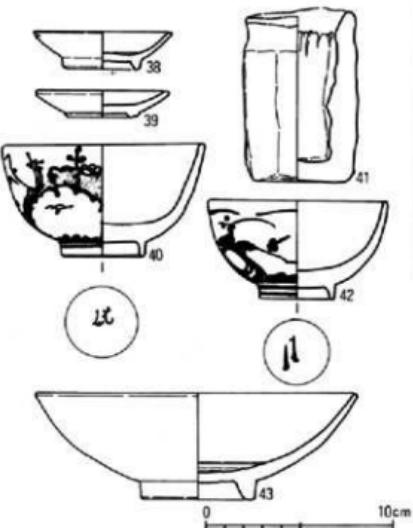
SX047 (Fig.10・30) 調査区北壁にかかっている。平面形は不整な椭円形で、浅い凹状である。長軸が2.7m、短軸が1.8mを測る。検出面から深さは0.15m前後であるが、北壁断面では深さが1m以上ある。明治期以降の廃棄用の土壌である。

出土遺物 ガラス瓶や焼瓦片など多数含む。出土遺物はほとんどが二次混入品である。23は白磁皿である。内面見込みは釉を輪状に掻き取っている。露胎部分には目跡が残る。外面は体部上半分に施釉。口径14.1cm、器高3.9cm。24は唐津系の皿である。内面に波状の刷毛目文を施文する。高台は少し高めである。口径20.1cm、器高5.2cm。25は肥前系の摺鉢。口縁部外側に一段ずつ段を有している。降ろし目は7条が一単位。鉄釉が口縁部外側にかかる。

SX049出土遺物 (Fig.22) 明代染付碗片である。薄手の器壁に鮮明な吳須で草花文を描く。

S0040・050 (Fig.23・24・30) 調査区南側に位置する。SX031からいずれも切られている。SD040が長さ3.5m、幅0.53mで、SD050が長さ4.4m、幅0.53mで確認できた。深さはいずれも0.23~0.26m。二つの溝は平行で、方向はN-45°30'~Eを測る。SX031から北側部分はトレンチや後世の造構で消滅する。SF033の北東と南東隅に丸瓦の連続部分が遺存し、北壁側にも浅い溝の痕跡がみられたことから、SD040・050、SX031は排水用の一連の造構と判断できた。

出土遺物 溝の掘方内から二次的な混入品として、土師器皿・壺、肥前系陶磁器（染付碗・皿）、魚骨などが出土している。26は陶器製の皿。くすんだ緑色釉を施釉。高台内には砂目跡がつく。高台断面形は三角形をなす。口径は12.2cm、器高3.9cm。高取系か。



SX408・409（包含層）出土遺物 (Fig.38~41) 概要で述べたように表土から第1面までの掘り下げ作業に際して多種多量の遺物が出土した。特に目立ったのが肥前系、小石原系の陶磁器である。また素焼きの七輪や中世の土師器壺・皿、明代の染付や李朝陶器などの輸入陶磁器も若干みられた。時期的には一部を除いて江戸後期から明治期のものが主となる。

29~31は素焼きの皿で、外底中央に調理のための炎を受けた跡がある。口径11.6~12.0cm。32・33は陶器製灯明皿で、内面のみに鉄釉を施釉。32の外面は回転ヘラケズリによる成形。33の底部は回転糸切離し。胎土はやや赤みのある褐色。34~37は肥前系の染付である。34は小碗で、体部には竹葉をあしらう。35は仏飯器で、壺部に格子文を描く。口径6.0cm、器高6.0cm。36は碗（ソバ猪口）で、口縁部がやや広がる。底部は蛇の目凹形高台である。体部には矢羽文をあしらう。口径7.0cm、器高5.4cm、底径5.3cm。37は神前徳利である。青い透明釉を外面に施釉。高台疊付には目跡がつく。口径1.8cm、器高11.0cm。38・39は白磁高台付皿である。38は内底見込みの釉を輪状に掻取る。釉薬は不透明な白色。肥前系のものか。39は内底が露胎のほかは全面に透明釉を施釉。中国製か。40・42は粗製の染付碗である。口径・器高は40が10.8・6.1cm、42が9.6・5.4cm。43は作りが精良な唐津系碗。内底見込みの釉を輪状に掻取る。釉調は良好で透明な黄褐色。口径17.2cm、器高5.7cm。41は焼塩壺。口径5.8cm、器高9.1cm。

2、第2面の調査

概要 標高4.10~4.50mを測る遺構検出面である。第1面同様、この面にも調査区全体にわたって近現代の擾乱が及んでいた。検出面は、調査区のほぼ中央部にあたるトレンチT022周辺を境にして、東側が明褐色砂の混入する暗灰色粘質土、西側がより粘性のある暗灰色~灰褐色粘質土であり、全体的にみると大きく2分されている。東側の暗灰色粘質土は西側にゆくにつれて徐々に低くなっている。西側の粘質土下部に潜りこんでいる。南壁側にはこれらの土層を切らして黄灰色粘土が5~10cm厚で黒褐色土層などと互層になって水平堆積している。粘土そのものが調査区周辺にはない土であること、堆積状況が版築状であることなどより、人為的な整地によるものと考えられる。第1面の井戸SE013や埋甕SJ014・028の分布範囲とほぼ一致していることから、屋敷地奥の台所部分の基礎をなす地業と判断された。

遺構は55基検出された。遺構の内訳は、土壙47基、石組遺構1基、木組の土壙1基、埋甕1基、木桶を埋めた土壙1基、柱穴6である。この他に、井戸SE013の掘方051と、第3面で井戸と確定できたSE120の上部SX107がこの面で確認された。土壙はいずれも廃棄用土壙で、西側に偏って分布する傾向がみられ、屋敷地の裏庭にあたる空間の利用状況を物語っている。またいくつかの土壙から鉄滓、羽口など鋳造関係資料が出土している。

第2面の年代観は江戸後期から末期を主とする。一部は江戸前期、明治期にかかる。



Fig.42 第2面完掘状況（南西から）

SX052 (Fig. 43・44・46) 調査区北西隅に位置する。直径が1.1m、深さ0.17mの円形の土壇である。SX053から南側を切られている。

出土遺物 龍泉窯系の碗、褐釉天目碗高取系の碗片などが出土している。Fig. 44左下は、高取系の碗である。緑褐色の釉薬を高台を除いて全面に施釉する。44は土師器皿である。口径9.3cm、器高1.8cm。口縁部端部がわずかに外反する。

SX053 (Fig. 43・45・46) 平面形がやや不整の円形の土壇である。直径は1.8m、深さ0.25mを測る。埋土には焼土や木炭片を含む。江戸後期～末の廃棄用の土壇である。

出土遺物 肥前系の染付碗、唐津系の刷毛目手碗、京風の碗、高取系碗、瀬戸焼壺、土師器、寛永通宝などが出土している。Fig. 45上の碗は伊万里染付碗である。体部には円文、草花文をあしらう。右側の碗には疾走する二頭の馬が描かれている。口径は10.1cm。Fig. 45下の右下は、瀬戸焼壺の肩部片である。ヘラ沈線による草花文が描かれている。45・46は土師器灯明皿である。口径は45が6.4cm、46が6.7cm、器高は45が1.0～1.3cm、46が1.6cmである。

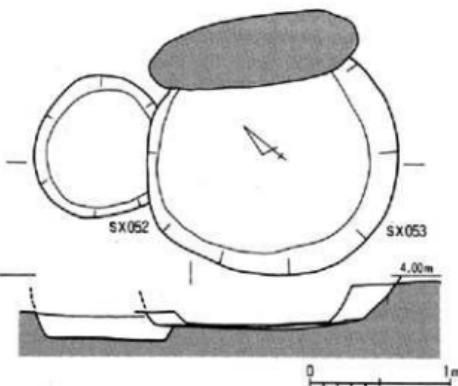


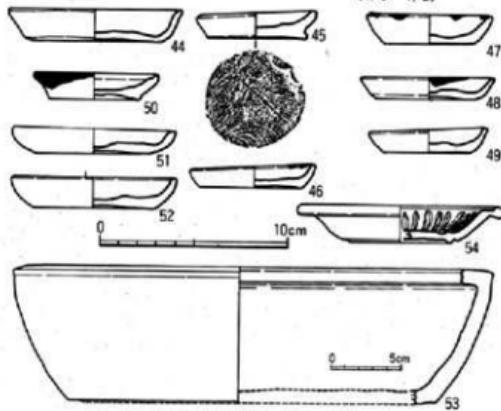
Fig. 43 SX052・053平面及び断面図 (1/40)



Fig. 44 SX052出土遺物 (1/6)



Fig. 45 SX053出土遺物 (1/6・1/8)

Fig. 46 出土遺物実測図 (1/3・1/4)
(SX052～054・056・057・062・065)

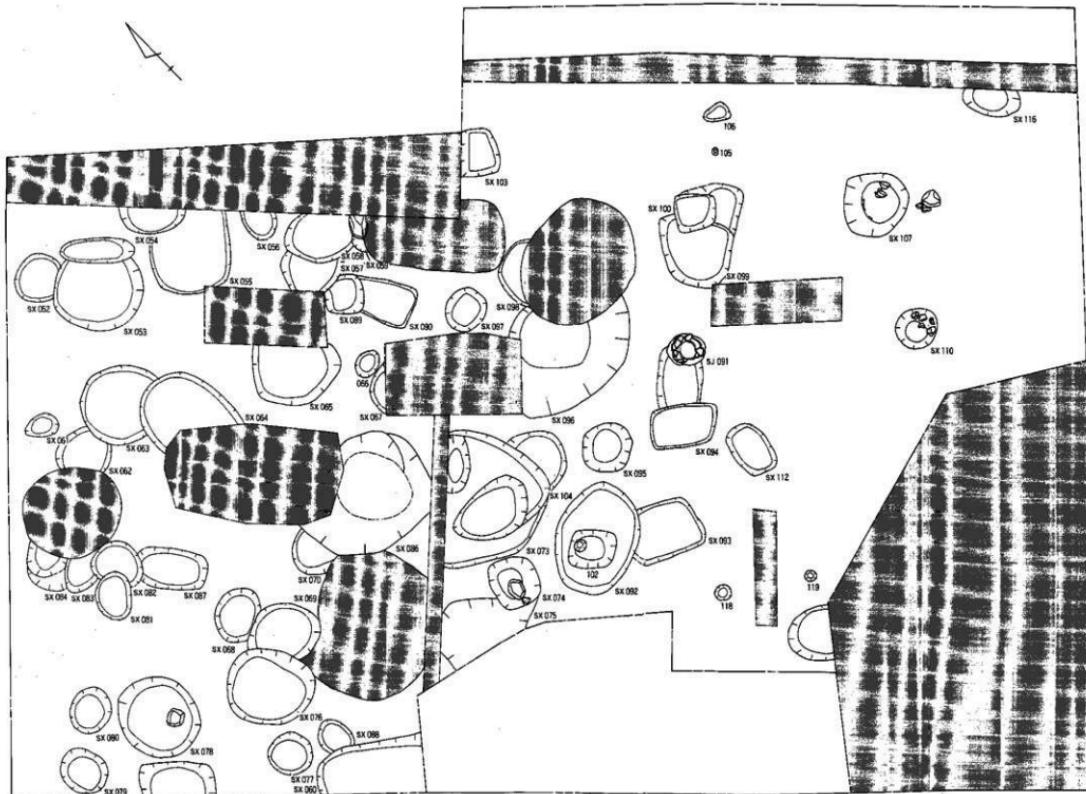


Fig.47 第2面遺構分布全体図 (1/80)

0 2 4m



Fig.48 SX054・055発掘状況 (南西から)

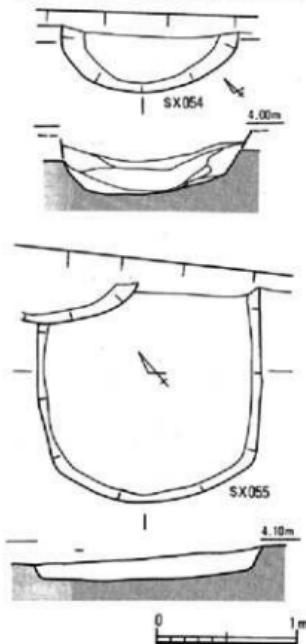


Fig.49 SX054・55平面及び断面図 (1/40)

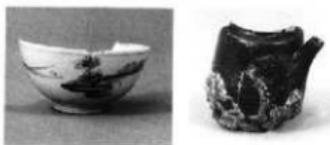


Fig.50 SX054出土遺物 (1/6・1/4)



Fig.51 SX055出土遺物 (1/5)

SX054 (Fig. 46・48~50) 調査区北壁西側にかかる。円形または梢円形の廃棄用土壌である。深さは約0.40m。焼土・木炭片を含んでいる。

出土遺物 唐津系の碗・青緑釉皿、李朝陶器(碗・徳利)、伊万里染付碗、褐釉の鉄鋸差し、灰釉碗、指鉢などが出土している。47は口径6.7cm、器高1.6cm、土師器灯明皿である。

SX055 (Fig. 48・49・51) SX054に北側を切られている。平面形が一辺1.5mの隅丸方形の廃棄用土壌である。江戸後期。

出土遺物 伊万里染付(中皿・瓶)、褐釉の取手付瓶などが出土している。Fig. 51左の皿は伊万里中皿で、口径18.8cm、器高6.5cm。見込にはコンニャク印判による五弁花文を押す。†



Fig.52 SX060発掘状況（北から）

SX060 (Fig. 52・53) 調査区南側に位置する。平面形は隅丸長方形である。床面に長さ2.1m、幅約12cm、厚さ6cmの角材を置いている。第1面のSX030と同様な構造が考えられる。土師器片や土人形、伊万里染付碗片が出土している。江戸後期のもの。

SX062出土遺物 (Fig. 46) 50～52は土師器皿である。口径は6.8～8.8cm、器高は1.4～1.7cm。50は灯明皿。53は瓦質火鉢。

SX063 (Fig. 55) 円形の廃棄用土壠である。直径は1.61m。SX064に切られている。江戸後期。

SX064 (Fig. 54・55) 平面形は長円形で、長さ約2.5mを測る。床面は平坦である。伊万里染付碗や赤絵皿、唐津系碗、白磁碗などが出土している。

SX065 (Fig. 46・56・57) 不整円 Fig.54 SX064出土遺物 (1/6)

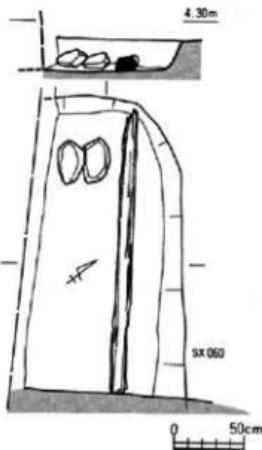


Fig.53 SX060平面及び断面図 (1/40)

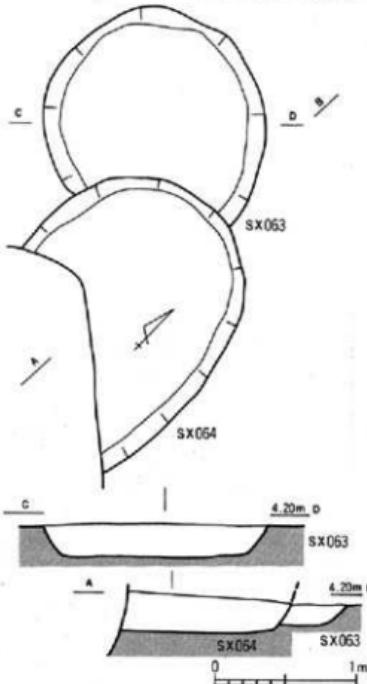


Fig.55 SX063・064平面及び断面図 (1/40)

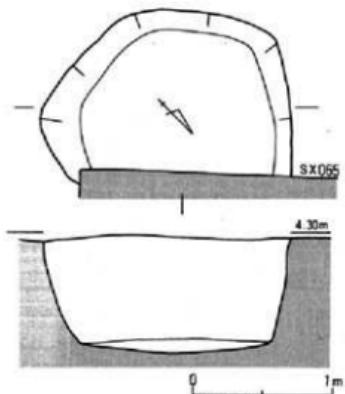


Fig.56 SX065平面及び断面図 (1/40)



Fig.57 SX065出土遺物 (1/2.5 - 1/5)

形の廃棄用土壌である。直径1.8m、深さ0.82m。江戸期のもの。唐津系碗・皿片、伊万里系碗片、黄瀬戸菊花陰刻皿、鉄釉瓶、摺鉢、明代染付皿片などが出土している。

SF072 (Fig. 58・59) 石組遺構である。

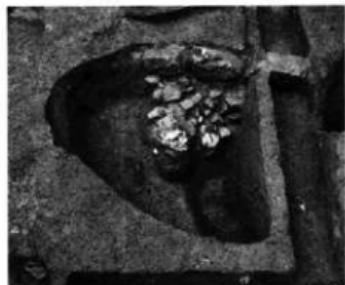


Fig.58 SF072完壊及び遺物出土状況 (北西から)

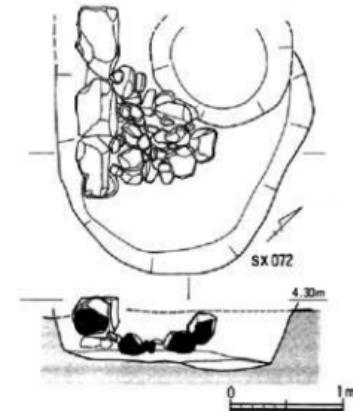


Fig.59 SF072平面及び断面図 (1/50)

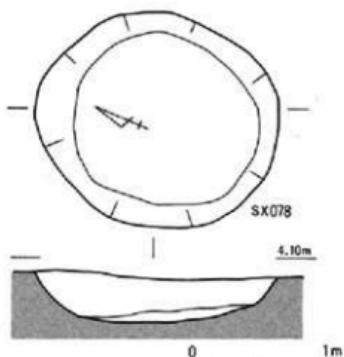


Fig.60 SX078平面及び断面図 (1/40)



Fig.61 SX078出土遺物 (1/6・1/4)

南壁の一部のみが遺存している。長さが50~60cmの大石を積み上げている。基礎部分にはSX033のような木材はなかった。掘方は不整な円形で、SX086から切られている。江戸後期。

出土遺物 土師器皿・壺、土鉢、釘、キセル、刀子、鉄滓、イルカ脊椎骨などが出土。

SX078 (Fig.60~62) 調査区南西部に位置する。ほぼ円形の廃棄用土壤である。直径1.75m、深さ0.30m。江戸後期。

出土遺物 伊万里染付碗、鹿津刷毛目手皿、鐵絵皿片、摺鉢55などが出土している。55は口径28.5cm、器高10.0cm。外面は薄く鉄釉がかかる。焼成軟質。

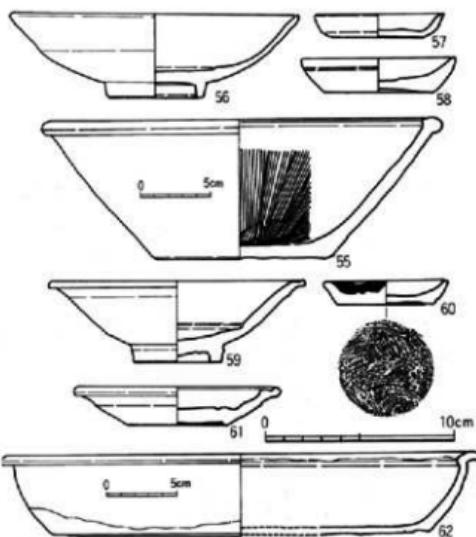


Fig.62 出土遺物実測図 (1/3・1/4)
(SX078・086・087・092・096・104・111)

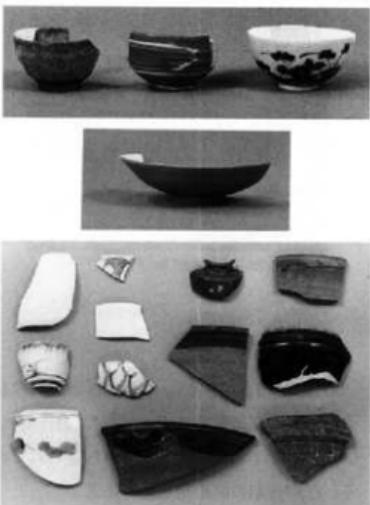


Fig.63 SX086出土遺物 (1/5)

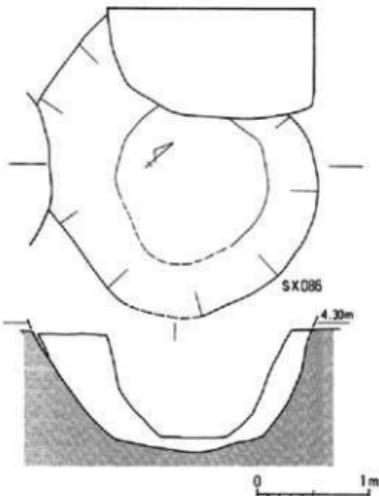


Fig.64 SX086平面及び断面図 (1/50)

SX086 (Fig. 26右・62~64) 調査区中央に位置する。SE013の掘方051・SX070を切り、SX033から切られている。不整な円形の廃棄用土壤である。直径は2.4~2.7m、深さは1.1m。埋土は暗灰色粘質土で木炭片を含む。

出土遺物 高取系碗、唐津系刷毛目手碗、伊万里染付碗・皿・猪口、備前摺鉢、袖輪肩衝茶入、褐釉天目、土師器、土鉢、キセル、鹿の骨などが出土。56は唐津系の碗で、作りは良質である。見込みは釉を輪状に掻き取っている。全面施釉。釉調は良好で透明な明褐色を呈する。口径13.5cm、器高4.4cm。

SJ091 (Fig.65) 埋甕である。甕は軟質の瓦質土器である。裏込めには褐色砂を充填している。底径は40cm。

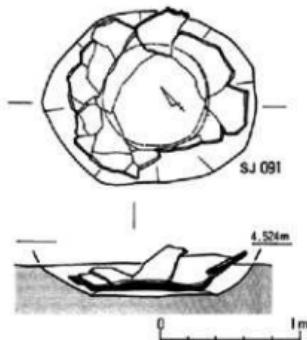


Fig.65 SJ091平面及び断面図 (1/20)

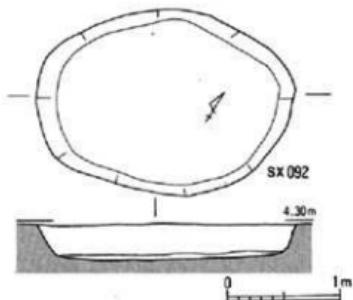


Fig.66 SX092平面及び断面図 (1/50)

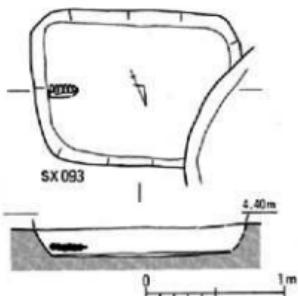


Fig.68 SX093平面及び断面図 (1/40)



Fig.69 SX093実捲状況 (北から)

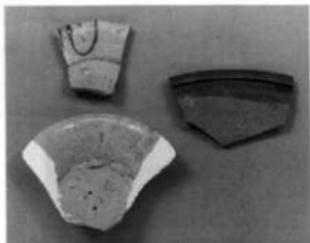


Fig.67 SX092出土遺物 (1/6)

SX087 (Fig. 47・62) 調査区西側に位置する。平面形は隅丸長方形で、長さ1.8m、幅0.85m、深さ0.18m。SX114から切られている。江戸後期の廃棄用土壌である。

出土遺物 土器器皿片、土鉢などが出土。

SX092 (Fig. 62・66・67) 調査区中央に位置する。平面形は不定形。長さ2.2m、幅1.7m、深さ0.33m。埋土は灰褐色土で、木片や焼土を含む。SX093を切っている。江戸後期の廃棄用土壌である。

出土遺物 唐津系鉄絵皿、陶器摺鉢、鐵滓、滑石製石鍤などが出土している。59は唐津系皿である。強く外反する口縁部内面には凹線がめぐる。全面に淡灰白色の釉を施釉。口径13.8cm、器高4.4cm。高台疊付には砂目跡が残る。Fig.67の左上は鉄絵皿片である。

SX093 (Fig. 68・69) 平面形は隅丸長方形で、長さは1.55m、幅1.14m、深さ0.14m。灰褐色土で木炭片を含む。SX092から切られる。江戸後期の廃棄用土壌である。

出土遺物 土器器皿・坏、伊万里染付片、イルカ下顎骨・大型魚骨が出土。

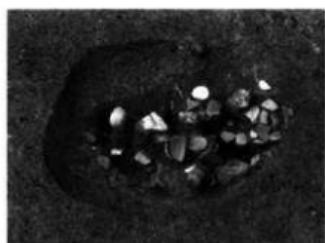
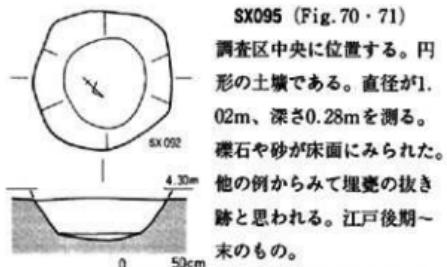


Fig.70 SX095完掘及び遺物出土状況
(北東から)



SX095 (Fig. 70・71)
調査区中央に位置する。円形の土壌である。直径が1.02m、深さ0.28mを測る。
砾石や砂が床面にみられた。
他の例からみて埋甕の抜き跡と思われる。江戸後期～末のもの。
出土遺物 伊万里染付や土器片のほかにイルカ、大型の魚骨が出土している。

Fig.71 SX095平面及び断面図
(1/40)

SX096 (Fig. 62・72・73) 調査区中央に位置する。SE042の掘方044から北側を切られている。平面形は梢円形で、長径が3.2m、短径が2.2mを測る。江戸前期から後期にかかる廃棄用の土壌である。

出土遺物 唐津系の鉄絵皿・皿（高取系か）、鉄釉碗、李朝白磁碗、龍泉窯青磁碗、土人形、キセルなどが出土している。60は土師器皿である。口径6.5cm、器高1.3cm。口縁部にはススが付着している。Fig. 73上の右上と左下は李朝白磁碗片である。

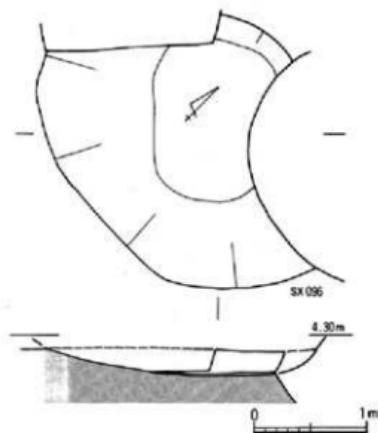


Fig.72 SX096平面及び断面図
(1/50)



Fig.73 SX096出土遺物 (1/5)

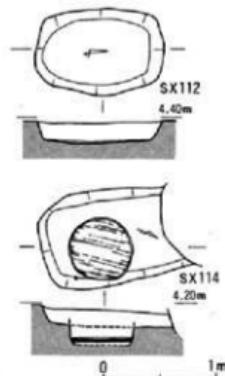


Fig.74 SX112・114平面及び断面図 (1/50)

SX100 (Fig. 47) 調査区北東部に位置する。SE120の掘方304を切る。やや不整な長方形の土壙である。長さは0.80m、幅0.70m、深さ0.16m。土鉢、刀子などが出土している。墓壙とも思われるが確証はない。

SX103 (Fig. 47) 調査区北東壁にかかる。平面形は一辺0.8m程の隅丸の長方形である。埋土は暗灰褐色砂質土。土師器片や伊万里片、釘などが出土している。墓壙とも思われるが確証はない。

SX110 (Fig. 47) 調査区北東部に位置する。SJ014やSX095と同様に小砾や褐色砂が埋土中にみられた。埋壠の抜き跡かと思われる。土師器片や、唐津皿片、釘などが出土している。

SX112 (Fig. 74) 調査区東側に位置する。隅丸方形の土壙である。長さは1.08m、幅0.76m、深さ0.19m。長軸はほぼ磁北に向く。暗灰褐色土を埋土とする。土師器片や釘片が出土している。墓壙の可能性がある。

SX114 (Fig. 74・75) 調査区西側に位置する。木桶を埋地したもので、桶底のみ遺存している。「肥溜め」か。木桶底部の直径は0.55m。深さは0.70m前後と思われる。掘方SX087の平面形は隅丸長方形で、長さ1.8m、幅0.85m、深さ0.18m。

出土遺物 土師器皿片、土鉢などが出土。江戸末期のもの。



Fig.75 SX114完掘状況 (北西から)



Fig.76 SX410出土遺物 (1/6)

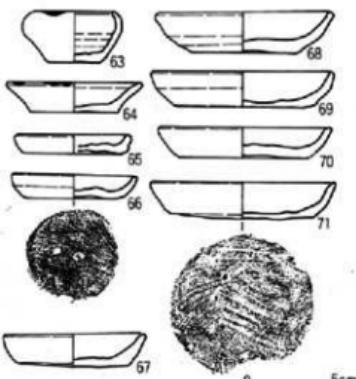


Fig.77 出土遺物実測図 (1/3) (SX410)



Fig.78 SX411出土遺物 (1/5)

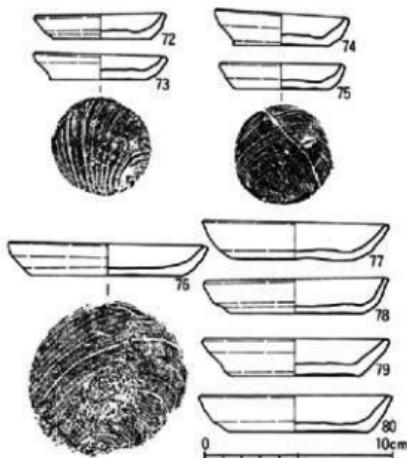


Fig.79 出土遺物実測図 (1/3) (SX411)

包含層SX410～412出土遺物 (Fig.76～81) 64～80は土師器皿・壺である。口径・器高の平均値は直径が6.7cm・1.3cm。壺が9.2cm・1.6cm。63は土師器で灯明に使っている。81は焼塗壺で、口径8.2cm。82・84～87はいずれも唐津系皿である。87の口径は16.0cm、器高は4.4cm。いずれも外面体部中位高台にかけては露胎である。83は龍泉窯皿である。口径10.9cm。

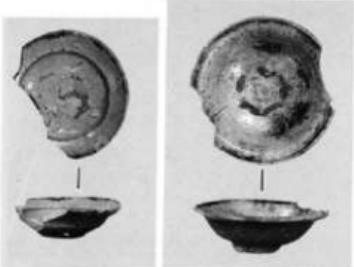


Fig.80 SX412出土遺物 (1/5)

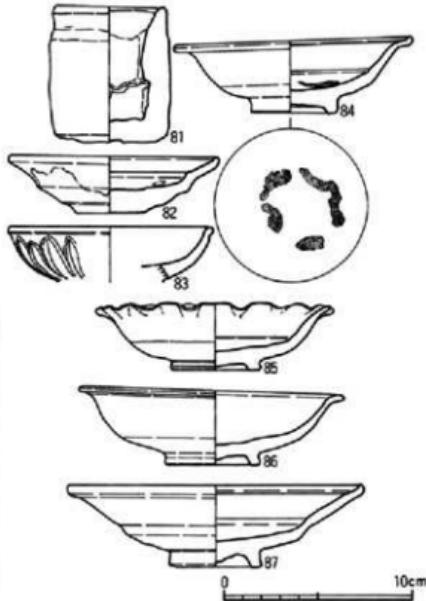


Fig.81 出土遺物実測図 (1/3) (SX412)

3、第3面の調査

概要 標高2.90~3.81mを測る造構検出面である。現地表面からは、-3.50mを測り、掘り下げと土砂撤出作業が徐々に厳しいものになってきた。

検出面の設定は、第2面で検出された黄褐色砂を含む暗灰色粘質土の傾斜に合わせて第3面を決めた。その結果、調査区の東側端と西側端との比高差は約1mほどになった。勾配率は7/100で比較的強い傾斜である。検出面の土層は第2面同様、灰色砂や、黄褐色砂が混入する暗灰~黒灰色粘質土が基本となるが、この土層の上面またはこれを切ってモザイク状に焼土や粘土、黒褐色土の薄いブロックがみられ、造構と誤認する例があり、特に調査区東側で目立った。調査区東側から中央部周辺では真砂土（花崗岩風化土）と思われる明黄褐色~明灰褐色粗砂がかなり硬く締まっている部分があった。これらの土層の堆積状況は人為的な整地によるものと考えられ、広範囲にわたって整地が行なわれたことが推測された。また第3面では、拳大から人頭大の転疊がかなりの量でみられ、検出面や、各造構に伴って出土した。この転疊は整地層に含まれていたものや造構の構築の際に他所から搬入されたもので、第1面や第2面での検出面の在り方とは状況がやや異なっていた。

造構は66基検出された。造構の内訳は、石組（瓦組）井戸1基、溝1、土壤56基、建物基礎

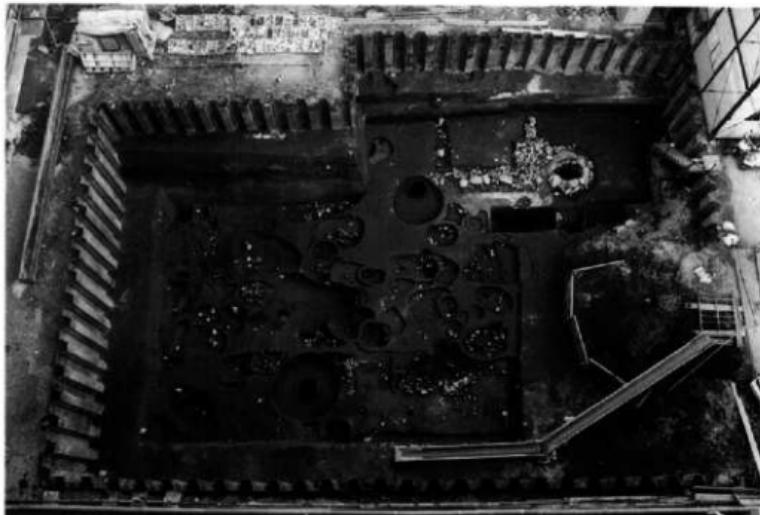


Fig.82 第3面完掘状況（南西から）

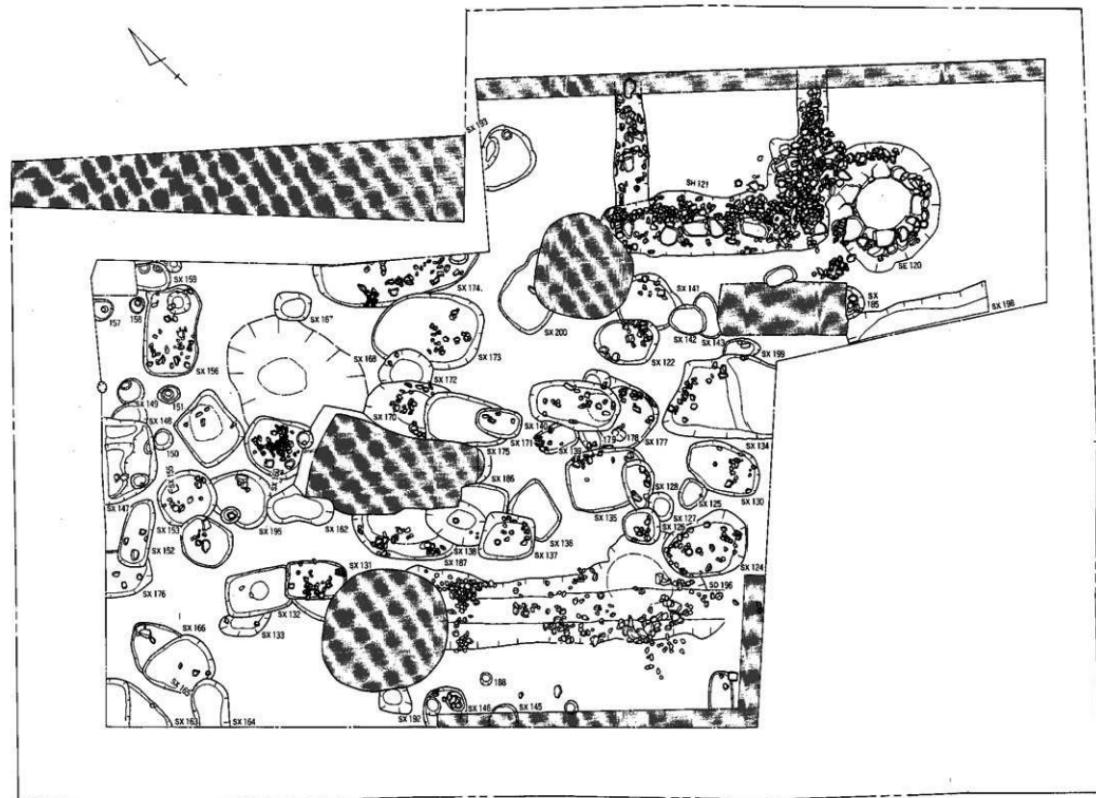


Fig.83 第3面遺構分布全体図 (1/80)

0 2 4m

遺構1基、柱穴8である。

遺構は、いずれも生活関連のもので、調査区全体にまんべんなく分布していた。土壤の中には掘方の形態からみて、墓と思われるものもあったが、墓と断定する確証に欠けた。

遺構の種類ごとに分布状況をみると、調査区西側には廃棄用土壤が、またより生活に密着した井戸や建物基礎、柱穴は東側に分布が偏るといった傾向がみられたが、第1・2面の分布の状況と比べると遺構の種類ごとのまとまりがやや弱くなっている点が指摘できる。これはおそらく遺構の時期が重複していることによるものであり、空間利用の形態の重複とみるべきであろう。

遺物には、肥前系の近世染付、古高取系、土師器、瓦質土器、備前焼、瀬戸、常滑、瓦器などの国産の陶磁器の他、李朝陶磁器、中国南宋～明代の陶磁器などの出土がみられ、中世的な資料が増加する傾向がみられた。

第3面の年代観は中世末期から江戸期前半頃と考えられる。

SE120 (Fig.88~91) 調査区の北東側に位置する。第2面で検出されたSX107は、井戸上部の凹に相当する。北側に隣接する建物基礎SH121との先後関係は、第4面において、本井戸の掘方であるSX194とSX304がSH121の下部に検出されたことより、SE120がSH121よりも先に作られたことがわかる。ただし、井戸が使用されていた頃の地表面は、第2面で検出されたSX107の検出面（標高4.58m）より若干高い面が想定できるが、この面では建物基礎SH121は検出されておらず、しかも新たな整地によって覆われていることから、井戸SE120がSH121よりも長く使用されていたといえよう。



Fig.84 第3面東南部完掘状況 (南西から)

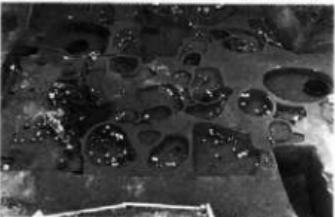


Fig.85 第3面東南部遺構分布状況 (南東から)

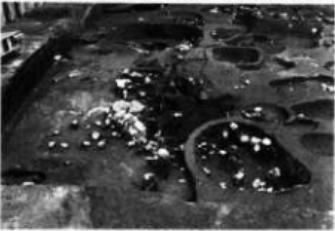


Fig.86 SD196及び周辺遺構 (南東から)



Fig.87 SH121検出状況 (南から)

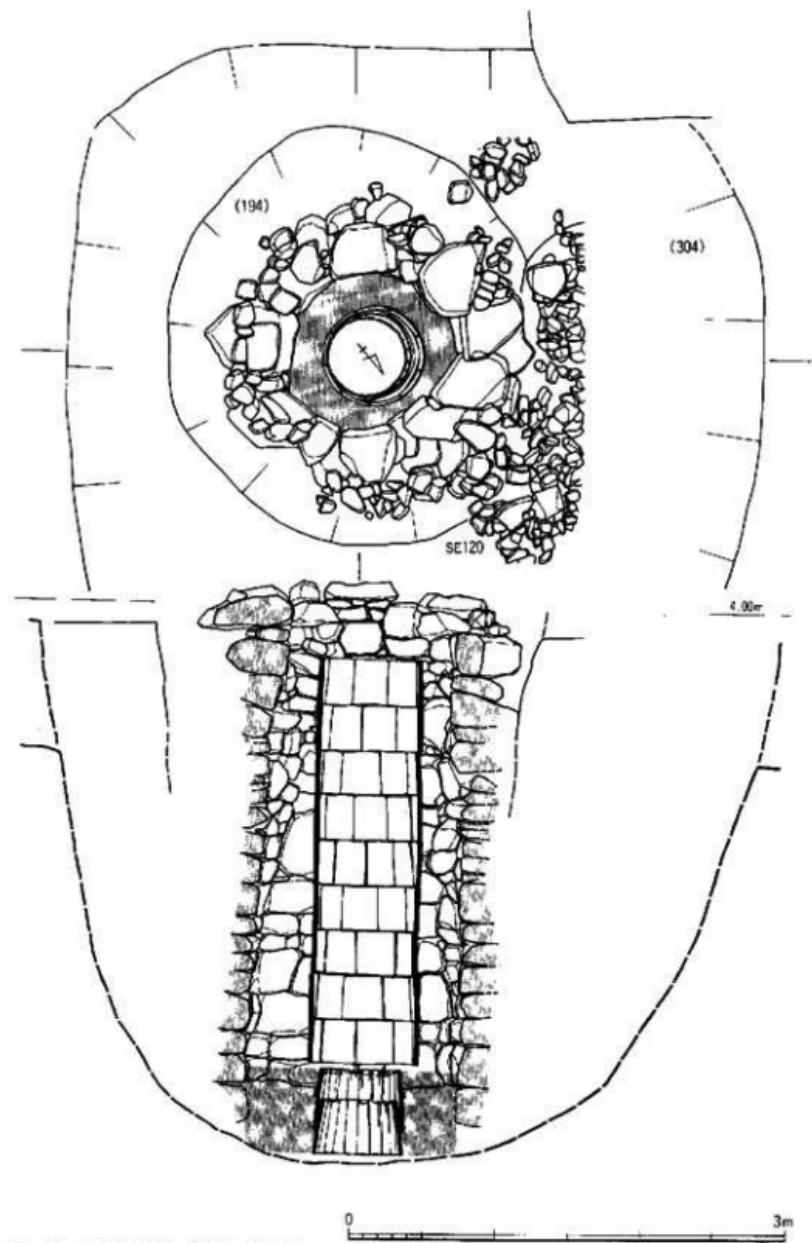


Fig.88 SE120平面及び断面図 (1/40)

SE120は井側に直径約1.2~1.3mの石組をし、その内側に井筒として瓦を組んだ井戸である。最下部には二段組みの木桶を用いている。石組は最下部が直径1.4~1.6mを測る。大振の礫石を内側にわずかに迫り出しながら三角持ち送りの手法で積み上げていることにより、石組壁体には弱い接線が生じ、平面形が八角形をなしている。瓦は長さ33~36cm、幅25~28cm、厚さ4cm前後を測る。一段あたり12枚前後ずつ円形に組み褐色粗砂を裏込めしながら構築する。直径75~80cm。深さは検出面から3.85m。

出土遺物 井筒内からの遺物の出土量は少ない。掘方SX304からは中世後期に遡る資料が出土しているが、いずれも混入品である。88~93は土師器皿である。口径6.2~8.5cm。器高1.2~1.8cm。92・93の底部には板目圧痕が残る。89・94は土師器坏で

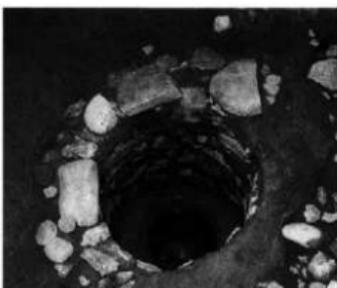


Fig.89 SE120完掘状況 (東から)



Fig.90 SE120出土遺物 (1/5)

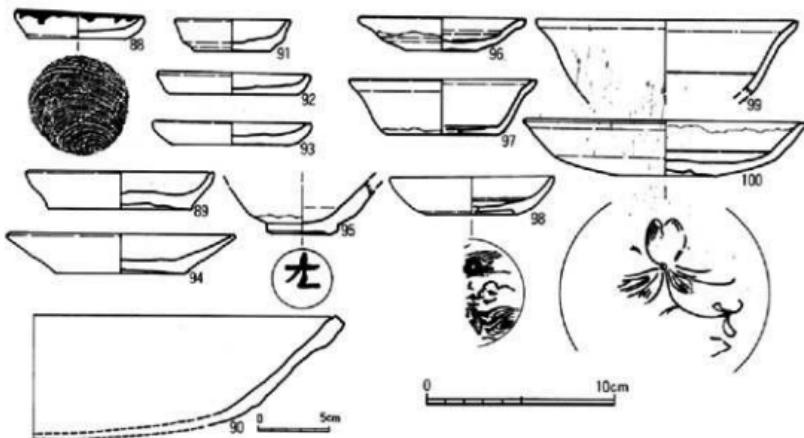


Fig.91 出土遺物実測図 (1/3・1/4) (SE120)

ある。口径は10.1・12.3cm、器高は2.1・2.2cm。94は直線的な体部で作りが精良である。90は土師質の土鍋である。口径44.4cm。口縁部が肥厚する。底部はカキ目調整。95は黒釉天目碗で、高台内に墨書きがみられる。96は同安窯系青磁皿、97・99は口禿の白磁皿・碗である。97の底部は釉を搔き取っている。98は染付皿で、口縁部と基底疊付の釉は搔き取っている。見込みに獅子と瑞雲をあしらう。明代のものか。口径9.0cm。100は白磁皿。見込みにヘラ描きの草花文を施文。口径15.3cm。

SH121 (Fig. 87・92~97) SE120の北側に隣接している、建物の基礎遺構である。平面形は、確認された範囲では「コ」の字形であるが、一辺が約4.5mの正方形をなすものと思われる。遺構は幅約1.0~1.2m、深さ50~52cmの溝を掘り下部に黒褐色粘質土を充填しかるく叩きしめ、その上に砂礫を入れて平坦にしている。さらに砂礫上面に約1.5mの間隔で、一抱えほどの扁平な石を据えている。石上面は標高4.00mのレベルで掘いほぼ水平である。北側の溝内の石は遺存状況は悪くまた大石も残っていないが、南側と同様に大石が据えられていたものと思われる。



Fig. 92 SH121周辺調査風景（東南東から）



Fig. 93 SH121・SE120発掘状況（南東から）

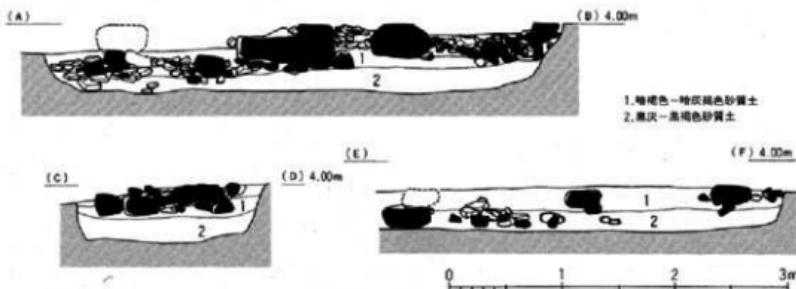


Fig. 94 SH121 掘方土層断面図 (1/50)



Fig.95 SH121横断土層断面(調査区北壁土層堆積状況)
(南西から)

構造的にはこの大石の上に柱を直接か、または根太を置き、柱を立てたものと思われる。江戸前期頃のもの。

出土遺物 基礎部分の溝内からは、土師器皿・壺、伊万里染付小碗、瓦質の摺鉢、備前摺鉢・壺、李朝陶器(徳利・小碗片)、青磁小碗、明代青花片(皿・小碗)、綠釉陶器(小瓶)片、銅錢(皇宋通宝)、石鍋片、釘、一石五輪塔170が出土している。いずれも二次的な混入品である。101・102は土師器皿で、口径・器高は101が6.8cm・1.6cm、102が7.5cm・1.6cm。102は静止糸切り離し。体部にはススが付着している。104は土師器灯明用小碗である。口径7.4cm、器高4.8cm。底部は回転糸切り離し。口縁部にはススが付着している。

SX122 (Fig.96・98・99) 調査区中央に位置している。平面形は不整な楕円形である。中世末～江戸期の廐棄用土壠である。長軸1.3m、短軸1.2m、深さ0.31mを測る。焼土、木炭片を多く含んでいる。フイゴの羽口、土師器皿片、土師質土鍋片、明代青花等が出土している。羽口の直径は5.5cm。103は土師器皿である。口径6.9cm、器高1.6cm。色調は明褐白色。焼成良好。



Fig.96 出土遺物実図図(1/3)
(SH121・122、SX123・124)



Fig.97 SH121出土遺物(1/5)

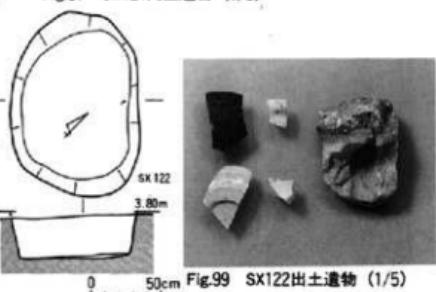


Fig.98 SX122平面及び断面図
(1/40)



Fig.100 SX126出土遺物 (1/6)

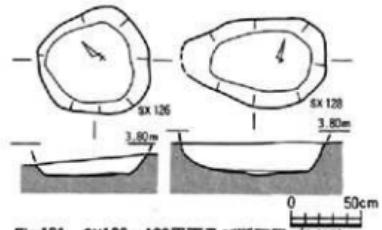


Fig.101 SX126・128平面及び断面図 (1/40)

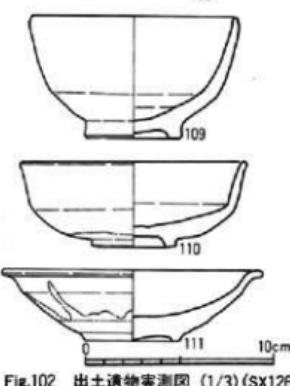
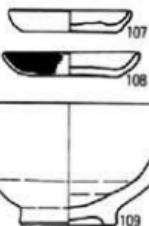


Fig.102 出土遺物実測図 (1/3) (SX126)

SX124 (Fig.96・103～105) 調査区南東部に位置している。平面形は不整な指円形である。長軸1.75m、短軸1.27m、深さ0.37mを測る。砂砾、木炭を多く含む。中世末～江戸期の廐棄用土壇である。

出土遺物 土師器皿・坏片、明代青花(碗)、李朝陶器(德利)片などが出土している。105・106は土師器皿である。いずれも灯明皿として使用。口径・器高は105が6.7cm・1.5cm、106が6.8cm・1.4cm。口縁部にはススが付着している。

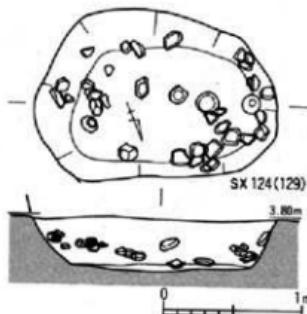


Fig.103 SX124(129)平面及び断面図 (1/40)

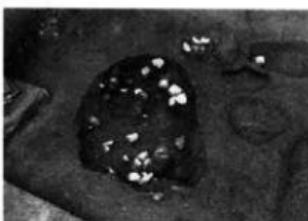


Fig.104 SX124(129)遺物出土状況 (東から)



Fig.105 SX124(129)出土遺物 (1/5)

SX126 (Fig.100~102) 調査区東南部に位置している。平面形はやや不整な円形である。直径0.8m、深さ0.13mを測る。SX127、SX128を切っている。砂砾を多く含む廃棄用の土壌である。江戸初期～前期のものか。

出土遺物 土師器皿・坏片、明代青花（碗）、古高取系陶器（碗・皿）、李朝陶器（德利）片などが出土している。107・108は土師器皿である。口径・器高は107が6.5cm・1.2cm、108が7.4cm・1.4cm。口縁部～体部にはススが付着。109～111は高取系の碗・皿である。109は碗で、内面から高台まで全面施釉。釉は火を受け釉が泡状に溶けて白濁色である。高台は回転削り出し。口径11.1cm、器高6.5cm。110は碗で、体部は回転ヘラケズリで成形。体部は中位で屈曲しやや外反する。体部下半から高台にかけては露胎。釉は白色と緑灰色が混濁している。口径12.2cm、器高4.5cm。111は皿である。口縁部は外方に丸く引き出されている。体部は回転ヘラケズリで成形。体部下半から高台は露胎。見込みにはトチの跡がつく。口径14.2cm、器高3.8cm。

SX128 (Fig.101) SX126から切られ、SX127を切っている。平面形は梢円形。長軸1.06m、短軸0.63m、深さ0.26mを測る。中世末の廃棄用土壌である。

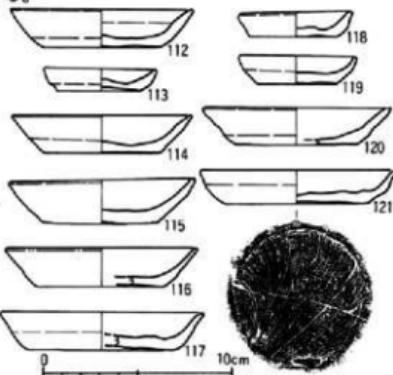
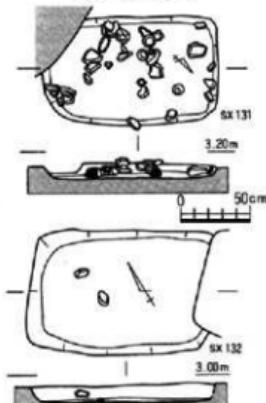
出土遺物 土師器皿片、釘片が出土している。



Fig.108 SX134出土遺物 (1/5)



Fig.106 SX131～134完掘及び遺物出土
状況（南東から）



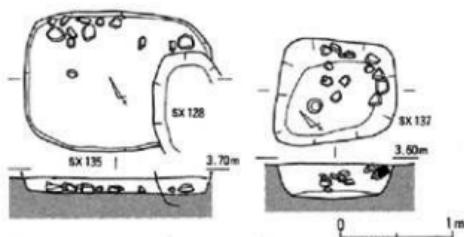


Fig.110 SX128・135・137平面及び断面図 (1/50)



Fig.111 SX137出土遺物 (1/5)

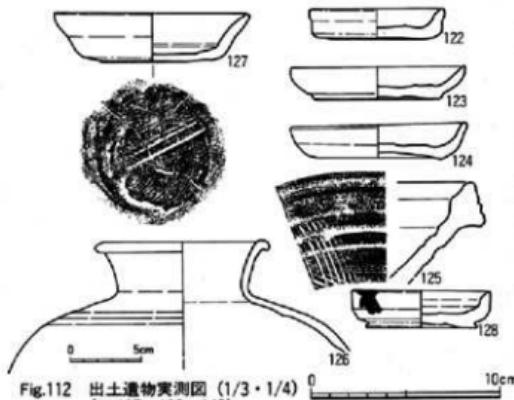


Fig.112 出土遺物実測図 (1/3・1/4) (SX137・138・140)

SX130 (Fig.83・109) 調査区東側に位置する。平面形は隅丸の長方形で、長軸12m、短軸1.04m、深さ0.27mを測る。SX125に切られている。砂礫・木炭片が多く含んでいる。中世末の廃棄用土壤。

出土遺物 112は土師器壺で、口径9.8cm。

SX131 (Fig.106・107・109)

調査区南西部に位置する。平面形は隅丸の長方形。長軸1.28m、短軸1.04m、深さ0.27mを測る。砂礫を多く含み木炭が層をなしている。

出土遺物 土師器皿・壺、釘、銅鏡（祥符元宝1、□□通宝1）が出でている。113は土師器皿である。口径5.9cm、器高1.1cm。114～117は土師器壺である。口径は9.7～10.8cm、器高2.2cm。117以外は体部が直線的で、色調はいずれも淡褐色。

SX132 (Fig.106・107) SX131により南壁を切られて入る。平面形は隅丸の長方形で大きさはSX131とほぼ同じである。長軸1.53m、短軸0.9m。深さは0.1m。埋土は暗灰色粘質土である。土師器片が出でしている。

SX134 (Fig. 83・106・108・109)

浅い土層通りである。

出土遺物 土師器片、瓦質土器、瓦器片、備前摺鉢などが出土。118・119は土師器皿である。口径・器高は118が6.2cm・1.4cm、119が6.3cm・1.6cm。板目压痕が残る。120は土師器環で、口径・器高は10.12cm・2.0cm。

SX135 (Fig. 109・110) 調査区中央に位置している。平面形が隅丸の長方形の廃棄用土壌である。長軸1.67m、短軸1.24m、深さ0.17m。

出土遺物 土師器皿・环、瓦質土器片が出土。121は土師器環で口径10.5cm、器高1.7cm。体部中位で屈曲。

SX137 (Fig. 110～112) 調査区南側中央に位置する。平面形が隅丸台形の廃棄用土壌である。長軸1.07m、短軸0.97m、深さ0.33mを測る。

出土遺物 土師器環、土人形、釘片、備前摺鉢、褐釉陶器壺片等

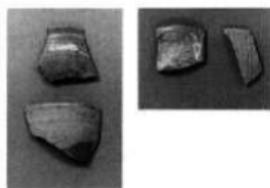


Fig.114 SX152・160出土遺物 (1/5)

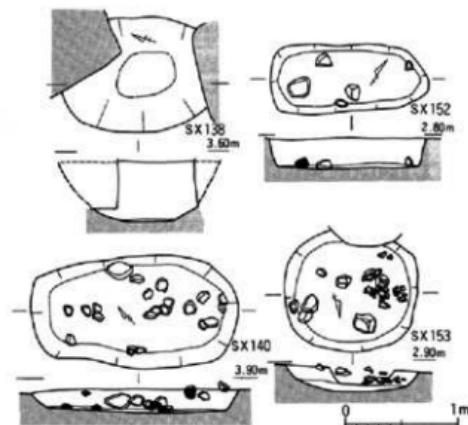
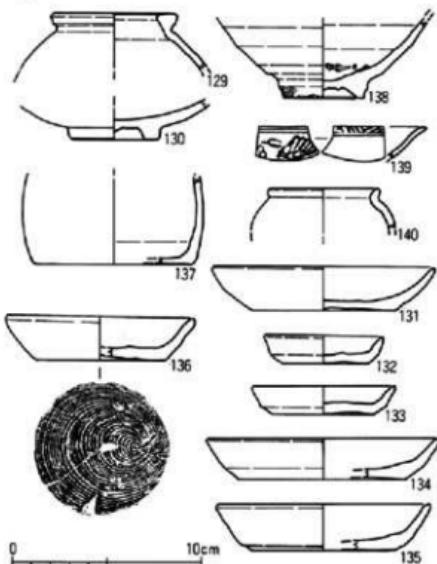


Fig.113 SX138・140・152・153平面及び断面図 (1/50)

Fig.115 出土遺物実測図 (1/3)
(SX144・152・153・191・197)

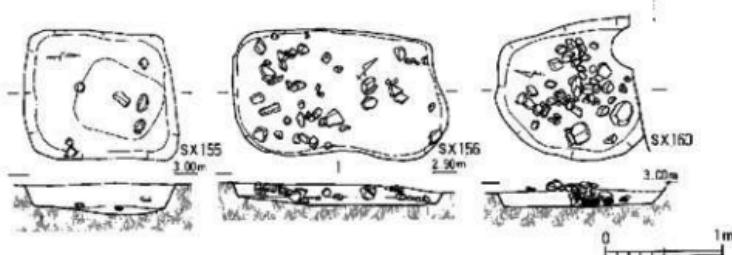


Fig.116 SX155・156・160平面及び断面図 (1/50)

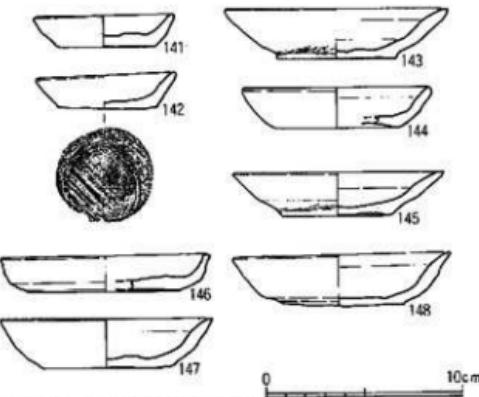
が出土している。122・123は土師器皿である。口径・器高は122が7.1cm・1.6cm、123が9.3cm・1.6cm。124は土師器坏で、口径・器高は9.6cm・1.9cm。125は備前摺鉢である。126は褐釉陶器壺で、口径12.3cm。肩に沈線を有す。

SX138 (Fig. 112・113) 調査区中央部に位置する。楕円形の廃棄用土壙である。SX137から切られ、SX187を切る。

出土遺物 土師器皿・坏片などが出土。127は土師器坏で、口径10.6cm・器高2.6cm。体部は外反し口縁端部内面には弱い沈線がめぐる。底部には板目压痕を残す。

SX140 (Fig. 112・113) 不整な楕円形の廃棄用土壙である。長軸1.82m、短軸1.02m、深さ0.23mを測る。砂礫・木炭を多く含んでいる。

出土遺物 土師器皿・坏・瓦質土器・釘・鐵滓・魚骨などが出土している。128は土師器皿である。口径・器高は7.4cm・1.9cm。口縁部にはススが付着している。

Fig.117 出土遺物実測図 (1/3)
(SX155・160・164・165)

SX152 (Fig. 113～115) 調査区西側に位置する。やや不整な長方形の土壙である。長軸1.42m、短軸0.63m、深さ0.28mを測る。砂礫・木炭を多く含んでいる。江戸期の廃棄用土壙。

出土遺物 土師器皿・坏・瓦質土器・青磁皿・唐津系碗・釘・鐵滓・魚骨などが出土している。131は土師器坏である。口径・器高は10.1cm・2.4cm。

SX153 (Fig. 113・115) 調査区

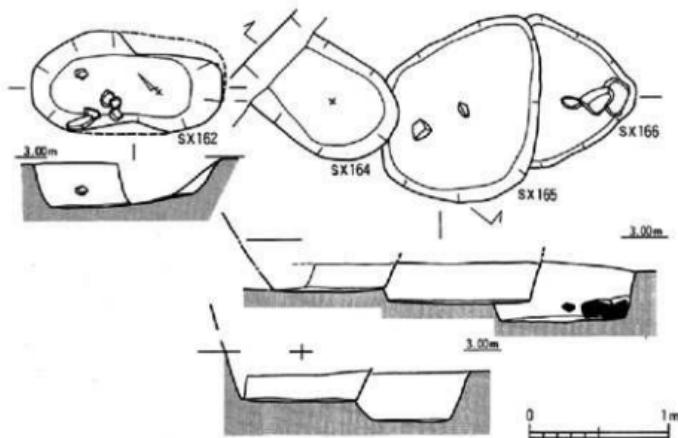


Fig.118 SX162・164-166平面及び断面図 (1/40)

西側に位置する。平面形は円形の土壇である。直径1.8m深さ0.25mを測る。砂礫・木炭を多く含んでいる。江戸期の廃棄用土壇。

出土遺物 土師器皿・壺が出土している。132~135は土師器皿・壺である。皿の口径・器高は6.4~7.7・1.5cm。壺の口径・器高は11.4~12.6・2.1~2.4cm。133と135の底部には板目がつく。

SX155 (Fig.116・117) 平面形は隅

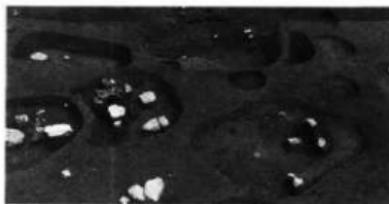


Fig.119 SX160発掘状況 (南西から)



Fig.120 SX171出土遺物 (1/5)

Fig.121 SX174出土遺物 (1/5)

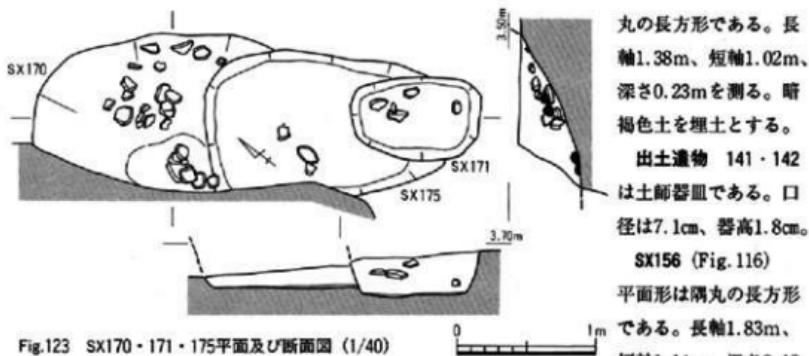


Fig.123 SX170・171・175平面及び断面図 (1/40)

丸の長方形である。長軸1.38m、短軸1.02m、深さ0.23mを測る。暗褐色土を埋土とする。

出土遺物 141・142
は土師器皿である。口径は7.1cm、器高1.8cm。

SX156 (Fig.116)

平面形は隅丸の長方形である。長軸1.83m、短軸1.14m、深さ0.18m

mを測る。砂礫を多く含む暗褐色粘質土を埋土とする。
SX159を切る。

出土遺物 土師器片、瓦質土器片が出土。

SX159 (Fig.83) 不定形の土壤である。長軸1.48m、短軸1.27m、深さ0.15mを測る。焼土・木炭を多く含む。

SX160 (Fig.114・116・117・119) 不整な円形の廃棄用土壤である。長軸1.5m、短軸1.25m、深さ0.19m。砂礫を多く含む。

出土遺物 143・144は土師器壺である。口径・器高は143が11.4・2.6cm、144が9.8・2.2cm。143の体部口縁は肥厚する。

SX162 (Fig.118)

不整な長円形の廃棄用土壤。長軸1.5m、短軸1.25m、深さ0.19m。砂礫を多く含む。釘・獸骨片が出土。

SX164～SX166 (Fig.117・118) 調査区南西部に位置する。いずれも不整形の中世後期の廃棄用土壤で、木炭



Fig.124 SX175出土遺物 (1/5)

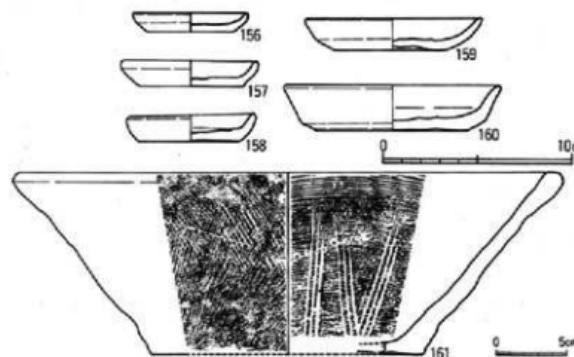


Fig.125 出土遺物実測図 (1/3・1/4) (SX175)

片や焼土、砂礫を多く含む。切合の関係はSX1
66→165→164。

出土遺物 145は土師器坏。口径・器高は10.8・2.3cm。SX164出土。146～148は土師器坏。147・148は口縁部が中位で肥厚する。口径・器高は10.8～11.5・1.9～2.6cm。SX165出土。

SX170 (Fig.123) 調査区中央に位置する。平面形が横円形の廃棄用土壤である。長軸2.0m、短軸1.50m、深さ0.62m。埋土は礫石を多く含む暗灰色粘質土。遺物は土師器小片のみ。なお調査区中央部のSX170～175の切り合の関係はSX174→173→172→170→175→171である。

SX171 (Fig.120左・122・123) 平面形が隅丸の長方形の廃棄用土壤である。長軸0.94m、短軸0.60m、深さ0.38m。中世後期～末。

出土遺物 土師器皿・坏、明代青花、李朝白磁碗、青磁皿片等が出土している。152・153は土師器皿である。口径・器高はほぼ等しく7.3・1.5cmを測る。

SX172 (Fig.83) 平面形が円形の土壤で、直径1.8m、深さ0.35m。土師器皿、銅鏡（□□通宝）が出土。二次的な混入品である。

SX173 (Fig.122・126・127) 不整な横円形の廃棄用土壤である。長軸2.28m、短軸1.58m、深さ0.35m。砂礫を多く含む。

出土遺物 明代青花、李朝陶磁器、土師器が出土している。いずれも混入品である。154は土師器灯明皿である。口径・器高は5.2・1.7cm。

SX174 (Fig.83・121・122) 調査区北壁にかかる。包含層である。

出土遺物 土師器皿・坏、滑石製石鍋、魚骨、龍泉窯青磁片などが出土している。155は土師器坏で、口径・器高は11.0・1.8cm。口縁部に

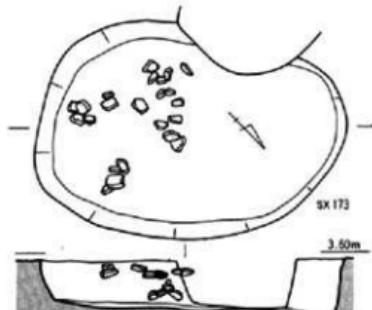


Fig.126 SX173平面及び断面図 (1/40)

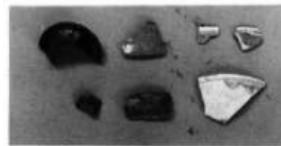


Fig.127 SX173出土遺物 (1/5)

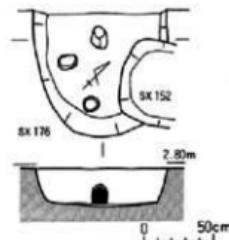


Fig.128 SX176平面及び断面図 (1/40)

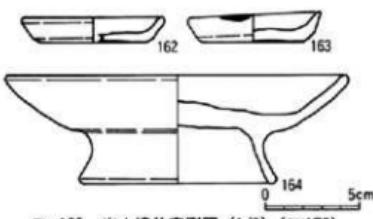


Fig.129 出土遺物実測図 (1/3) (SX176)

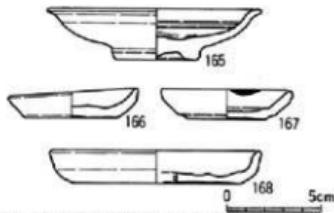


Fig.130 出土遺物実測図 (1/3) (SX185・186)

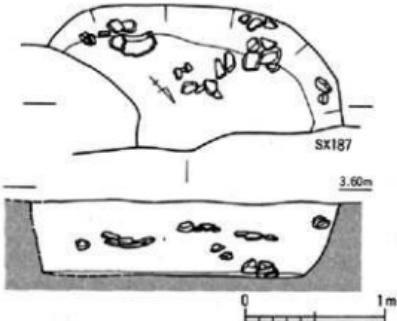


Fig.131 SX187平面及び断面図 (1/40)



Fig.132 SX187出土遺物 (1/7)

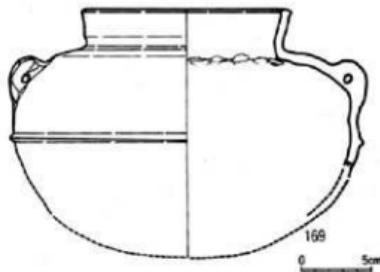


Fig.133 出土遺物実測図 (1/4) (SX187)

ススが付着している。

SX175 (Fig. 123~125) 平面形が隅丸の長方形の廃棄用土壙である。長軸1.7m、短軸1.15m、深さ0.21m。砂砾を多く含む。

出土遺物 土師器皿・壺、瓦質摺鉢、土師質土鏡、黒釉天目碗、李朝陶器碗、魚骨などが出土。いずれも二次的な混入品。156~158は土師器皿である。口径・器高は6.2~7.4・1.0~1.4cm。159・160は壺である。口径・器高は159が9.6・1.8、160が11.6・2.5cm。161は瓦質の摺鉢である。口径は39.4cm、器高は14cm。かなり使い込んでおり内面下半は平滑になっている。Fig.124右上は黒釉天目碗。同右下は李朝青磁碗。

SX176 (Fig. 128・129) 調査区西壁にかかる。平面形が梢円形の廃棄用土壙。短軸が1m、深さ0.26m。砾石を多く含む。

出土遺物 土師器皿・壺・脚付壺片が出士。162・163は土師器皿である。口径・器高は162が7.2・1.4cm、163が7.1・1.4cm。164は口径18.4cm、器高5.8cm。

SX185 (Fig. 83・130) 調査区東側に位置する。平面形が円形の土壙である。直径0.87m。柱穴の可能性がある。土師器片、李朝白磁皿（165）、釘、獸骨が出土している。165は見込みと豊付に砂目がつく。目跡は6ヶ所。薄い黄白色釉が全面に施釉されている。

SX186 (Fig. 83・130) 調査区中央に位置する。SX185と同様な円形の土壙である。直径0.80m前後。埋土は砂砾混じりの暗褐色土。



Fig.136 SX191出土遺物 (1/4)



Fig.137 SX194出土遺物 (1/4)



Fig.135 SH121出土遺物 (1/5)

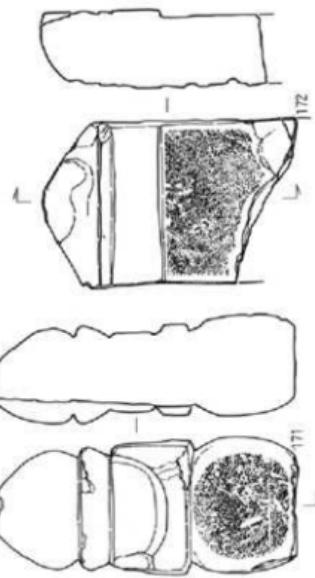
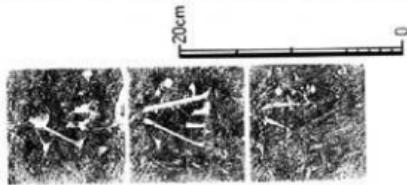


Fig.134 出土遺物測量図 (1/5) (SH121・SX191・194)

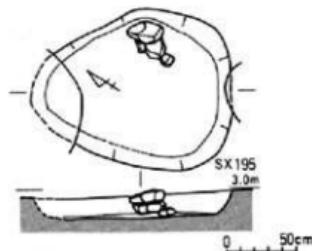


Fig.138 SX195平面及び断面図 (1/40)



Fig.139 SD196土層断面図 (1/40)

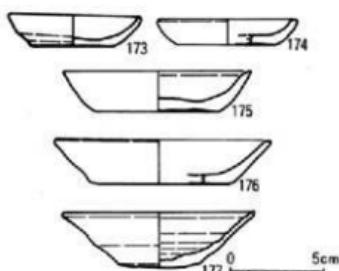


Fig.140 出土遺物実測図 (1/3) (SD196・SX198)



Fig.141 SD196出土遺物 (1/5)

出土遺物 土器片が出土。二次的な混入品である。166・167は土器皿である。口径・器高は166が6.8・1.4cm、163が7.0・1.6cm。いずれも底部には板目圧痕がつく。

SX187 (Fig.131~133) 調査区中央に位置する。平面形が梢円形の廃棄用の土壙である。長軸2.2m、短軸(1.5m)、深さ0.61m。SX138に切られている。

出土遺物 土器皿・壺、瓦質の茶釜、土器質土鍋片などが出土している。169は瓦質茶釜である。口径14.9cm、復元器高18cm、胴部径25.2cm。口縁部はやや外傾し、端部は丸く仕上げられている。肩部に耳が、胴部中位には三角突帯が貼付される。器面は丁寧なヘラミガキ。底部は丸底か。

SX195 (Fig.138) 調査区西側に位置する。平面形が不整な梢円形の廃棄用土壙である。SX153に切られている。埋土は砂礫混じりの暗灰色粘質土。

出土遺物 土器片、銅錢（祥符元宝）が出土している。二次的な混入品である。

SD196 (Fig.83・139・140) 調査区南壁に沿って確認された。長さ6m、幅1.4m、深さ0.28~0.32mを測る。部分的に投棄された砂礫が集中して出土している。焼土、木炭片などを多く含む。

出土遺物 土器皿・壺、銅錢（皇宋通宝）が出土している。173・174は土器皿である。口径・器高は173が7.1・1.7cm、174が7.5・1.4cm。両者とも底部に板目圧痕を残す。175・176は壺である。口径・器高は175が10・2.1cm、176が11.5・2.4cm。

SX168 (Fig.83・122) 調査区中央から西側の包合層（暗灰色粘質土）である。

出土遺物 149は土器皿である。口径7.4cm、器高1.6cm。150・151は土器壺である。口径・器高は150が10.6・2.3cm、151が11.4・2.5cm。いずれの底部にも板目圧痕がつく。151の口縁部内面には弱

い沈線がめぐる。

SX406（包含層） SH121から切られている暗褐色土層である。この層は赤褐色焼土層の下部にあり、SE120の掘方の上部にあたる。

出土遺物 土師器片、瓦質土器片、李朝白磁皿などが出土している。178は李朝白磁皿である。高台径は6.6cm。胎土は精良でやや軟質。見込みには砂目跡が6ヶ所残る。

SX413・414（検出面・包含層） **出土遺物** 第3面の検出作業時に出土した遺物である。一部江戸期の遺物が混入している。土師器片、瓦質土器片、常滑、瀬戸、李朝陶磁器片、明代染付などのほか砥石、刀子、釘、銅錢（太平通宝、祥符通宝、洪武通宝など）、鉄津、獸骨、魚骨などが出土している。179は黒釉天目碗で、口径13.8cm。胎土は精良な淡褐色で、内外面には禾目がみられる。180・181は明代青花である。180は碗でやや高めの高台がつく。内面見込みには牡丹文が描かれる。181は基苟底の皿である。口径9.8cm、器高4.6cm。口縁部には波濤文帯があり、外面下部には芭蕉葉が、内面見込みには花鳥文が描かれる。182は李朝白磁碗の底部片である。ペタ高台外面に墨書で、花押が書かれている。

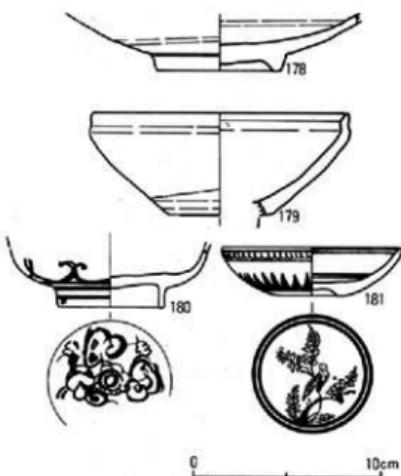


Fig.142 出土遺物実測図 (1/3) (SX406・414)

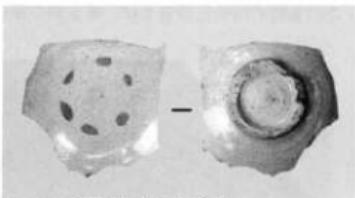


Fig.143 SX406出土遺物 (1/5)

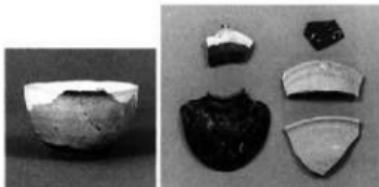


Fig.144 SX413出土遺物 (1/5)

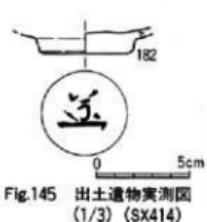


Fig.145 出土遺物実測図 (1/3) (SX414)



Fig.146 SX414出土遺物 (1/5)

4、第4面の調査

概要 第4面は第3面を40~80cm掘り下げる面にあたり、標高2.4~2.8mを測る遺構検出面である。現地表面からは-3.5mほどを測る。第3面は東西端部の比高差が約1mあったが、この面では40cm程度で、ほぼ水平である (Fig. 149・150)。

検出面の設定にあたっては、遺構と遺物の出土状況をみながら任意に設定した。この検出面を境にしてそれまでの厚みのある土層から15~20cm前後の薄い土層に変わる。

検出面の層位的な位置を北壁の土層断面でみると、第67・68層の下面あたりのレベルに相当する。このレベルでは人為的な埋土が主体となる土層を横断しているために、検出面上には黄褐色の真砂土や、砂礫を多く含む灰褐色土の分布が部分的に見られ、遺構と誤認する例があった。第5面との関係で土層（人為的埋土）の平面分布のありかたをみると、第2・3面と同様に調査区の中央部から東側には明褐～褐色砂質土層が主にみられる。西側にかけては暗灰色粘質土がそれらを覆うように堆積しており、緩やかに西側に向かって低くなっている状況がある。この東側の明褐色砂質土は、第5面で確認された道路状遺構SG354の上部からそれを覆う範囲



Fig.147 第4面発掘状況（南東から）

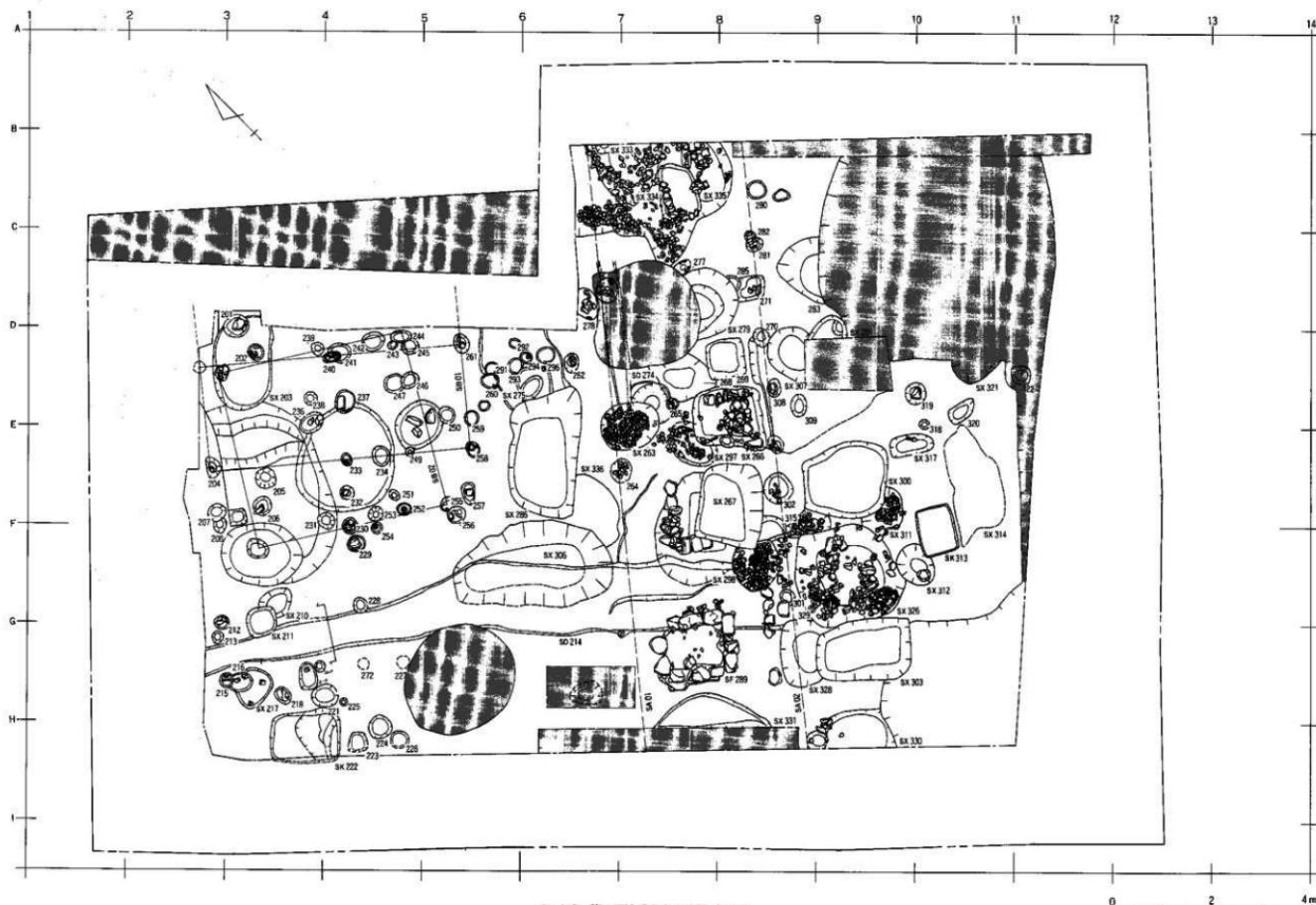


Fig.148 第4面遺構分布全体図 (1/80)

に相当しており、基盤造作のための一連の埋土と考えられ、第3面の検出面にその上部が一部確認されている。断面観察では5~10cmの厚さで版築状に堆積しており第5面から第3面下部まで連続してみられる。ただし後世の造構で断されており遺存状況は悪い(Fig.151)。

造構は、櫓列2条、掘立柱建物2棟、溝2条、井戸1基、石組造構3基、土壤35基、柱穴80が検出された。造構は調査区全面にわたって分布しているが、造構の種類ごとに分布状況が若干異なっている。大まかな分布状況をみると以下のようになる。石組造構は調査区の中央からやや東側に集中している。この地点は第2面から3面においても同様に石組造構がみられたところである。溝は調査区南壁寄りに東西に延びている。これには直交して平行する2条の櫓列が南北に通っている。この櫓列は第5面の道路状造構を切っている。掘立柱建物は調査区の北西部に位置しており、柱穴の分布からみて建物群が北西側にかけてさらに展開する可能性がある。井戸は調査区西壁側に位置する。

第4面の主な造構間の切り合い関係をまとめると以下となる。

SG354→SA02(SP271)→SP285→SX279→SE042。
 SA02(SP361)→SD214→SX328。
 SB01(SP243)→SB02(SP244)。
 SX306→SD214→SF289→SX328→SX326→
 SX303→SX368→SX275→SX274→SX263。
 SD274→SX278、SD274→SA01。
 SX283→SE120(掘方304)→SX284。
 SX311→SK300。
 SF298→SD214。



Fig.149 第3面から4面への掘り下げ作業(北から)



Fig.150 第4面掘り下げ作業(北北西から)



Fig.151 西側壁面土層堆積状況(南東から)



Fig.152 第4面北西部掘立柱建物検出状況(南から)



Fig.153 掘立柱建物平面及び断面図(1/80)

出土遺物は、土師器皿・坏、瓦器、瓦質土器、土師質土鍋、摺鉢、備前摺鉢、常滑窯、瀬戸窯、東播磨系の捏鉢などの国産陶磁器、滑石製石鍋、銅鏡、釘などのほか、中国・朝鮮からの輸入陶磁器が多く出土している。

第4面の年代観はおおむね中世後期である。

SA01・02 (Fig. 148) 調査区の中央において、南北に平行しながら通る2条の柱穴列が確認できた。西側の柱穴列をSA01、東側の柱穴列をSA02とした。いずれも櫛もしくは屏と考えられる。柱穴列の方位はいずれも磁北から東に38°30'偏っている。

SA01の柱穴列は他の遺構によって壊され消滅しているものが多いが、柱間隔は約1~1.3m前後を測る。柱穴は直径が40~50cmほどで、小砾を根石として充填している。

SA02の柱穴の間隔は約1.1mでSA01と比べて整然とした間隔をとっている。柱はSA01と同様に大量の小砾で根固めが行なわれている。

SA01と02の先後関係は、第5面のSG354との位置関係からみると (Fig.219)、SG354

の西端部に重複してSA02がのり、SG354より後につくられたSD390を切ってSA01が重なっていることから、SA02とSG354とが一連の構造体と考えると、SA02の廃絶後にSA01が新たに造られたものと考えられる。

SB01 (Fig. 152・153) 柱穴が調査区の北西側にまとまって検出されたが各柱穴の形状と埋土の状況、配列から2棟の建物を想定した。

SB01は梁行1間×桁行4間の間取りの建物である。棟筋は磁北に対して西へ50°30'偏る東西棟である。この方位は、先に述べたSA01・02の方向とは直交している。建物の柱の配列は、南北壁のそれぞれの中央柱に側柱がやや寄っている。床面積は約11m²で、規模は小さい。

SB02 (Fig. 152・153) 調査区にかかっている。SB01に重複しており、SB01(SP243)廃絶後にSB02(SP244)が建てられている。SB02は梁行2間×桁行(3間)の間取りの建物である。棟筋は磁北に対して西へ60°偏る東西棟である。床面積は約21m²ほどであろう。

これら2棟の建物と他の遺構との関係は、方向性だけからみるとSA01とSA02に関連があるようと思われるが、柱穴の遺存状況や出土遺物から見ると、西側に延びる溝SD214との関係がより密接のように思われる。すなわち、遺構の切り合い関係では、SD214はSA01・SA02が廃絶された後の所産であり、ま



Fig.154 SX203遺物出土状況（南西から）

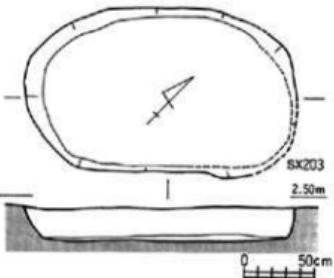


Fig.155 SX203平面及び断面図 (1/40)

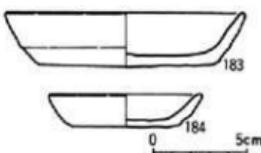


Fig.156 出土遺物実測図 (1/3)
(SX203, SP213)

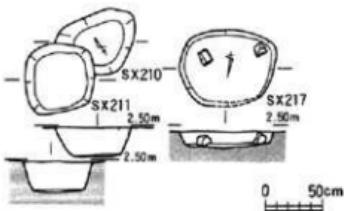


Fig.157 SX210・211・217平面及び断面図 (1/50)



Fig.158 SK222完掘状況（北東から）

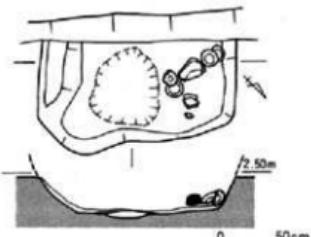


Fig.159 SK222平面及び断面図（1/40）

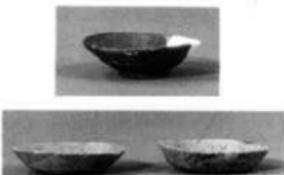


Fig.160 SK222出土遺物（1/5）

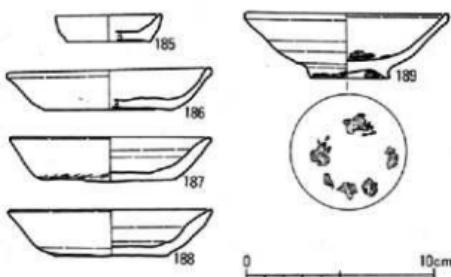


Fig.161 出土遺物実測図（1/3）(SK222)

たSB01・SB02とSD214との関係は出土遺物から見るかぎり建物の方が新しい。したがって櫓もしくは櫓が廃絶された後に溝が掘削され、それに合わせて建物がその後に造られたことが推定される。

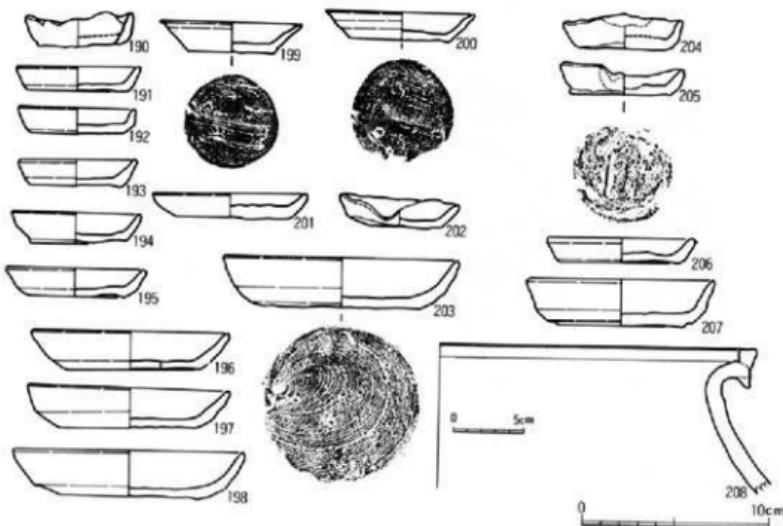
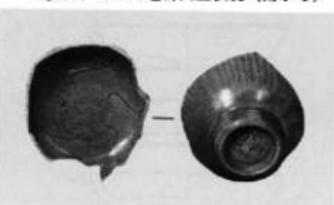
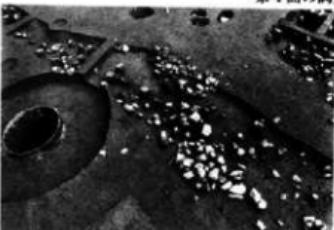
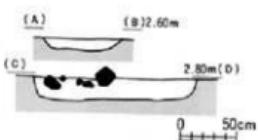
SX203 (Fig. 154~156)

調査区北西隅に位置する。指円形の廃棄用土壤である。埋土は砂疊混じりの暗青灰色粘質土。長軸1.93m、短軸1.23m、深さ0.23mを測る。

出土遺物 土器片、釘などが出でている。いずれも二次混入品である。183は土器器底である。口径12.8cm、器高2.8cm。底部には板目を残す。

SX210 (Fig. 157) 調査区西側に位置する。平面形が指円形の廃棄用土壤である。SX211によって切られている。長軸0.83m、短軸0.61m、深さ0.27mを測る。

SX211 (Fig. 157) 平面形が隅丸方形の土壤である。柱穴の可能性もある。SD214を切っている。一辺0.62m、深さ0.28mを測る。



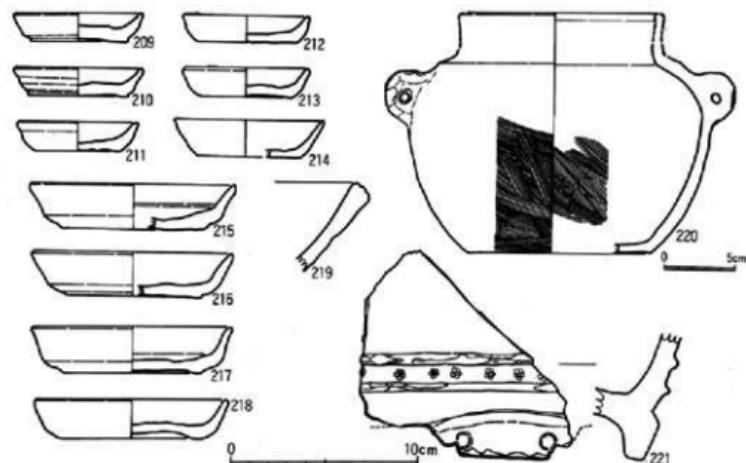


Fig.157 出土遺物実測図 (1/3 · 1/4) (SD214)



Fig.168 SD214出土遺物

長方形である。墓壙の可能性が高い。長軸1.41m、短軸0.91m、深さ0.25mを測る。

埋土は砂礫をわずかに含む暗灰褐色土。西壁側に土師器壊・皿、李朝陶器碗が副葬された状況で出土している。

出土遺物 185~188は土師器である。185は皿で、口径5.6cm、器高1.4cm、底径4.4cm。口径に比してやや器高が高い。186~188は壺である。口径・器高は、186が11.0cm・2.2cm、187が10.7cm・2.5cm、188が11.0cm・2.5cmを測る。186は口縁端部が丸く肥厚している。187・188は体部を厚く作り、口縁端部がわずかに外反する。底部には板目を残す。189は李朝陶器碗である。口径110cm、器高3.5cm、高台径4.3cm。薄い灰緑釉を全面に施釉。体部下半はやや膨らみ、口縁端部はわずかに上方へつまみ出されている。

SX217 (Fig. 157) 調査区西側に位置する。平面形が隅九方形の廃棄用土壙である。SD214を切っている。長軸0.86m、短軸0.71m、深さ0.19mを測る。埋土は砾石を多く含む暗灰色粘質土。土師器小片が出土している。

SP213出土遺物 (Fig. 156) 184は土師器皿である。口径8.2cm、器高1.9cmを測る。

SK222 (Fig. 158~161) 調査区南壁西側にかかるて検出された。平面形はやや不整な隅九長方形である。墓壙の可能性が高い。長軸1.41m、短軸0.91m、深さ0.25mを測る。

SD214 (Fig. 162~168) 調査区南壁側に寄って東西に延びている。長さ約15m、幅0.45~1.26m、深さ0.18~0.30mの規模で検出された。溝の断面形は残りが悪いためにやや不明確であるが、逆台形をなすと思われる。埋土は砂礫を多く含む黒褐色~黒灰色粘質土で、溝内には部分的に土師器壺や皿、または礫石を一括投棄している箇所が見られた。東端部と西端部の中央を結んだ線を主軸線とすると、その方向は磁北から西に53°偏っている。先に述べたSA01・02とはほぼ直交している。

出土遺物 土師器皿・壺、瓦質火鉢・湯釜、摺鉢、滑石製石鍋、釘、獸骨などが出土している。一部二次的な混入品がある。190~207は土師器である。溝の中央から西側にかけて出土した。190~195、199~206は皿である。口径・器高は5.9~8.0cm・1.2~1.7cmを測る。199と200は、体部は直線的に仕上げており、胎土・焼成ともに良好である。底部には板目を残す。その他の皿は厚手の作りで、口縁部の歪みがやや目立つ。胎土焼成とともに不良である。196~198・203・207は壺である。口径・器高は10.2~12.6cm・1.9~2.7cmを測る。198・203は体部下半にヘラオコシ痕が残

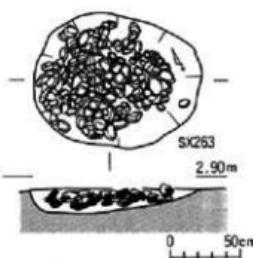


Fig.169 SX263平面及び断面図 (1/40)



Fig.170 SP262出土遺物

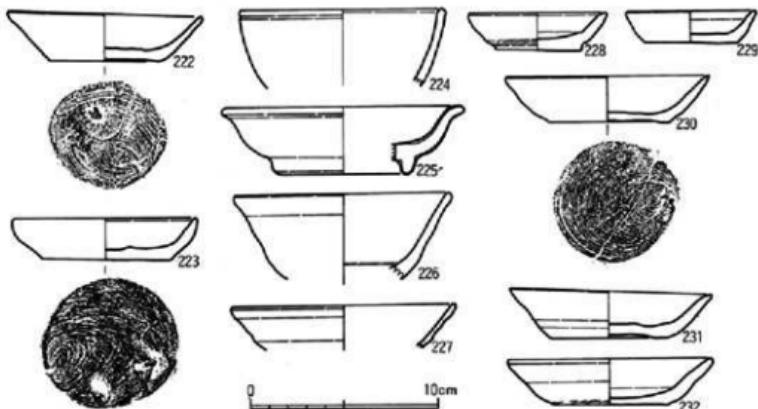


Fig.171 出土遺物実測図 (1/3) (SP241・262, SX263)

り、胎土精良でよく締まっている、これら以外は胎土・焼成とも不良。色調はおむね明褐色。208は常滑大甕である。口径45.2cm。

頸部はつよく屈曲し、外面には自然釉が薄くかかる。209~221は東側にまとめて出土した。209~218は土師器である。209~214は皿で、口径・器高は6.5~8.3cm・1.5~2.0cm。209と212の底部には板目が残る。214は他と比べ薄手で胎土焼成ともに良好。215~218は壊である。口径・器高は10.4~11.1cm・2.1~2.5cmを測る。215の底部には板目が、また215・217の体部下半にはヘラオコシ痕が残る。219は瓦質の摺鉢である。220は瓦質の湯釜である。口径14.8cm、器高17.2cm、胴部最大径21.7cm。底部は平底で、肩部に耳がつく。肩から頸部にかけてはヘラミガキ。221は瓦質火鉢底部片である。器面は丁寧なヘラミガキ仕上げ。底部下部には2条の突帯をめぐらしその間に菊花文をスタンプしている。

SP241出土遺物 (Fig. 171) 222・223はいずれも土師器壊である。口径・器高は9.9~10.5cm・2.2~2.5cm。222は体部が直線的で、作りが精良である。灰白色。223は体部が丸く、口縁部内面に弱い模様が巡る。



Fig.172 SF266発掘状況(南東から)



Fig.173 SF266出土遺物(1/5)

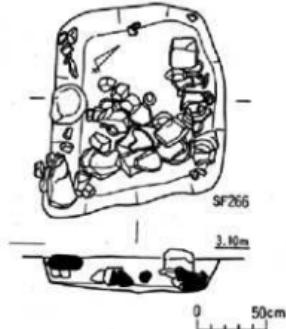


Fig.174 SF266平面及J断面図(1/40)

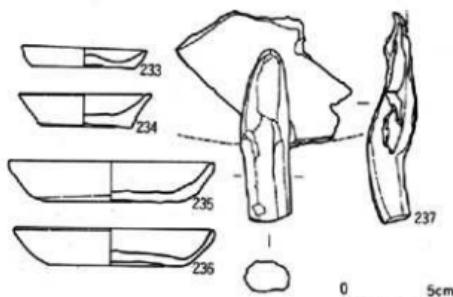


Fig.175 出土遺物実測図(1/3)(SF266)

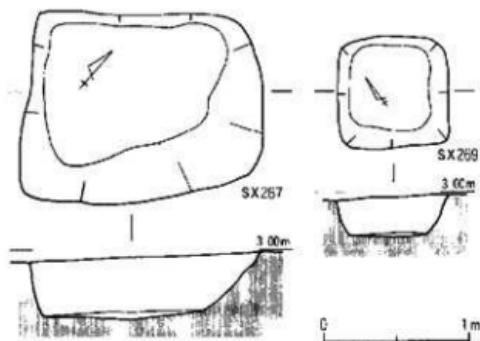


Fig.176 SX267・269平面及び断面図 (1/40)

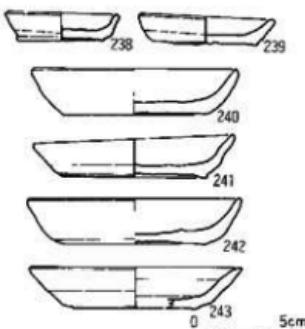


Fig.177 出土遺物実測図 (1/3) (SX257)

SP262出土遺物 (Fig.171) 224・

225は龍泉窯系青磁である。224は小碗で口径11cm。口縁部内外面に沈線がめぐる。225は皿で、口径13.1cm。262・263は李朝陶器碗で、口径は、226が12.8cm、227が12.2cm。262には透明釉を、263には灰白色釉を薄く施す。

SX263 (Fig.169・171) 調査区の中央に位置する。平面形は橢円形で、長軸1.2m、短軸が1.0m、深さ0.18mを測る。握り拳大前後の砾石が多くつまっており、柱穴の可能性がある。

出土遺物 228～232は土師器である。228・229は皿で、口径・器高は228が7.4cm・1.9cm、229が7.1cm・1.7cm。229の底部には板目が残る。230～232は壺で口径・器高は10.9～11.1cm、2.3～2.7cm。やや器高が高い。いずれも板目が底部に残る。

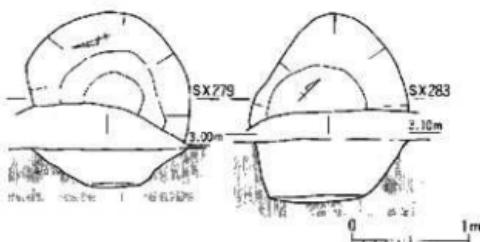


Fig.178 SX279・SX283平面及び断面図 (1/50)

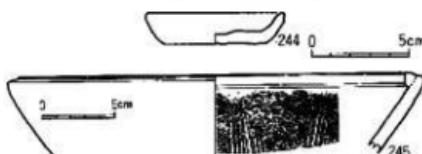


Fig.179 出土遺物実測図 (1/3・1/4) (SX274・278)

SF266 (Fig. 172~175) 調査区中央に位置する。平面形が隅丸の長方形の竪穴を掘り、一抱えほどの砾石を竪穴内床面に据えて平面形が方形に石を組んでいる。遺存状況は悪く石組第1段目しか残っていない。内面は一辺が0.7m前後である。

出土遺物 土師器、瓦質火受け、李朝陶器、明代染付などが出土している。いずれも二次混入品である。233~236は土師器である。233・234は皿で、口径・器高は233が6.6cm・1.0cm、234が7.1cm・1.7cm。235・236は壊で、口径・器高は235が11cm・2.1cm、235が11cm・2.0cm。236は作りが硬質で陶器的である。口縁端部に弱い段がつく。237は瓦質土器火受けである。浅皿に長さ5cmほどの把手を挟みこんで接合している。Fig. 173左・中央は明代染付・李朝陶器片である。明代染付は見込みには獅子が描かれている。李朝陶器は灰緑釉の壺片と白釉皿である。

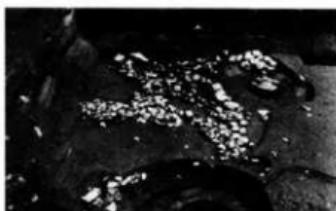


Fig.180 SX276礫群出土状況（南西から）

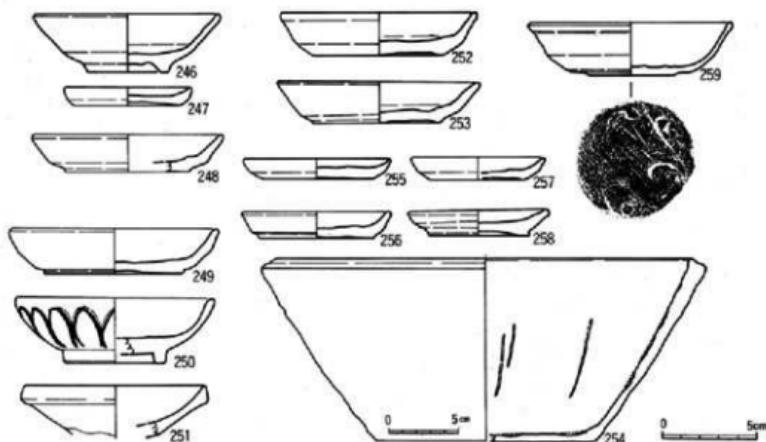
Fig.181 SX276出土
遺物 (1/5)Fig.182 SX276出土
遺物 (1/5)

Fig.183 出土遺物実測図 (1/3・1/4)SX276

Fig.184 SX286(287・288)遺物出土状況
(南東から)

Fig.185 SX286出土遺物(1/5)

\$X267 (Fig. 176・177) 調査区中央に位置する。堅穴の平面形は隅丸の長方形で、長軸が1.7m、短軸が1.35m、深さ0.48mを測る。礫石が大量に埋没していた。石組壁体の石はほとんど抜かれており、形状は不明である。底面には木片が残っている。

出土遺物 土師器、瓦質土器片、銅錢（不明6点）が出土。238～243は土師器である。238・239は皿で、口径・器高は238が6cm・1.4cm、239が7.1cm・1.4cm。239の底部には板目が残る。240～242は壺で、口径・器高は1.0.6～11.2cm・1.8～2.4cm。焼成は軟質で軽い。242の底部には板目が残る。

SX269 (Fig. 76) 調査区中央に位置する。平面形は端正な方形で、一辺0.78～0.82m、深さ0.30mを測る。土師器片や釘、獸骨が出土している。

SD274 (Fig. 148) 調査区中央に位置している。SA01・SA02とはほぼ同じ方向をとる。幅30cm、深さ25cm。土師器皿244が出土している。244の口径・器高は7.1cm・1.6cm。焼成不良で軟質である。

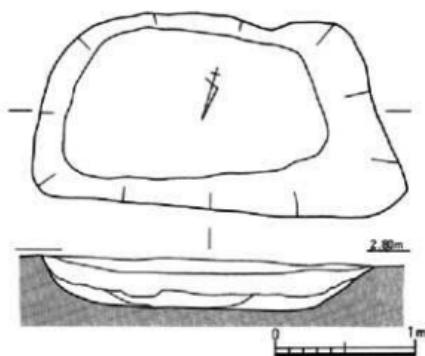


Fig.186 SX286(287・288)平面及び断面図(1/40)

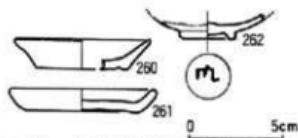


Fig.187 出土遺物実測図(1/3)(SX286)

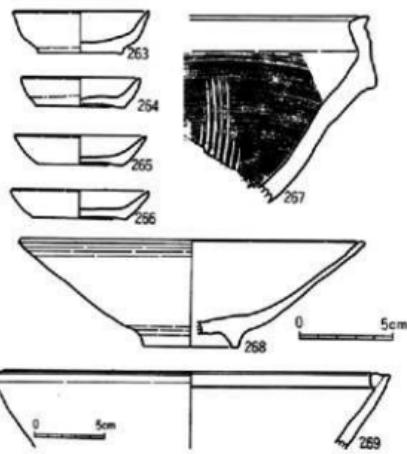


Fig.188 出土遺物実測図(1/3・1/4)(SX286)

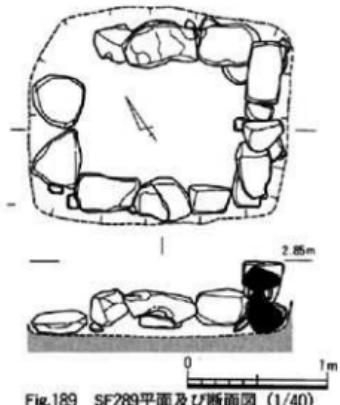


Fig.189 SF289平面及び断面図 (1/40)



Fig.190 SF289発掘状況 (南西から)

SX276 (Fig. 148・180・183) 調査区北壁中央に位置する。2基～3基の石組造構の基礎部分である。浅い凹に大量の礫石が分布していたが、石組の状況はうかがえないくらい破壊されている。切り合ひ関係も不明である。

出土遺物 土師器、龍泉窯系青磁、李朝陶器、瓦質摺鉢、石鍋などが出土している。246は李朝灰緑釉碗である。口径10cm、器高3.2cm、高台径4.3cm。250は青磁皿である。口径10.8cm。蓮弁文はヘラ片彫りによる。251は玉縁口縁の皿である。口径9.8cm。247・255～258は土師器皿である。口径・器高は6.8～8cm、1.1～1.6cm。249・252・253は土師器壊である。口径・器

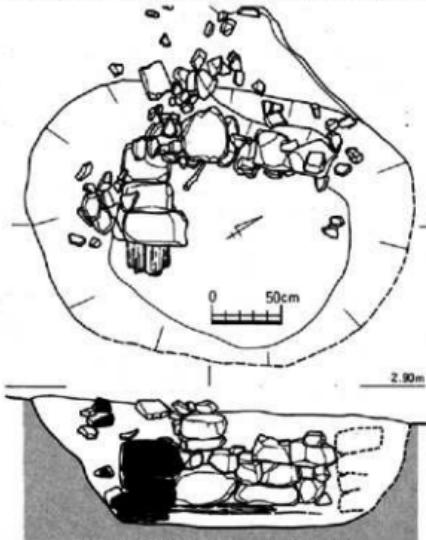


Fig.191 SF298平面及び断面図 (1/40)

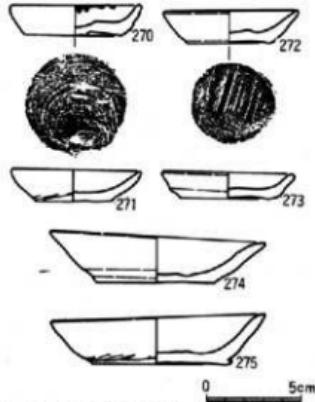


Fig.192 出土遺物実測図 (1/3) (SF298)

高は10.2~10.8cm・2~2.8cm。259は瓦器の坏で口径11cm、器高2.8cm。口縁部はわずかに肥厚する。254は瓦質摺鉢で口径25.6cmを測る。

SX279 (Fig. 178) 調査区中央北壁側に位置する。平面形が円形の廃棄用土壌である。直径1.5m、深さ0.36m。

SX283 (Fig. 178) 平面形が円形の土壌であるが、SX283はこの下部の第5面SE352の井筒上部にあたる。直径が1.36m、深さ0.57m。小砾石や木炭片が多く含んでいる。

SX286 (Fig. 184~188) 調査区中央に位置する、平面形が隅丸長方形の廃棄用土壌である。長軸2.83m、短軸1.48m、深さ0.37mを測る。埋土には木炭が多量に含まれ、中位においては約5cmの厚さでレンズ状に堆積していた。

出土遺物 土師器、瓦質摺鉢、備前摺鉢、白磁碗、皿、鹿角、魚骨などが出土している。260・261、263~266は土師器皿である。口径・器高は6.5~8cm、1.2~2.3cm。263・264の底部には板目が残る。262は白磁皿である。高台外底見込みに墨

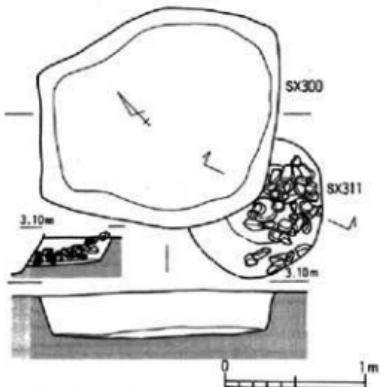


Fig.195 SX300・311平面及U断面図 (1/40)

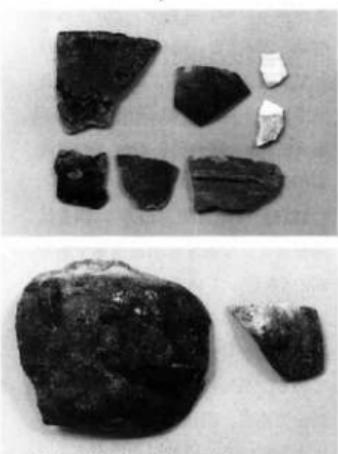


Fig.193 SF298出土遺物 (1/5)



Fig.194 SX311遺物出土状況 (南西から)

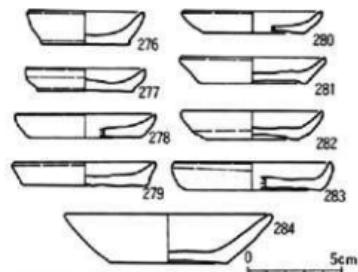


Fig.196 出土遺物実測図 (1/3) (SX300)

第三章 発掘調査の記録

書がみられる。花押か。267は備前摺鉢。268は青白磁碗で、精良な作りである。ヘラケズリ成形でかなり薄手に仕上げている。口径18.6cm、器高5.7cm、高台径5.2cm。269は瓦質摺鉢。

SF289 (Fig. 189・190) 調査区南壁寄りに位置する石組造構である。SD214を切っている。一辺約2mの竪穴を掘り、約30cm前後の扁平な礫石を据え、目路をそろえて積み上げている。石組の内面の法量は一辺1.15mである。薬灰、木炭などが多く出土している。廐の可能性がある。

出土遺物 土師器片、瓦質土器片、獸骨片が出土している。

SF298 (Fig. 191~193) 調査区中央に位置する。SD214の下部に検出された。北壁と西壁は残りが良好である。3段~4段まで石積みが残っている。掘方は梢円形で、長軸が2.78m、短軸が約2.2m、深さ0.87mを測る。基底面には厚さ4cm前後の板材を敷いている。

出土遺物 土師器、瓦質土器、白磁皿、銅錢（不明）などが出土している。270~273は土師器皿である。口径・器高は7.0cm・1.2~1.8cm。273以外は底部に板目が残る。274・275は壊である。口径・器高は11.3cm・2.2~2.8cm。体部が直線的で、やや器高が高い感がある。Fig. 193は土師質土鍋、瓦質茶釜である。

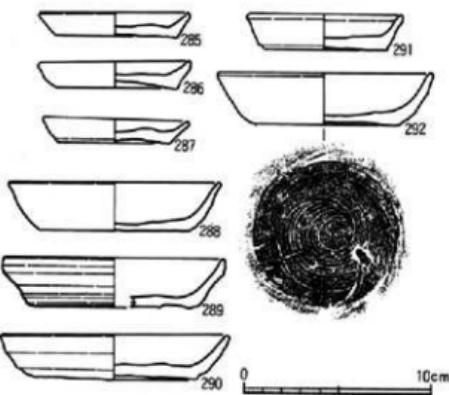


Fig. 197 出土遺物実測図 (1/3) (SX311)

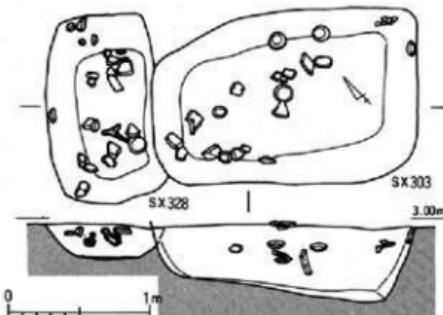


Fig. 198 SX228・303平面及び断面図 (1/40)



Fig. 199 SX303出土遺物 (1/5)

SX300(Fig. 195・196)

調査区東側に位置する。

不整な矩形で、長軸が1.7m、短軸が1.6m、深さ0.35mを測る。砾石、木炭、焼土を含んでいる。

出土遺物 土器器皿
壊が出土している。二次的な混入品である。276～283は土器器皿である。
器形にバラツキがある。
口径・器高は6.2～8.2cm・1.2～1.7cm。283以外は焼成・胎土とも不良。
276・278の底部には板目が残る。284は壊である。
器形は直線的で、器高がやや高い感がある。口径11.1cm、器高2.6cm。焼成は比較的良好。

SP302出土遺物 (Fig. 2

01) 293・294は土器器皿である。口径・器高は7.4～7.8cm・1.1～1.4cm。焼成良好。色調は褐白色。

SX303(Fig. 198・199・201) 調査区南東部に位置する。SD214、SX328を切っている。平面形は端正な長方形で、長軸が1.91m、短軸が1.28m、深さ0.57mを測る。砂砾を多く含む暗灰色粘質土

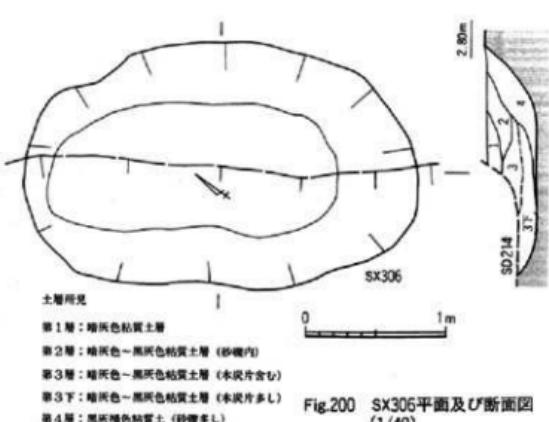


Fig.200 SX306平面及び断面図
(1/40)

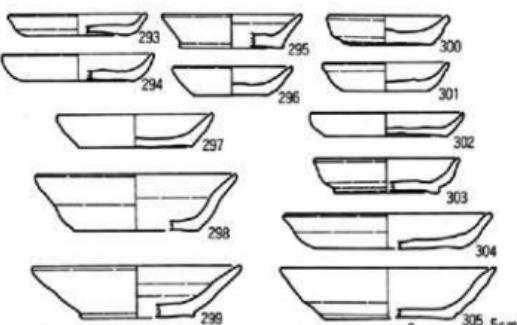


Fig.201 出土遺物実測図 (1/3) (SP302, SX303-306)



Fig.202 第4面SX306周辺作業風景 (北から)

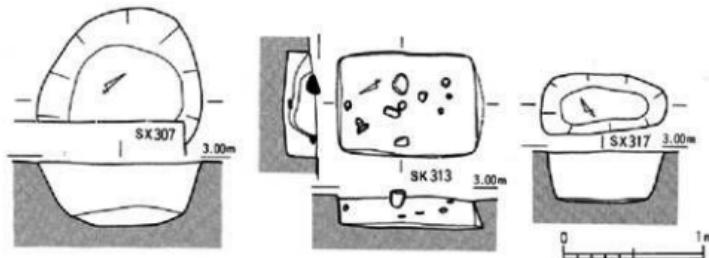


Fig.203 SX307, SK313, SX317平面及び断面図 (1/40)



Fig.204 SX307, SK313, SX317周辺遺構分布(南東から)

である。廃棄用土壙か。

出土遺物 土師器、瓦器、滑石製石鍋、龍泉窯系青磁、釘、獸骨が出土している。295~299は土師器である。295~297は皿で、口径・器高は6.4~8.4cm・1.4~1.8cm。297の底部には板目が残る。298~299は壺で、いずれも体部内面中位で弱く屈曲している。口径・器高は10.8~11.2cm・3.0~3.2cm。胎土・焼成とも良好。色調はおむね褐色。

SX306 (Fig.200・201) SD214の下部で検出された。平面形は梢円形の廃棄用土壙である。長軸が2.85m、短軸が1.83m、深さ0.37mを測る。埋土は砂礫を非常に多く含む暗灰褐色粘質土が主である。

出土遺物 一括投棄された土師器が多く出土した。300~303は土師器皿である。器形はバラツキがある。口径・器高は6.5~8.2cm・1.3~1.5cm。300の底部には板目が残る。いずれも焼成良好。304~305は壺である。口径・器高は304が11.2cm・2.0cm、305が11.6・2.8cm。305の体部がやや肥厚する特徴的な器形である。

SX307 (Fig.203・204) 平面形は円形の土壙である。直径は1.1m、深さ0.48mを測る。赤褐色焼土を多く含む廃棄用土壙である。土師器片、滑石製石鍋、釘が出土している。

SX311 (Fig.194・195・197) SX300に切られている。円形の土壙である。直径は1.1m、深さ0.30mを測る。砂礫とともに土師器皿・壺が投棄された状態で多く出土している。

出土遺物 285~287・291は土師器皿である。口径・器高は7.8~8.5cm・1.2~1.9cm。291の底部には板目が残る。いずれも焼成良好。288~290・292は壺である。口径・器高は11.4~12.

3cm・2.6~2.8cm。288・291の底部には板目が残る。いずれも焼成良好。289の体部には水挽き痕が明確に残っている。

SK313 (Fig. 203~205) 調査区東側に位置する。平面形は端正な長方形で、側壁はほぼ直立している。埋土は暗褐色~褐色砂質土で、中央部はレンズ状に堆積している。長軸1.0m、短軸が0.8m、深さ0.25mを測る。木棺墓の可能性がある。

出土遺物 土師器皿、釘、銅錢（不明）が出土している。306・307は土師器皿である。口径・器高はほぼ等しく6.2cm・1.2cmを測る。

SX317 (Fig. 203・204) 調査区東側に位置する。平面形は隅丸のやや不整な長方形である。柱穴の可能性がある。長軸0.9m、短軸が0.45m、深さ0.37mを測る。土師器片、釘などが出土している。

SE323 (Fig. 148・205・206) 調査区南東隅で確認した。調査区壁の崩落等の危険性があったために、未掘である。井戸掘方の埋土は暗灰色砂質土。掘方はSE120の掘方304同様平面形が隅丸の方形をなすようである。

出土遺物 土師器や瓦質土器、滑石製石鏡、釘、朝鮮製陶器、中国製白磁・青磁が出土しているが、いずれも二次混入品である。308は土師器皿である。口径7.6cm、器高1.8cm。底部には板目が残る。309は瓦質火鉢である。非常

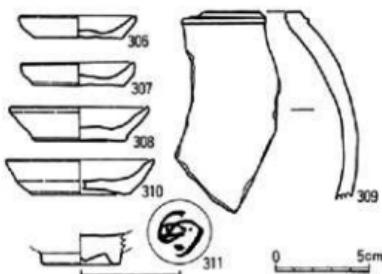


Fig.205 出土遺物実測図 (1/3) (SK313・SE323・325)



Fig.206 SE323出土遺物 (1/5)



Fig.207 SX326発掘状況（南東から）



Fig.208 SX326出土遺物（1/5）

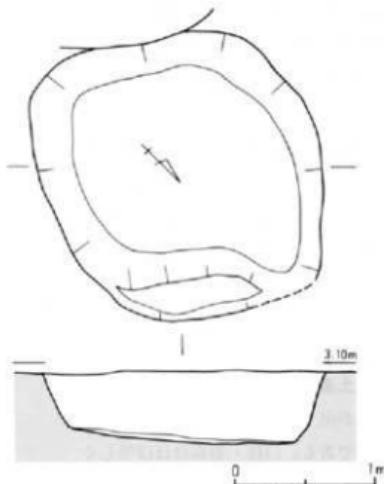


Fig.209 SX326平面及び断面図（1/40）

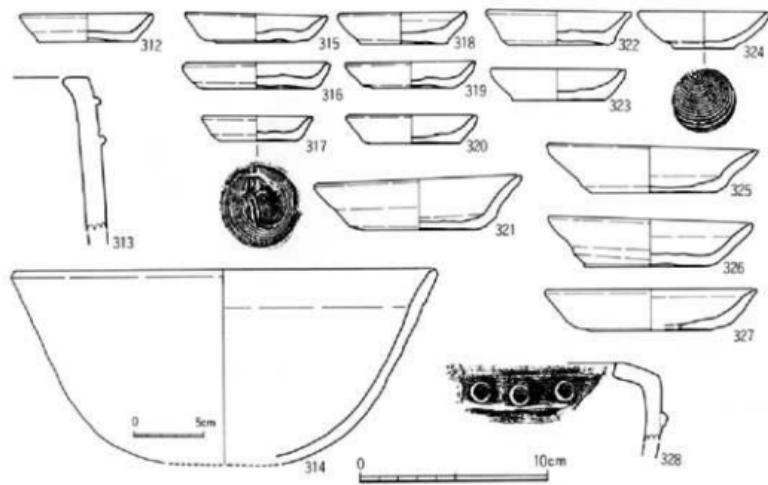


Fig.210 出土遺物実測図（1/3・1/4）(SX326)

Fig.211 SD214内柱根出土状況
(南東から)

Fig.212 第4区北側作業風景（南から）

に丁寧なヘラミガキによって器面がなめらかになっている。Fig.206下は李朝陶器碗である。

T325出土物 (Fig.205) 310は土師器皿である。口径8.0cm、器高1.8cm。311は同安窯系青磁碗である。高台見込み内に墨書きを残す。花押か。

SX328 (Fig.148・205・206) 平面形は端正な長方形で、長軸が0.9m、短軸が0.83m、深さ0.28mを測る。廃棄用土壤か。上面に砂礫層がみられた。

SX326 (Fig.209~210) 調査区東南部に位置している。SD214を切っている。平面形はやや不整な隅丸の方形である。一边は2.0m、深さ0.58mを測る。多量の砂礫を含んでいる。上面には特に小礫がまとまっている箇所が南壁側にあったが、これは柱穴と思われる。切り合い関係については不明確である。

出土物 土師器、瓦質土器、土師質土器、釘、銅錢(不明)、獸骨など比較的多くの遺物が出土したが、ほとんどは二次的な混入品である。本来はSD214に含まれていたものであろう。312・315~320・322~324は土師器皿である。口径・器高は16.6~8.0cm・1.3~2.6cmである。317・318・320には板目が残る。321・325~327は壺である。口径・器高は11.0~11.3cm・2.3~2.8cmである。321・325は、体部がやや強く外反する特徴がある。313・328は、瓦質の火鉢である。314は土師質の土鍋である。口

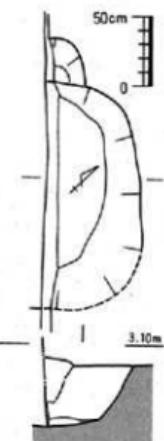
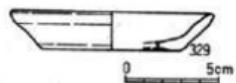
Fig.213 SX330平面及び断面図
(1/40)Fig.214 出土遺物実測図 (1/3)
(SX330)



Fig.215 SX415出土遺物 (1/5)

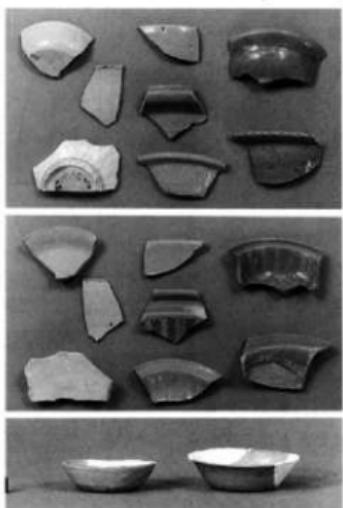


Fig.216 SX416出土遺物 (1/5)

径・器高は30.6cm・14.0cmである。口縁部がわずかに外反し、弱い稜線が内面にめぐる。

SX330 (Fig.213・214) 調査区南壁にかかっている。平面形が円形の廃棄用土壌である。現存長は1.2m、深さ0.5mを測る。

SX415 (包含層) 出土遺物 第4面の遺構検出作業時に出土した遺物である。土師器を初めとして瓦質土器、瓦器、備前、瀬戸、朝鮮李朝陶磁器、中国明代染付、南宋～元代の青磁、白磁、青白磁などが出土している。

Fig.215は李朝陶器白釉碗、灰綠釉碗の破片である。高台および内面見込みに砂目跡が残る。釉は全面に施釉している。

SX416 (包含層) 出土遺物 第4面から5面に掘り下げる際に出土した遺物である。中国の南宋～元代の青磁、白磁、青白磁などの出土量が多くなっている。朝鮮系の陶磁器の出土は少ない。

Fig.216は中国産の白磁、青磁である。13～15世紀の所産である。出土遺物の全体量からみると龍泉窯系の青磁が多くなっている。

5、第5面の調査

概要 第5面は第4面を50~80cm掘り下げた面にあたり、標高0.9~1.9mを測る遺構検出面である。現地表面からは-5.0mほどを測る。第4面では東西端部の比高差が約40cm程で、ほぼ水平であったが、この面では約1mほどで、やや強い傾斜となった。

検出面の設定にあたっては、遺構と遺物の出土状況をみながら任意に設定した。検出面の土層は、道路もしくは築地界の基礎地業SG354が検出された中央から東側が赤褐色焼土を多く含む暗褐色砂質土で、西側が主として暗灰色~黒灰色砂質土であり、明褐色砂層、真砂土層が部分的にみられた。特に西側では、湿地もしくは干潟の状況を思わせる砂層と粘土層の薄い互層が認められた。検出面の層位的な位置を北壁の土層断面でみると、第90~93層の下面あたりのレベルに相当する。



Fig.217 調査区北壁西側側土層断面 (南西から)

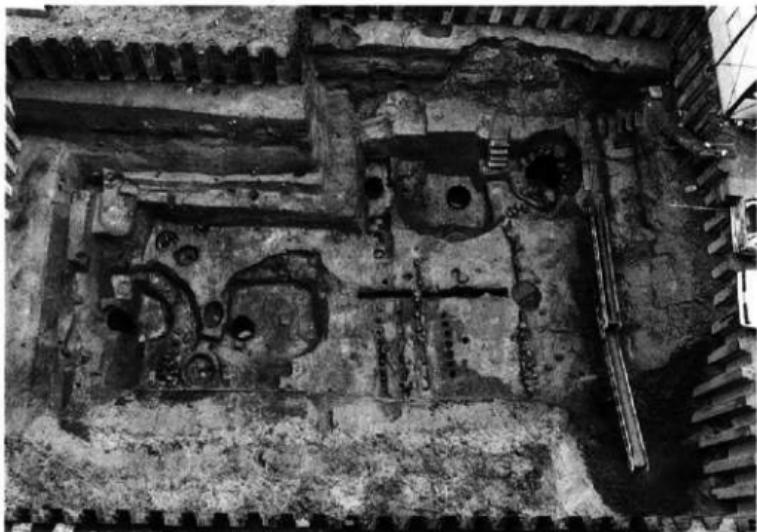


Fig.218 第5面完堀状況 (南西から)

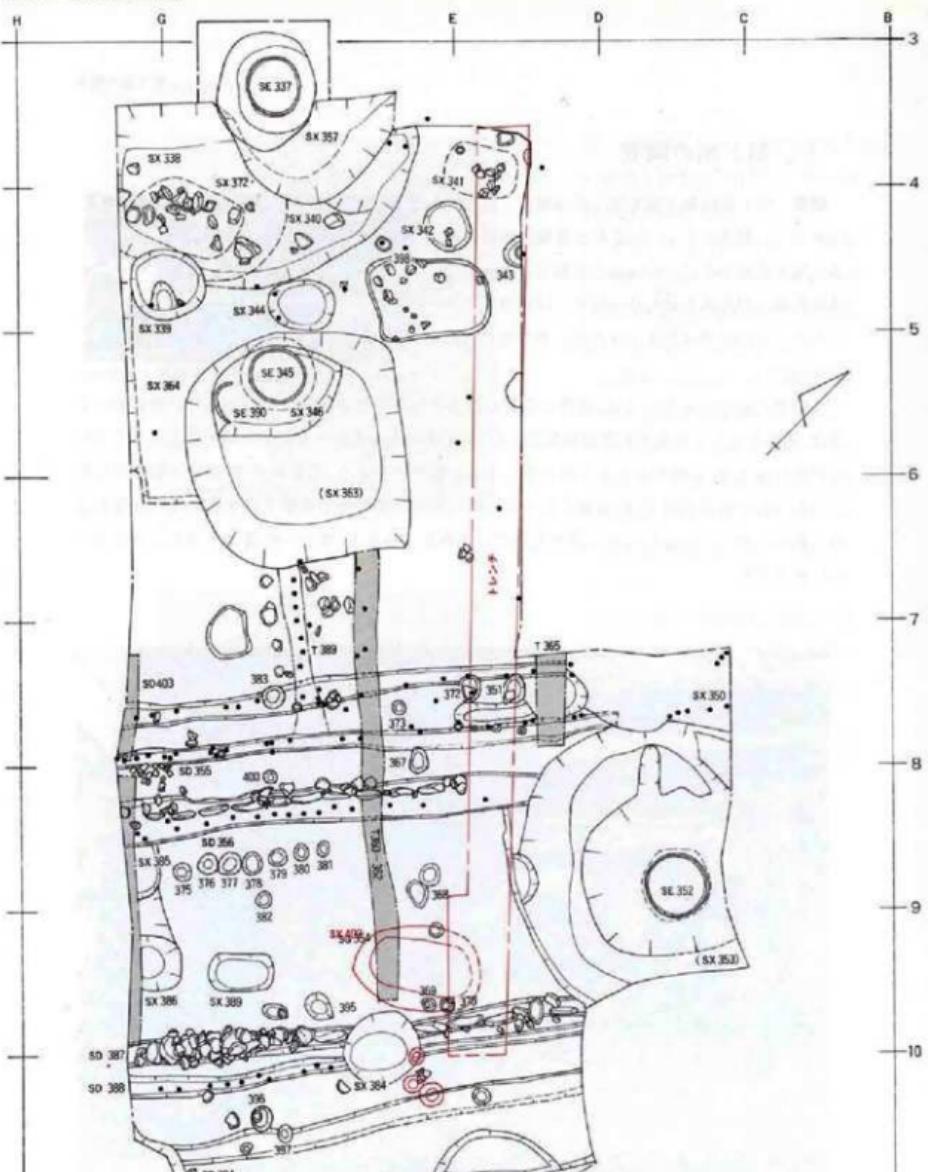


Fig.219 第5面・6面遺構分布全体図 (1/80)

遺構は、溝6条、井戸4基、土壙19基、柱穴23が、調査区全面にわたって検出された。遺構の数は少なく、また、ほとんどの遺構はSG354より後出のものである。

出土遺物は、土師器、瓦器、瓦質土器、国内産陶器などのほかに輸入陶磁器が比較的多く出土しているが、中国産の青磁が全体の出土量に対して大きな比率を占めている。朝鮮系の陶磁器はほとんど出土していない。

第5面の年代観はおおむね中世半ばから後期である。

SE337 (Fig. 220~224) 西側調査壁にかかっている。第4面において、すでに井筒の上端が確認されていたが、掘り下げ作業の安全性を考慮し第5面で発掘した。

SE337は木桶を井筒とする井戸である。井戸の掘方は不整な円形で、直径4.2mを測る。井筒には、直径が0.67~0.73m、高さ0.51~0.64mを測る木桶を用いている。井筒は木桶5段分が遺存しており、深さは2.52mを測る。井戸の本来の掘削面は第4面を前後するレベルで、3mほどの深さであったと想定できる。

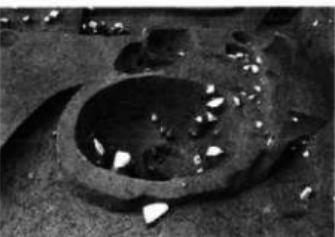


Fig.220 第4面SE337上部掘り下げ状況
(北東から)



Fig.221 SE337井筒検出状況(東から)



Fig.222 SE337出土遺物(1/6)



出土遺物 土師器、土師質土器、瓦器のほかに青磁、白磁、褐釉陶器などの中国産陶磁器が出土している。いずれも二次的な混入品である。330・331・337は白磁碗である。高台見込みに墨書きが残る。331の例は花押と思われる。330は「や口」、337は「五」または「王」か。332～336は土師器皿である。口径・器高は7.2～8.3cm・0.9～1.3cmを測る。335と336の底部には板目が残る。いずれも胎土・焼成とも良好である。色調はおおむね明褐色～明褐色である。

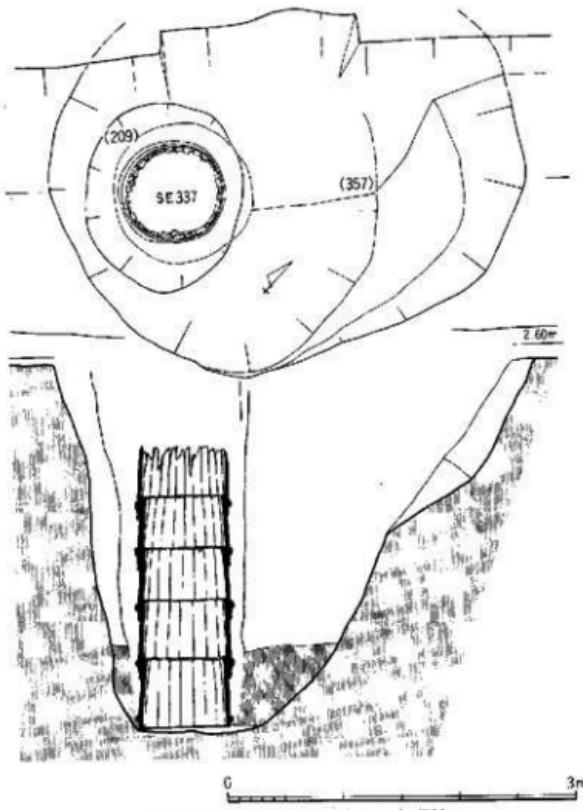


Fig.223 SE337平面及び断面図 (1/50)

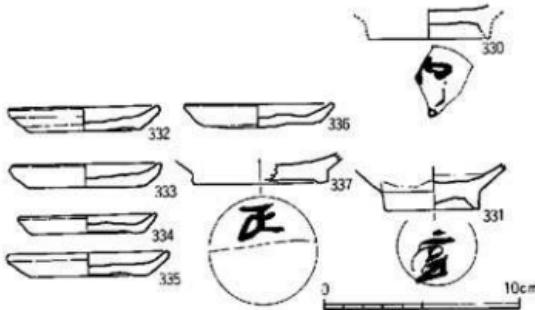
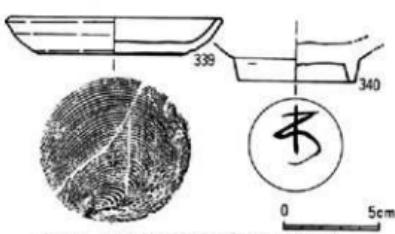
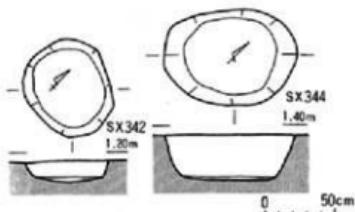
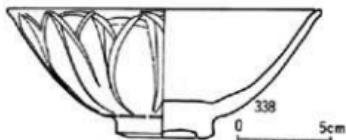
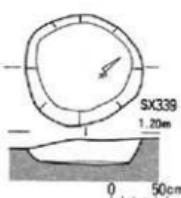


Fig.224 出土遺物実測図 (1/3) (SE337)

**SX339 (Fig. 225~228)**

調査区南西部に位置する。平面形が円形の廃棄用土壠である。直径は1.03m、深さ0.3mを測る。

出土遺物 土師器(皿・杯)

片、東播磨系の捏鉢、龍泉窯系青磁(碗・皿)が出土している。338は龍泉窯系青磁碗である。口径は16.7cm、器高は6.9cm、高台径は5.2cmである。釉調は透明な青緑色で発色良好である。

SX340 (Fig. 231~233)

第4面でSX305とした暗灰色～黒灰色粘質土で、遺物包含層である。SE337から切られている。

出土遺物 土師器、瓦器、

黒釉天目、青磁、白磁、木製構などが出土地している。341・342は土師器壊である。口径・器高は341が12.2cm・2.5cm、342は15.6cm・2.4cmを測る。341の底部には板目が残る。343は同安窯系の青磁碗である。高台見込みに墨書が残る。「境」か。344は白磁碗である。高台外面に墨書が残る。「ぬ」と読める。345は白磁皿である。いずれも花押と思われる墨書が残る。

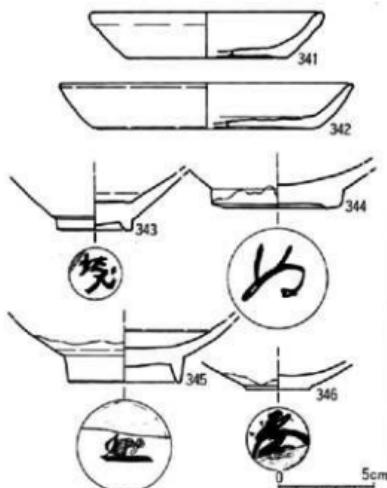


Fig.231 出土遺物実測図 (1/3) (SX340)

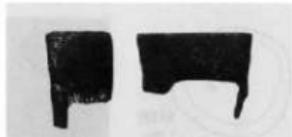


Fig.232 SX340出土遺物 (1/3)



Fig.233 SX340出土遺物 (1/5)



Fig.234 SE345・390井筒出土状況 (東から)

SX341 (Fig. 219・230) 調査区北西部に位置する。平面形は隅丸の長方形である。掘方は遺存状況が悪い。長軸は1.0m、短軸は0.7m、深さ0.20mを測る。掘り挙よりやや大きい砾石が床面に据えられた状況で出土している。墓壙の可能性がある。

出土遺物 339は土師器壊である。口径は1.6cm、器高は2.0cmを測る。口縁部は丸く肥厚する。340は白磁碗である。高台見込みに墨書きが残る。「わ」か。

SX342 (Fig. 229) SX341の南東部に位置する。平面形は梢円形である。柱穴の可能性がある。長軸は0.72m、短軸は0.6m、深さ0.2mを測る。

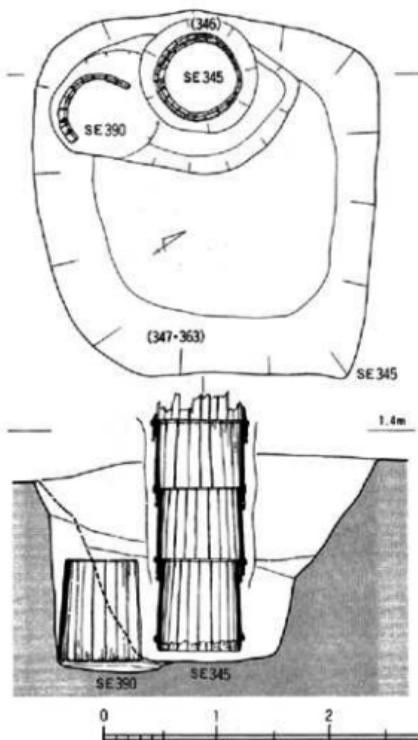


Fig.235 SE345・390平面及び断面図 (1/50)

SX344 (Fig. 229) 調査区西側に位置する。平面形は橢円形である。廃棄用土壤である。長軸が0.95m、短軸が0.65m、深さ0.32mを測る。廃棄用土壤か。木片や獸骨が出土している。

SE345 (Fig. 234～236・238・239) 調査区中央からやや西側に位置する。木桶を井筒とする井戸である。井戸の掘方は隅丸の方形で、一辺3.2～3.5mを測る。井筒を据える部分をさらに一段掘り窪めている。井筒には、直径が0.65～0.73m、高さ0.77～0.85mを測る木桶を用いている。井筒は木桶4段分が遺存しており、深さは2.42mを測る。井戸の本来の掘削面は第4面を前後するレベルで、3mほどの深さであったと推定できる。

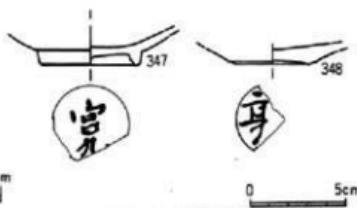
Fig.236 出土遺物実測図 (1/3)
(SX346)

Fig.237 SE390出土遺物 (1/3・1/6)

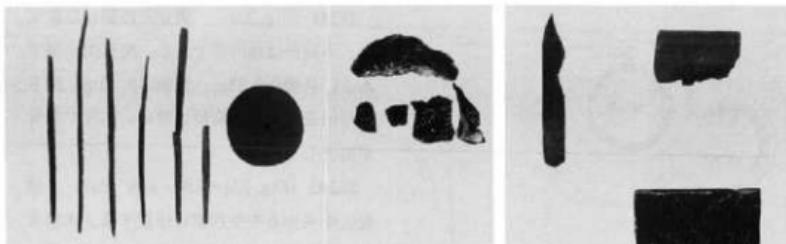


Fig.238 SX346出土遺物 (1/5)

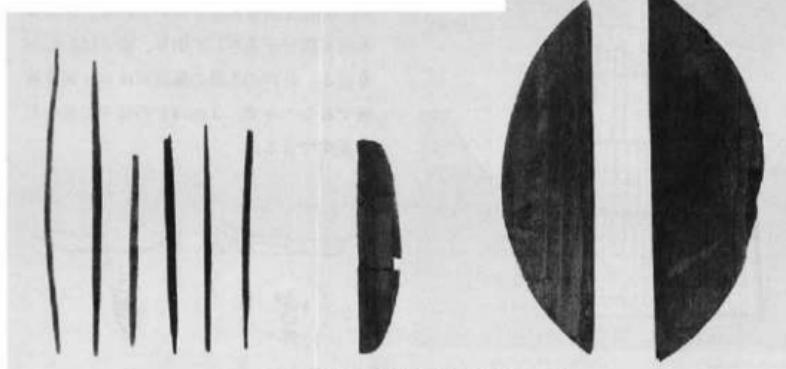


Fig.239 SE345(SX363)出土遺物 (1/4・1/5)

出土遺物 井筒内からは少ない。土師器片、石鍋などが出土している。掘方SX363からの出土量が多い。土師器片、土錐、石鍋片、釘、銅錢、輸入陶磁器木製品が出土している。いずれも二次的な混入品である。347は白磁碗で、高台見込みに「宮丸」または「宮九」と読める墨書が残る。348は同安窯系の青磁皿である。底部に墨書が残る。「高」か。Fig.238は箸と紡錘車、漆塗り碗片である。Fig.239は形代、櫛、箸と下駄、桶底である。

SE390 (Fig. 234・235・237) SE345から半分ほどが壊されている。木桶を井筒とする井戸である。井戸の掘方は不明。井筒を据える部分は一段低くなっている。井筒は、直径が0.65～0.70m、高さ0.94mを測る木桶を用いている。井筒は木桶1段分が遺存するのみである。深さは1.2mを測る。井戸の本来の掘削面は第4面を前後するレベルで、SE345と同様に3mほどの深さであったと推定できる。



Fig.240 SG354西側溝土層断面（南壁・北東から）



Fig.241 SG354西側溝 (SD355・356・403)
堀り下げ状況 (東から)



Fig.242 SG354上面作業風景 (北から)

出土遺物 土師器、国内産陶器、砥石が出土している。Fig.237は常滑大甕と鉄軸窓の口縁部片、木製の箒である。

SB354 (Fig. 240~250) 調査区中央に位置する。南北に走る道路または築地塀などのなんらかの構造物の基礎地盤と考えられる遺構である。南北に長さ5.3m、幅2.8mの規模で検出された。北端と南端の中央を結んだ主軸線の方向は磁北から東へ約39°偏っている。この方向は、第4面の柵列SA 01・02とはほぼ等しく、また掘立柱建物SB01とは直交するものである。太閤町割りをよく留めているといわれる現在の町筋とは約6°～7°ほど西に偏っている。

SG354は、第3面において、調査区東側から中央部周辺で真砂土（花崗岩風化土）と思われる明黄褐色～明灰褐色粗砂がかなり硬く締まっていた箇所に相当する。また第4面では調査区の中央部から東側にかけて分布する明褐色砂質土の広がりと、SG354の位置がほぼ等しい範囲に相当しており、断面観察では5～10cmの厚さで版築状に堆積していることが確認された。これらのことから、SG354は第5面から第3面下まで連続していたことがわかる。ただし後世の遺構で寸断されており遺存状況ははなはだ悪い。SE352、SX384、SX389などから切られている。



Fig.243 SG354(赤褐色土層)出土遺物
(1/5)

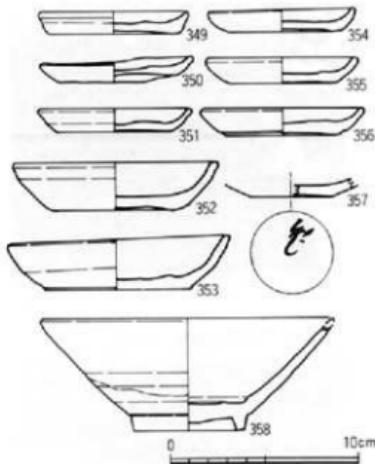


Fig.244 出土遺物実測図 (1/3) (SG354)



Fig.245 SD355出土遺物 (1/5)



Fig.246 SX359出土遺物 (1/5)

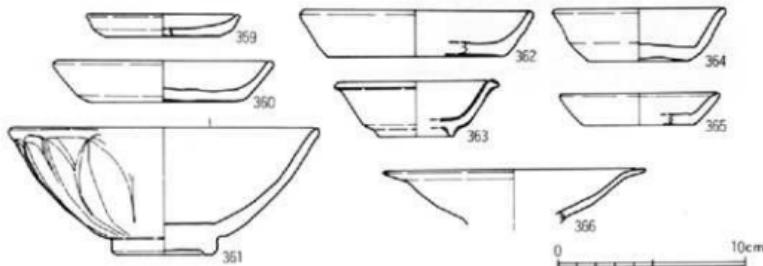


Fig.247 出土遺物実測図 (1/3) (SD355-SX359)

SG354の基底部は黒褐色～黒灰色砂質土である。その上に赤褐色焼土を盛土し、路肩もしくは地業盛土の土留め石が東西両サイドに敷設されている。土留め用の石は扁平な幅30～40cmの礫石を垂直に立てて据え置き、西側ではその内側に20～50



Fig.248 SG354基底部検出状況（東北東から）

cmおきに杭を打っている。盛土はこの礫石間においてなされたもので、かなり硬く叩き締められている。Fig.240、Fig.250の土層堆積の観察では、両サイドの土留め石を覆って新たな盛土がなされ、側溝が付けられている。SD355・388・394・403はいずれもSG354の側溝と考えられるものである。ただし溝の同時性が不明確であるために、SG354の幅の変化については判然としない。



Fig.249 SG354基底部先振状況（東北東から）

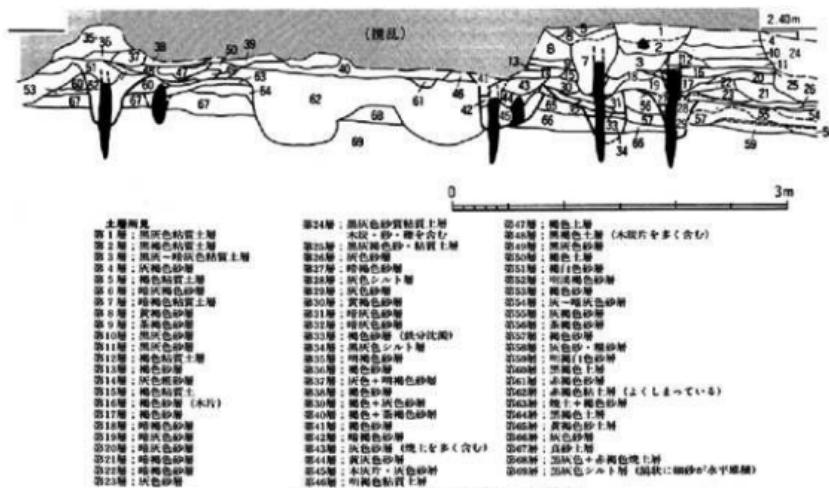


Fig.250 SG354横断土層断面図 (1/50)



Fig.251 SE352井筒検出状況 (南西から)

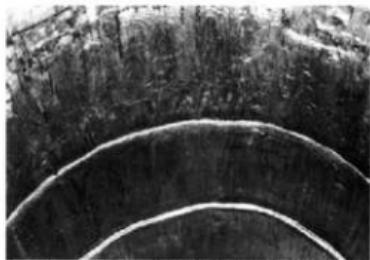


Fig.252 SE352井筒板材小口加工状況 (南西から)

出土遺物 SG354の基底部である赤褐色焼土中からは多くの遺物が出土しているがいずれも二次的な混入品である。土師器片、石鍋片、釘、銅錢（皇宋通宝、政和通宝）、鉄滓、輸入陶磁器が出土している。349～351、354～356は土師器皿である。口径・器高は8.0～8.8cm・1.1～2.2cm。352と353は壺である。口径・器高は352が11.0cm・2.5cm、353が壺12.0

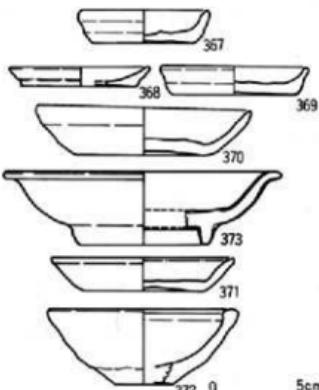


Fig.253 出土遺物実測図 (1/3) (SP351, SE352)

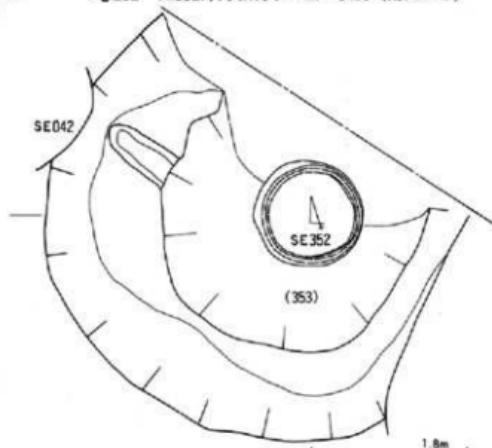


Fig.254 SE352平面及び断面図 (1/50)

cm・2.2cmである。いずれも胎土・焼成とも良好である。357は白磁皿である。底部には花押と思われる墨書きが残る。358は白磁碗である。口径は15.6cm。内底見込みの釉は輪状に掻き取っている。これらのほかに東播磨系捏鉢、口禿の白磁皿や黒釉天目碗、青白磁合子なども出土している。

SP351出土遺物 (Fig. 253) 367は土器器皿である。口径7.0cm、器高1.8cm。焼成良好。

SE352 (Fig. 251-254) 調査区北壁にかかっている。SG354を切り、SE120から切られている。井筒に木桶を用いた井戸である。井戸の掘方は円形で、直径4.2~4.5mを測る。掘方は二



Fig. 255 SX384完掘状況（南から）

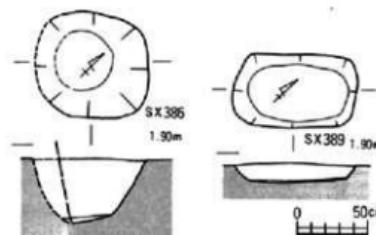
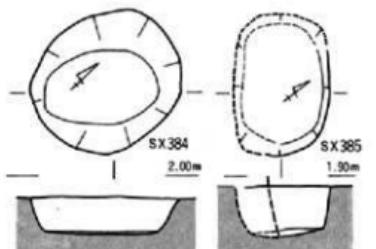


Fig. 256 SX384～386・389平面及び断面図 (1/40)

段掘りで、井筒を据える部分をさらに一段掘り窪めている。井筒には、直径が0.75m、高さが0.5mを測る木桶を用いている。ただし最下部の井筒には高さ0.76mのものが使われている。井筒は木桶4段分が遺存しており、深さは2.22mを測る。井戸の本来の掘前面は第4面を前後するレベルで、3mほどの深さがあったと推定できる。

出土遺物 土器、石鍋、釘、硯、青磁、白磁、獸骨片が出土している。368・369は土器器皿である。口径・器高は7.6~8.0cm・1.0~1.5cm。370は壊である。口径11.5cm、器高2.5cm。焼成良好。371は口禿の白磁皿である。口径9.8cm、器高1.8cm。底部は釉を掻き取っている。372・373は龍泉窯系青磁鉢・皿である。口径・器高は、372が10.0cm・4.0cm。373が14.9cm・3.9cm。

SD355・388・394・403 (Fig. 240~250) SG354の東西に平行する溝である。これらはSG354を拡幅した際、もしくは築地の改築に伴い設けられた側溝と考えられる。いずれも土留め用の矢板を打っていたと思われ、杭と矢板が部分的に残っている箇所がある。幅は30~40cm、深さ20~25cmを測る。埋土は暗褐色~黒褐色粘質土である。

SD355出土遺物 359は土師器皿である。口径8.3cm、器高1.2cm。焼成良好。360は坏である。口径11.8cm、器高2.2cm。いずれも底部には板目が残る。361は龍泉窯系青磁碗である。口径16.6cm、器高6.7cm、高台径5.6cm。

SD388出土遺物 383～386は土師器皿である。口径・器高は7.0～9.9cm・1.3～2.1cm。386の底部には板目が残る。387は青白磁合子である。口径・器高は16cm・2.2cm。

SX359出土遺物 (Fig.247・250) SX359はSG354を覆う明褐色砂層である。362は土師器坏で口径12.4cm、器高2.4cm。底部には板目が残る。363は龍泉窯系青磁皿で、口径8.8cm、器高3.0cm。器面全体に厚く青緑色釉がかかる。364・365は口禿の白磁皿である。364の体部下半から底部は露胎である。366は青磁皿である。口径14.3cm。施釉は刷毛による。朝鮮系か。

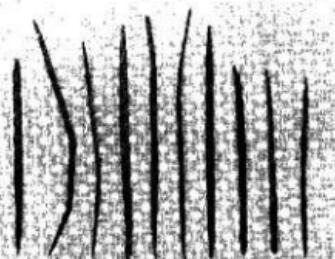


Fig.257 SX364出土遺物 (1/5)

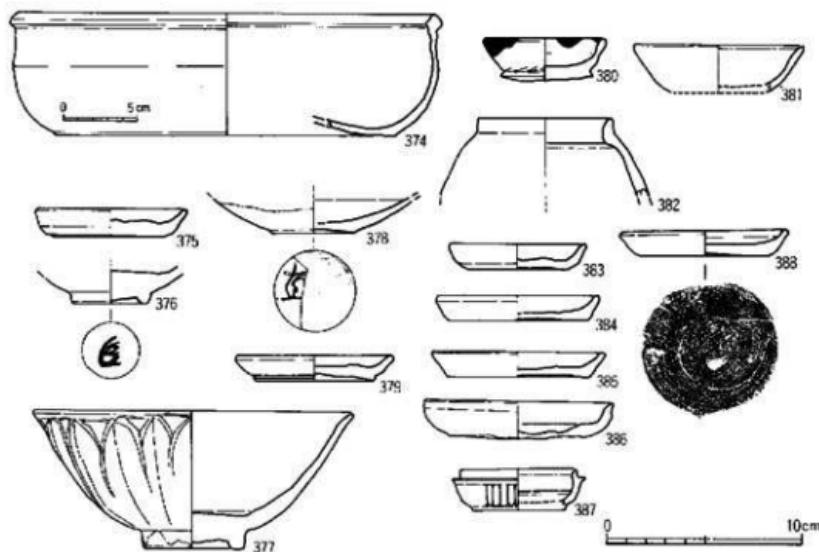
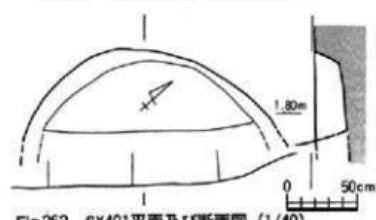


Fig.258 出土遺物実測図 (1/3・1/4)
(T361-365, SX364-384-388-389, SP367)



T361出土遺物 (Fig.258) T361はSG354を横断するトレンチである。374は褐釉陶器盤である。口径・器高は25.4cm・8.5cm。

SX364出土遺物 (Fig.258) SE345に切られる包含層である。375は土師器皿である。口径・器高は7.9cm・1.4cm。底部には板目が残る。376・377は龍泉窯系青磁碗である。376の高台見込みには花押と思われる墨書きが残る。

T365出土遺物 (Fig.258) T365はSG354北側を横断するトレンチである。378は白磁皿で底部には花押と思われる墨書きが残っている。

SP367出土遺物 (Fig.258) 379は土師器皿である。口径・器高は8.2cm・1.3cm。焼成良好。

SX384 (Fig.255・256・258) 調査区東側に位置する。平面形は円形の廃棄用土壙である。黒褐色砂質土を埋土とする。直径は1.02m、深さ0.30mを測る。

出土遺物 土師器、釘、白磁、獸骨が出土している。380は土師器皿である。口径・器高は6.3cm・2.3cm。口縁部にはススが付着している。381は口禿の白磁である。口径・器高は8.8cm・2.6cm。382は鉄釉陶器瓶である。口径7.0cm。

SX385 (Fig.256) 調査区南壁にかかっている。SG354を切っている。平面形が梢円形の廃棄用土壙である。長軸約1.0mを測る。埋土は焼土を大量に含む。



SX386 (Fig. 256) 調査区南壁にかかっている。SG354を切っている。平面形は隅丸の方形である。一辺は0.8m。埋土は焼土を大量に含む。

SX389 (Fig. 256・258) 調査区南東に位置する。SG354を切っている。平面形は隅丸の長方形である。長軸0.9m、短軸0.56m、深さ0.20m。

出土遺物 388は土師器皿である。口径・器高は8.8cm・1.4cm。底部には板目が残る。焼成良好。

SX393 (Fig. 259・260) 調査区西側に位置する。平面形は不整な隅丸長方形である。長軸1.6m、短軸1.2m、深さ0.22m。廃棄用土壤か。

SX405出土遺物 (Fig. 264・265) SX405は第5面遺構検出時に出土した遺物群である。389は土師器皿である。口径・器高は8.1cm・1.0cm。胎土・焼成とも良好。390は龍泉窯系青磁皿である。口径は13.2cm、器高は4.3cm、高台径は6.2cm。内底見込みには双魚文が貼付されている。391は四耳壺である。耳は欠損している。口径8.4cm。器面には施釉しておらず全面露胎である。胎土は明褐色白色。

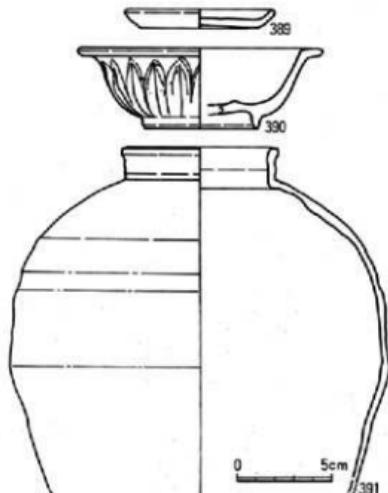


Fig. 264 出土遺物実測図 (1/3) (SX405)

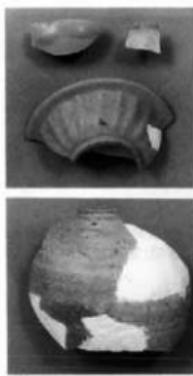


Fig. 265 SX405出土遺物
(1/5・1/8)

6、第6面の調査

概要 第6面は第5面を30~50cm掘り下げた面にあたり、標高1.0~1.3mを測る遺構検出面である。現地表面からは-5.5mほどを測る。第6面は、第5面で確認されたSG354が作られた時期の上限の確認、SG354の基盤層の土層堆積状況の把握、およびその当時の周辺の地形復元を調査の目的として掘り下げた。調査区全体を掘り下げた後、東西方向のトレンチを1本調査区中央に設定し土層の観察を行なった。

検出面の土層は、主として暗灰色~黒灰色砂質土である。第5層までは調査区中央を境にして東西で土質の違いがみられたが、この面から下層は全体的に自然的な堆積による黒褐色~黒灰色粘質土と砂層が互層になり調査区全体に均一に堆積している。検出面の層位的な位置を北壁の土層断面でみると、第94~101層の下面あたりのレベルに相当する。

土層の堆積状況からみると、SG354が作られた当時の調査区周辺の地形は緩やかに北西に向かって落ちる斜面の変換点に位置していたと思われる。ただし乾燥した土地ではなく、やや湿润で軟弱な状況であったことが推定できる。SG354を作るに際してはかなりの盛土や整地作業が必要であったものと思われ、その基底面にあたる褐色土（真砂土・赤褐色焼土の混合土）の厚い堆積（約25~30cm）とその上に施工された版築状の堆積はそれを物語るものであろう。



Fig.266 第6面完掘状況（南西から）



Fig.267 第5面検出SX402上部砾石群
(北から)

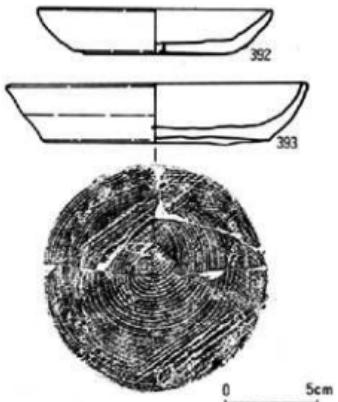


Fig.268 出土遺物実測図 (1/3) (SX402)



Fig.269 SX402発掘状況 (北から)

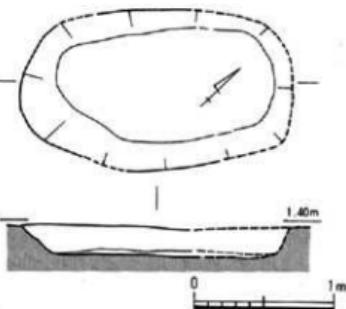


Fig.270 SX402平面及び断面図 (1/40)

造構はSG354下部から土壌が1基検出されたのみである。

出土遺物は、土師器、瓦器、瓦質土器、国内産陶器などのほかに輸入陶磁器が出土しているが、中国産の青磁が全体の出土量に対して大きな比率を占めている。

第6面の年代観はおおむね中世半ば前後である。

SX402 (Fig. 267~270) 調査区東側に位置する。SG354下部で検出された。SG354の上限を決定付ける造構である。砾石がまとまって掘方の上面で出土した。掘方の平面形は椭円形で、長軸1.97m、短軸1.18m、深さ0.24mを測る。埋土は暗灰色～暗灰褐色砂質土である。土師器壙が掘方中央近くで出土した。土壌墓もしくは祭祀造構の可能性がある。

出土遺物 土師器、銅錢（元豐通宝）が出土している。392・393は土師器壙である。392は上面の砾石中から出土。口径・器高は392が12.5cm・2.4cm、393が16.4cm・3.2cmを測る。いずれも底部に板目压痕を残す。

SX392出土遺物 (Fig. 271・272) 包含層SX392はSG354の下部に堆積している黒灰色砂質土である。東から西に向かって緩やかに傾斜しながら堆積している。土師器、土師質土器、白磁、石鍋、青磁、青白磁が出土している。

394～397は土師器皿である。口径・器高は8.1～8.4cm・1.2～1.5cm。397の底部には板目圧痕が残る。398は土師器壊である。口径は13.0cm、器高は2.3cmを測る。焼成は不良。399は龍泉窯系青磁碗である。高台見込みに墨書きが残る。

SX404出土遺物 (Fig. 273・274) 包含層SX404はSG354の下部に堆積している黒灰色～黒褐色砂質土層である。SX392の下部に相当する。東から西に向かって緩やかに傾斜しながら堆積している。土師器、瓦器、土師質土器、綠釉陶器、白磁、青磁、青白磁、石鍋、石錐、砥石、釘、銅鏡、鉄滓、獸骨などが出土している。

400～404は土師器皿である。口径・器高は8.6～8.9cm・1.0～1.5cm。402・403の底部には板目圧痕が残る。いずれも焼成良好。405・406は壊である。口径・器高は12.1cm・2.1cm。胎土・焼成良好。407は綠釉陶器片である。緑色～黄緑色の釉が厚く器面全体にかかる。高台か。408～411は白磁碗・皿である。いずれも墨書きが底部もしくは高台見込みに残っている。412～414は青白磁合子である。417・418は白磁皿である。419は龍泉窯系青磁皿である。417は内底の釉を輪状に掻き取っている。418は口禿。419内底にはヘラ片彫りの草花文が施されている。415・416・420～424は白磁碗である。415・421は口禿である。416の内面には白堆線が引かれる。420は内底の釉を輪状に掻き取っている。425・426は龍泉窯系青磁碗である。



Fig. 271 SX392出土遺物 (1/5)

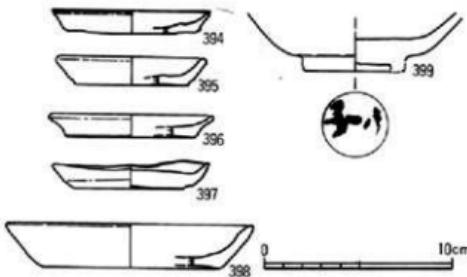


Fig. 272 出土遺物実測図 (1/3) (SX392)

SX422出土遺物 包含層SX422はSG354の下部に堆積している黒灰色～黒褐色砂質土層である。427は瓦器碗である。口径・器高は17.0cm・5.6cm。高台径は6.7cm。体部中位で弱く屈曲している。428は須恵質の小碗である。口径14cm。429は東播磨系の捏鉢である。口径28.4cm。430・432～434・438～441は白磁碗・皿である。441には墨書きが残る。431

は黒釉天目碗である。436・437は青白磁合子である。435は同安窯系青磁碗である。

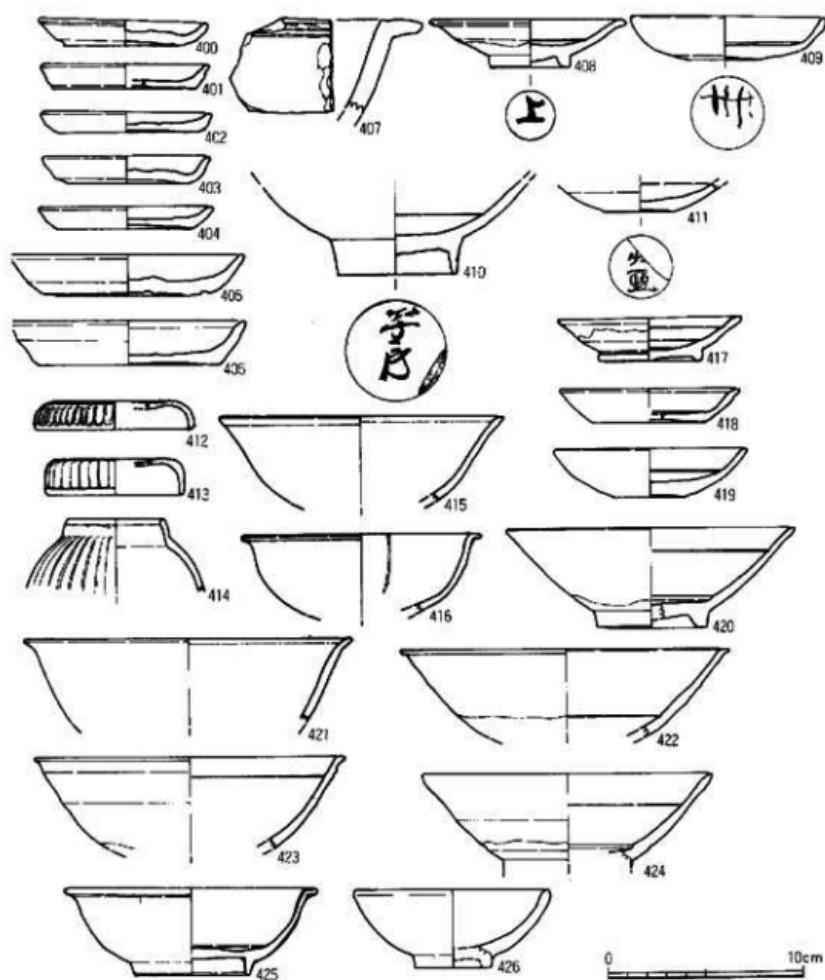


Fig.273 出土遺物実測図 (1/3) (SX404)



Fig.274 SX404出土遺物 (1/5)



Fig.275 SX422出土遺物 (1/5)

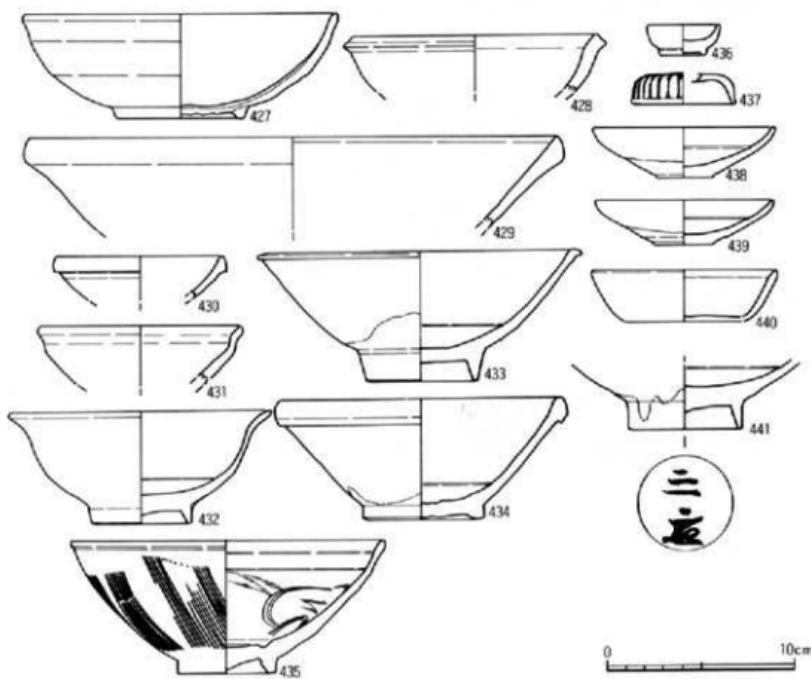


Fig.276 出土遺物実測図 (1/3) (SX422)

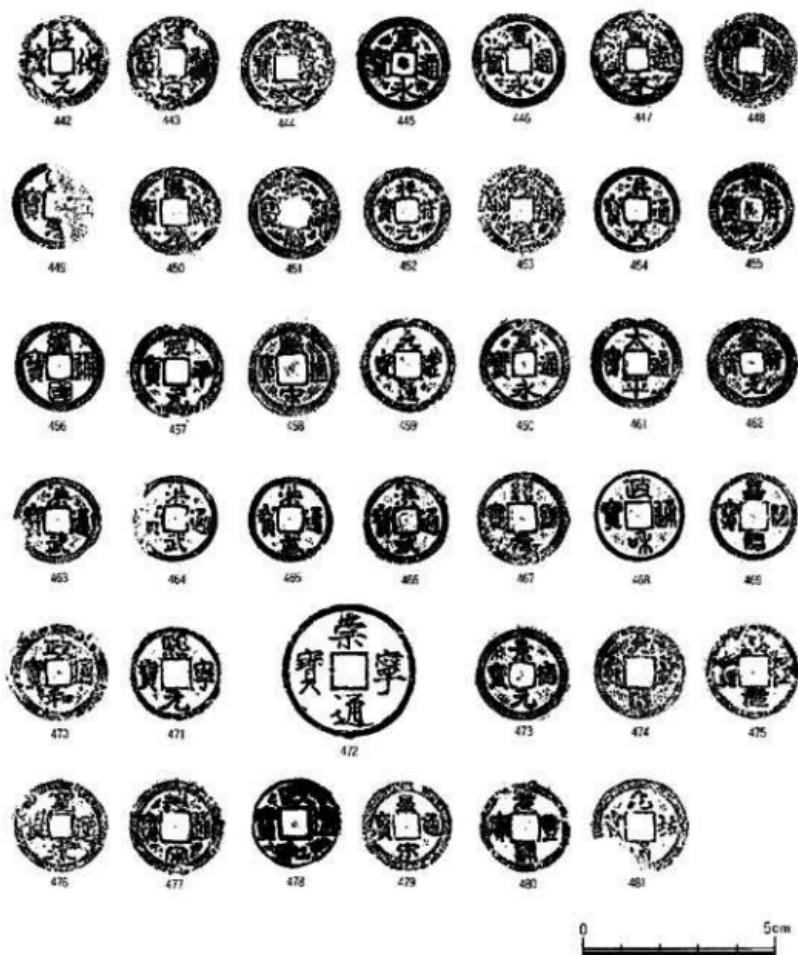


Fig.277 各遺構出土銅錢拓影 (2/3)



Fig.278 各遺構出土土鈴 (1/4)



Fig.279 各遺構出土土人形 (1/5)



Fig.280 各遺構出土土人形 (1/5)



Fig.281 各遺構出土土鎌 (1/5)

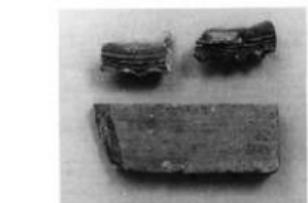


Fig.282 各遺構出土瓦 (軒平瓦・磚) (1/5)



Fig.283 各遺構出土瓦 (軒丸瓦当) (1/5)



Fig.284 各遺構出土硯・礎石 (1/5)



Fig.285 各遺構出土滑石製石鍋片 (1/5)



Fig.286 各遺構出土滑石製石鍤 (1/5)



Fig.288 各遺構出土かんざし・紅皿・矢はず (1/5)

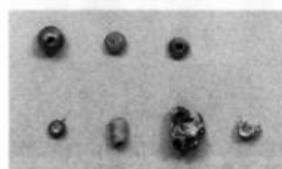


Fig.287 各遺構出土ガラス小玉 (3/4)

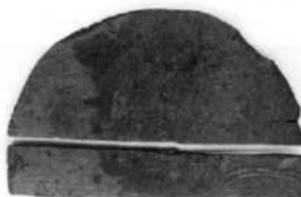


Fig.289 曲物底板

発生地	Fig.No	遺構No	遺物No	銅 錢	初鑄年(元号・西暦)
1	277	001	00442	淳化元宝	五至淳化元年(990年)
1	277	053	00445	寛永通宝	寛永13年(1636年)
1	277	062	00447	" "	"
3	277	131	00451	洪武通宝	洪武元年(1368年)
3	277	131	00452	祥符元宝	宋史祥符元年(1008年)
3	277	195	00453	洪武通宝	洪武元年(1368年)
4	277	304	00456	復國通宝	顯德六年(955年)
4	277	304	00457	咸平元宝	真宗咸平元年(998年)
5	277	354	00458	熙寧通宝	寶元之年(1029年)
277	413	00461	太平通宝	太平興國元年(976年)	
277	414	00465	洪武通宝	洪武元年(1368年)	
277	416	00466	" "	"	
277	416	00467	順聖元宝	順聖元年(1094年)	
277	417	00468	政和通宝	徽宗政和元年(1111年)	
277	418	00470	" "	"	
277	422	00471	熙寧元宝	熙寧元年(1068年)	
277	422	00472	崇寧通宝	崇寧元年(1102年)	
277	423	00473	豐祐元宝	真宗豐祐元年(1004年)	
277	424	00475	政和通宝	徽宗政和元年(1111年)	

発生地	Fig.No	遺構No	遺物No	銅 錢	初鑄年(元号・西暦)
1	277	032	00443	皇宋通宝	寶元2年(1039年)
1	277	037	00444	寛永通宝	寛永13年(1636年)
2	277	061	00446	" "	"
2	277	120	00448	皇宋通宝	寶元2年(1039年)
3	277	121	00449	□□光宝	
3	277	121	00450	商寧光宝	熙寧元年(1068年)
3	277	196	00454	洪武通宝	洪武元年(1368年)
3	277	197	00455	祥符元宝	宋史祥符元年(1008年)
6	277	402	00459	元豐通宝	神宗元豐元年(1078年)
277	408	00460	寛永通宝	寛永13年(1636年)	
277	413	00462	祥符元宝	宋史祥符元年(1008年)	
277	413	00463	洪武通宝	洪武元年(1368年)	
277	413	00464	" "	"	
277	417	00469	嘉祐通宝	仁宗嘉祐元年(1056年)	
277	423	00474	元祐通宝	元祐元年(1085年)	
277	423	00475	□□光宝		
277	423	00476	寛永通宝	寛永13年(1636年)	
277	423	00477	皇宋通宝	寶元2年(1039年)	
277	424	00479	" "	"	
277	424	00480	元豐通宝	神宗元豐元年(1078年)	
277	424	00474	元祐通宝	元祐元年(1085年)	

Tab.2 出土銅錢一覧表

第Ⅳ章 おわりに

第76次調査地点は、博多遺跡群の中央東側に位置しており、いわゆる「博多濱」と「沖の濱」と称される二つの砂丘の陸橋部分の南東部にある。地形上は御笠川（石堂川）の氾濫源に向かって北西へ低くなっている傾斜地で、調査区中央付近がちょうど地形の変換点である。この地点は故中山平次郎氏の論考以来「袖の濱」と比定されていた一帯の南側に接している。「袖の濱」の比定問題については、地下鉄呉服町工区の調査によって、11世紀後半にはすでに陸化していることが明らかとなり、その説は再検討を余儀なくされてはいるが、「博多濱」の地形史の復元にとっては重要な地点にあたっている。また調査地点は、聖福寺境内域の北西縁部に接しており、中世前期から後期における境内域の復元、博多の中世から近世における町割りの復元にとっても重要な調査地点である。

こういった点を踏まえながら、調査によって明らかとなつたいくつかの成果についてまず簡単にまとめておく。

1、第1面・第2面においては、主として江戸期の遺構・遺物が出土した。遺構の配置からみて、調査区は2軒の屋敷地に重複する地点に相当している。検出された遺構のなかでは、特に太閤町割りの東西方向に沿う江戸後期～末期の下水排水施設が注意される。井戸や埋壺の配置からみて屋敷地の境に位置すると考えられ、屋敷地の「庭」に相当する調査区西北部で生活残滓の廐棄用土壙が分布することも併せて考えると、この期の博多の屋敷地の規模と敷地内における空間利用の形態がある程度想定できるものと思われる。

2、第3面においては、中世末期から江戸前期頃の遺構が確認できた。井戸SE120および倉の基礎と考えられるSH121は太閤町割りに方向性を規制されながらも、第1面・2面と比べ路地側に接しており、江戸後期の屋敷地の配置とはやや異なる在り方を示している。

3、第4面においては中世後期～末期にかかる遺構が確認できた。ただし一部江戸期のものも含まれている。掘立柱建物や溝は明らかに太閤町割り以前の方向性を示しており、この時期には第4面から5面で確認された道路または築地塀と思われるSG354の範囲を越えて、さらに「博多濱」北西縁部まで町域がかなり拡大していたことがわかる。大庭康時氏は、博多遺跡群の他の調査で検出された道路の分布からみて東西に168～171m、南北に63～66mの大街区を想定し、その中に大小の溝で区画された屋敷地の存在を考えている。掘立柱建物と溝の構成はそれを裏付けるものかもしれないが、調査地点は宮本雅明氏によると中世末期の聖福寺境内域に含まれる屋敷地である。寺内町における独特の町割りが存在する可能性が遺構の分布上から考えられた。石組遺構は調査区中央に集中的に分布する傾向があった。これらの遺構を境にして

東西で対称的な土地利用をしていた可能性がある。

4、第5面と6面では道路または築地の基礎部分と考えられる遺構が確認された。また、当該地点では、鎌倉時代中頃から後期までは湿润でやや不安定な地点であったことが確認できた。これは先の地下鉄呉服町工区の調査結果とはやや矛盾するが、陸化の進行状況が地点によって異なっていたものと思われる。

以上見てきたように今回の調査では、鎌倉時代から近世江戸期までの各期の遺構・遺物を確認することができた。なかでも第5面で確認されたSG354は、その性格と方向性からみて、聖福寺の境内域の推定と、中世「博多」の町割り復元を考えるにあたって特に重要なものである。ここではSG354を主に取り上げ、その敷設時期と使用期間および性格について、周辺の調査例も踏まえながらみてゆきたい。

SG354の敷設時期と使用期間

SG354 (Fig. 240~250) は南北に走る道路または築地塀などのなんらかの構造物の基礎地盤と考えられる遺構である。南北に長さ5.3m、幅2.8mの規模で第3面から第5面にかけて検出され、第6面においてはその基盤層が確認された。主軸線は磁北から東へ約39°偏っており、太閤町割りをよく留めているといわれる現在の町筋とは約6°~7°ほど西に偏っている。ちなみに第4面の柵列SA01・02とはほぼ等しい。

SG354の上限については、基底部で確認された黒褐色～黒灰色砂質土と土壌SI402からの出土遺物からみて鎌倉時代後期～末期以降に作られたものと判断される。実年代では14世紀前半以後と思われる。

SG354を直接切る遺構はSA02、SE352、SI384~386、SP396などがある。SA02は、SG354の上部構造物の可能性がある柱穴列である。SE352は室町時代後期～末期にかけて使用された井戸である。井戸をこの地点に設けるということは、その時点ですでにSG354の持っていた機能と役割は失われ、それに規制されない新たな屋敷とそれに付属する井戸等の施設が設けられたことを物語っている。なおSE352は、室町末期から江戸時代前期にかけて使用されたSE120にその役割をゆずっている。これらから考えると、SG354は室町時代後期頃に廃絶したことが推定される。実年代では15世紀後半頃と思われる。

SG354の性格と周辺の道路遺構との関係

SG354の構造についてはすでに述べたので省略するが、最大の特徴は、版築状の盛土整地と土留めの板石列と杭列および矢板列である。またSA02が基盤面に連して付設されているという点である。確認された範囲が狭く、また遺存状況が必ずしも良好とはいえないために断言はできないが、こういった構造を示すのはまず道路が考えられる。周辺の調査で類例を求めるに、築港線第1次調査でみつかった道路や第35次調査でみつかった幅6mの幹線道路、第40次調査



Fig.290 第25次調査と周辺道路構造分布図 (1/2,000)

の側溝を有する道路などが主なものとしてあげられる。これらのほかに、築港線第3次、第26次調査などの道路側溝と考えられる溝などがある。

築港線第1次調査でみつかった道路は、14世紀前半のもので路面を舗装し、側溝を持っている。上面には側溝を覆って数回かさ上げした整地層が認められ、ある時期にいったん廃絶された後に、16世紀末頃にその上部に新たな道路が作られている。道路主軸は北から東へ約35°偏っている。

第35次調査でみつかった幅6mの幹線道路は、13世紀末～14世紀前半に推定される焼土層上に作られている。両側に土留めの横板と杭を用いた側溝を有す。この道路は天正15年(1587年)の太閤町割りの直前まで継続的に使用されており、2.5mもの厚さでかさ上げしながら10回以上の側溝工事を行なっている。この道路は先に述べた舗装道路と交差し、砂丘の尾根筋と平行する方向性を有す。道路主軸は各時期によって微妙な変化をみせるが、磁北から西へ約61～66°ほど偏っている。作られた当初にあたる13世紀末から14世紀前半においては、磁北から西へ約61°を測り、SG354とほぼ直交していることは特に注意される。

第40次調査では側溝を持つ道路が検出されている。道路は当初幅3.8mで、のちに5.4mに拡幅している。側溝は網代による土留めをしており、基幹道路の一つともいえる規模を持つ。14世紀初めに作られ、16世紀末まで継続して使用されている。主軸は磁北から東へ約40°偏る。

以上の例をみると、作られた時期、土留めの方法、個溝の形状などに共通性が見られ、またいずれも一定の方向性を持つ道路網であることがわかる。これらの位置関係や街区の在り方についてはすでに述べたように検討されているのでここでは触れないが、いずれにせよSG354はこれらの道路と密接に関わる遺構である（Fig. 290）。

しかしSG354ではこれらの道路と若干異なる部分がその基盤に看取できる。すなわち版築によってかなり丁寧な基礎作りがなされていること、扁平な礫石を土留めに用い、内側をさらに杭列と矢板で補強している点である。また基盤に第5面で確認された擋列SA02を伴っている可能性がある点である。以下ではいくつかの築地や回廊の調査例をみてゆく。

SG354の時期と比べやや遅るが、大宰府政府跡の調査では回廊・脇殿・中門・築地などの調査で構造物の基壇部分が調査されている。築地は上層と下層の時期の異なる東西方向の基礎部分が確認できた。残りの良い下層築地は礫石上の寄柱を持つ本瓦葺で、寄柱礫石、基壇側石、築地本体部分の掘り込みと詰め石が検出されている。築地基底部の幅は2.2m、基壇幅は4.4mを測る。築地界の内外にはそれぞれ約1.1mの犬走りがつく。基壇側石は角礫面を垂直に揃え化粧積みとし、内側には裏込め石がみられる。

大宰府周辺第21次調査においては觀世音寺中心堂宇を囲う築地の調査が行なわれ、築地基礎部分の版築が確認されている。土留めについては不明である。

久留米市筑後国跡の第77・85次調査では7世紀から8世紀にかけての官衙跡が確認され、それを囲む3条の築地堀と大溝が検出されている。築地堀はいずれも残りが悪く基底部の地業の痕跡を若干残すのみである。これに伴う柱穴列が一条検出されており、板屏の可能性もある。

鎌倉市鶴岡八幡宮境内域の3地点における調査では、数時期の地業版築面が確認されそれに伴う建築物、井戸などが検出されている。直会殿用地の調査では大塔の礫石基礎、溝などの他に、回廊の調査が行なわれている。回廊の基礎部分は幅が2.3m前後で確認され、版築された土壇の両側に、土留め用の板石を基盤面から敷いている。両サイドには雨落ち溝が付設されている。回廊そのものの構造物については不明である。

築地は後世の搅乱によってかなり原形を失っているものが多いために発掘ではその具体的な構造を明確にしがたいが、いずれにせよ丁寧な盛土と版築により基盤を作り、石を使って土留めがなされているものが多い。堀の構造については不明なものが多い中で、大宰府政府跡の調査例と筑後国府跡の第77・85次調査例は比較的その構造がわかる例で、SG354の構造を推定するには好例である。

SG354は以上みてきたように、道路の可能性も有しているが、築地堀等の何らかの構築物と見成したほうが妥当性があるようと思われる。周辺の道路が中世を通じて継続的に利用されたのに対して、第4面～3面以上ではすでに廃棄され、屋敷地にとって代わられている事実に注意したい。根拠としてはやや弱いが、道路の可能性が低いことの消極的な根拠となる。

聖福寺北西部の境内域復元とSG354

SG354を解の基礎部分と想定した場合、その主体的な施設が次に問題となるが、検出された造構の範囲が非常に限られた狭い範囲であるために現段階では一つの問題提起といふ。

SG354の主軸線は磁北から東へ約3°偏っており、現在の町筋とは約6°～7°ほど西に偏っている。一方、現在の聖福寺の大雄宝殿、楼門、山門を結ぶ中軸線は北から東へ約36°偏っている。両者は必ずしも平行ではないが、ほぼ方向性は一致しているといえる。なお現在の聖福寺は天正17年（1589年）に小早川隆景の援助を受け、住持玄熊が再興したもの を基本としており、消失した天正2年（1574年）以前の姿をほぼ留めているといわれる。

さて、先ほどみた周辺の道路は、SG354も含め、第35次調査で検出された基幹道路にはば方向性を規制さ

れ、大小の溝とともに「博多濱」に展開している。この町割りは、おそらくは自然発生的に12世紀後半頃から「博多濱」と呼ばれる古砂丘の主軸に沿う町筋が徐々に形成され始め、14世紀前半頃に確立し、太閤町割り直前まで継承されてゆくが、最終的にその基軸となったのは聖福寺の境内の方向性であることはほぼ間違いないと思われる。

こういった点を踏まえると、SG354は聖福寺の西北部を画する築地塀の可能性がかなり高くなる。SG354と伽藍主軸線の距離は約277m（± 2 mの誤差を含む）を測り、大雄宝殿から山門間の距離97mを1町として計算すると約2.86町となる。古代尺1 = 町108mで計算すると2.56町となる。いずれも整数とはならないが、使用尺の抽出が今後必要となろう。今後の検討課題としたい。いずれにせよ北西部の区画の地形上の制約となったのは「蓮池」であったと思われる。SG354の延長する復元線は、湿地状の土層が厚く堆積していることが確認された第15次調査区

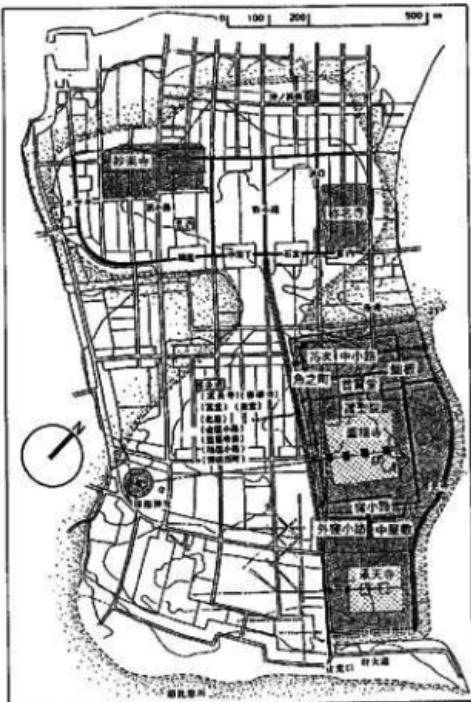


Fig.291 中世後期博多推定復元図
 (宮本雅明1989より転載)

の東側を通過しており、それなりの説得力がある。

宮本氏の復元案との対比

中世から近世の都市の空間形成の過程を宮本雅明氏は、文献と絵図および考古学的成果をもとに復元されており、特に狹義の博多の町である聖福寺境内および寺内町の復元は多くの問題を提起している。ここでは宮本氏の復元案と考古学的な成果を突き合わせながら、聖福寺北西部の中世後期における復元を検討する。

宮本氏の北西部の築地塀の復元線は、先のSG354からの延長線よりも西へ約30mずれた位置に相当する。また南西隅は現三井ビルの南西角近くにあたる。宮本氏案の考古学的な検証は今後の発掘調査における課題といえるが、このずれはおそらく次の理由によるものであろう。

すなわち、宮本氏が復元された境内域は、SG354が15世紀後半に代に廃絶され新たな境内域の拡張が図られたと考えられる第4面（SB01・02、SD214などの遺構群）から第3面の一部の遺構群に該当する時期のものと思われる。言い換えると、聖福寺西北部を画する築地塀は、14世紀前半から15世紀後半にかけてSG354の位置であったものがなんらかの理由で廃絶され、その後「蓮池」の埋立てとともに屋敷地の拡大が進み、16世紀になって「聖福寺古園」中に境内域を画す新たな築地が成立したことになる。蛇足ではあるが聖福寺内の町の発展は、地形状の制約から西北側に伸びざるを得なかったことも物語っており、境内の町域が伽藍の主軸に対して西北側に肥大している状況はこのことを明らかにしている。

おわりに

以上第4～5面にかけて検出されたSG354を中心として、聖福寺北西部の中世における在り方にについてみてきたが、検討すべき課題は多く残されたままである。特に調査区にかかった中世「魚之町」における屋敷地の在り方については若干の見通しを述べただけで、あまり触れることができなかつた。

創建当時から近世にかけての聖福寺と博多の町の関わりをより細かく、ダイナミックにとらえるためには、聖福寺自体の考古学的調査も将来的には必要であろうと思われる。また文献史学と発掘調査成果をより密接に摺り合わせることが今後とも必要であるといえる。

なお出土遺物についてはかなりの遺漏が多く、この地点での特質を引き出すまでにいたらなかつた。これらについては別稿で検討したい。

博多40

—博多遺跡群第76次調査の報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第332集

平成5年(1993) 3月31日
発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1
印刷 大成印刷株式会社
福岡市博多区東郡3丁目6-62

